

---

# アイドルッ！

末吉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アイドルッ！

### 【Zコード】

Z6917X

### 【作者名】

末吉

### 【あらすじ】

ある意味特殊な体質を持つた主人公が、幼馴染によつてアイドル育成高校に入学し、そこで奮闘するお話。キャラが濃すぎる人たちが多いドタバタコメディ。

## プロローグ ～自専の近況～（前書き）

常識ではかんづなうでください。

プロローグ ～自分の近況～

突然だが、諸君はアイドルやタレントなどについてどう思う？たいていの意見としては、あこがれや、なりたい職業だと思う。しかし、俺の意見としては、よくやつてられるな、とか、なりたくはないだな。何故って？そりゃあ、目立つからだよ。

なせこんなことを言つたかといふと、俺はしたくもない学園に無理矢理入学させられて、学園生活を送つてゐるからだ。お前はどこの学校にいるんだ?と訊きたくなるだろ。今から順に説明してやる。俺が入学した学校の名は、アイドルやタレント、俳優みたいな表舞台で活躍する人から、大道具みたいな表舞台には出ない人たちを教育・育成・輩出している私立スミレ学園。この学園ができた理由が、6年ぐらい前に亡くなつたある有名な俳優が遺言で、『私の全財産は、これから俳優などになりたい人たちを育成できる学校のためにつかつてくれ。』みたいなことを書いていたかららしい。しかも、学費は普通の公立よりちょっと安い。・・・・・・・・どんだけ金持つてんだよ。

凄いのは、毎年毎年入学希望者が多いのにもかかわらず、入試などではなく、書類審査だけしかない。要は、書類を送つたら合格通知か不合格通知のどちらかが送られる仕組みである。ちなみに、この学園の倍率は毎年十倍くらいになる。よくそんな学園に合格できたなと思うだろうが、俺は送つた覚えがない。そして、こんなことをしたのは間違いなくあいつである。

本宮いつき。俺の幼馴染で、家がお金持ちの、いわゆる御曹司である。顔は、大体の予想を裏切らないで、美形。ただし、若干女っぽい顔立ちをしている。それでも女子にはモテるんだがな。いつも笑つていてるが、顔の事をからかわれると、翌日にはからかつた人がいなくなる。ちなみに、俺も何回かうつかり言つてしまつたが、消される、ということはなくむしろ、ものすごくいじめられた。具体的

には、あいつの印と喧嘩したり、山の中に放置されて、一人で脱出したりしたな。……他にもあるが、思い出したくないので割愛しておく。

ともあれ、ここでのせいでこんな学園に入学しなきゃならなくなつた。その経緯は、

? ある日、家の郵便受けの中に一つの封筒が入つていた。

? 那を家中であける。

? 合格通知が入つっていた。

となる。俺は普通に近くの公立高校に通おうと必死で勉強していたのに、この通知が来たわけだ。その時に俺は、反射的に本宮に電話した。

『何？ つとむ？ 何か用？』

「とぼけるな。お前のところにも合格通知が届いてんじゃねえのか？」

『合格通知……？ ああ！ そりいえば届いてたね、そんなの。ん？ お前にも、つて事はつとむのところにも来たんだね！ ？ やつたね！ ……また一緒の学校だよ！ ……』

「そうか。いや、それはこの際どうでもいいが、生憎俺にはこの学校に書類を送つた覚えがない。となるとだ、いつき、てめえ勝手に送りやがつたな？」

『やっぱりられちゃったか。』

「そうか、やっぱりお前だつたんだな。今すぐ合格を取り消したいんだが、どうすればいい？」

『へ？ 知らないの、つとむ？ 合格通知が届いたら取り消しはあるか、退学も出来ないんだよ？』

「は？」

『やっぱり知らなかつたんだね。という訳で、ちよつとしたら入学に必要な書類が届くだろうから、それ書いて郵便局に出しておいて

ね。』

「おい、ちょっと待て。勝手に送られた拳銃に、退学も出来ないだ  
と?」『うちの都合も考えやがれ! ! ! 』

『お父さんたちも喜ぶだろうね。息子がテレビに出たら。』

『なんだその締め方!?俺はちつとも嬉しくねえぞ! 』

『つるさいなあ。他に言いたいことがあるだろうけど、それは明日  
に聞くから。』

「おい! ちょっと待て! おい! . . . . . 切りやがったな、  
あいつ。」

その後、この通知を妹に見つかり、両親がそろって『祝いだ! ! ! 』  
とか言つてだいぶ奮発したのか、割といい値段の肉を買ってきて焼  
肉をした。その翌日俺は、中学の担任につきが送つたせいでこの  
学校に合格したと合格通知を持つて告げると、『よかつたじやない  
か。お前もテレビに出れるぞ。』と言つてきやがつた。人の気も知  
らないで何を言つてやがる、と思つてしまつたが、口には出さなか  
つた。

さて、長々と説明をしてきたがお前は誰だ、と感じているだろう。  
他の紹介ばかりで自分の事を忘れていた。

俺の名前は八神つとむ。曰つきが親と似つかないとよく言われる  
ほど鋭く、容姿だけを見ると、不良とよく見間違えられる。趣味は  
一人で散歩すること。特技が家事全般。夢が、一人旅と、平穏に  
暮らすこと。後は、俺の体質について説明するだけなんだが、いい  
加減億劫だから、これは後程説明しよう。

では、始めるか。この話　俺とこの学園の奴らとの学園生活を。

## プロローグ　～自分の近況～（後書き）

これからもよろしくお願いします。

第一話～田舎こせこせこせ～（前書き）

ベタすぽるの王様こせ～いひですか？

第一話～出会いはいつも巻き込まれて～

ここは都心からちょっと離れていたかあき町、の隣のくれな町。この町には私立スミレ学園という、アイドルや俳優など、テレビ関係の人を輩出している学園があるので有名である。その町で、一人の少年が自転車を爆走させていた。

「ふう。このくらいなら何が起こっても余裕があるな。そのままスムーズに行けたらいいぜ。」

腕時計を確認しながら咳く俺。なぜ急いでいるのかって？それは、これからバイトがあるんだよ。遅れたら、時給の関係上確実に減らされる。それだけは避けなければならない。そう思つて必死にペダルをこいでいたのだが、

「いいだろ、これから、なあ？」  
「や、やめてください…！」

「は、放してくださいー！」

と、前方で不良に絡まれていてる女子を発見。しかも、完全に道をふさいでいるので、右も左も空いているスペースがない。またか、と思ひながら俺は、

一  
邪魔だ

「ハセウ...」

不良どもを思いつきり轢いた。その反動で自転車の勢いがなくなつたが、まだ時間はある。そう思つて、俺は立ち止つた。

「テ、テメエなにしゃがるんだ！！」

「そうだ！！何の躊躇いもなしにぶつ

「ああ！？うるせえな。邪魔だ、って言ってんだろうが！」

んのか！？

そう言いながら振り向く。すると、

「お、お前は・・・・・・・・！」

「も、もしかして・・・・・・・・『皇帝』様ですか？」

「そうだが・・・・・・・・恥ずかしいな、その呼び名。つたく、

どこまで広がっているんだ、その名は。」

俺を見た不良どもが、恐れおののいていた。全く、そんなのこっち

じゃ呼ばれたことなかつたのに。ため息をつきながら俺は、

「さつさと帰れ、お前ら。この時間帯だと目立つぞ。」

今の時刻は六時一十分。俺は一つ目のバイクを終えて、二つのバイクへと移動中にこの現場に遭遇した。正直この時間だとギリギリ

のような気がするが、まあ、何とかなるだろ。

でも万が一の場合に備えてさつさと行きたいので、

「おい。」

『はツ、はい！』

「さつさと帰れ。いいな。」

『じょ、了解しました！』

と、軽く睨んだだけで不良たちは逃げ出していった。よし、このま

まバイク先に行こうか、と自転車のペダルをこじりとしたら、

「あ、あの、た、助けてくれて、あ、ありがとうございます！」

と絡まれていた女子がお礼を言った。・・・・・・この時の恰好を見る限り、おそらくは夕飯の買い物を終えて、帰ろうとしたら絡まれたんだな。と、どうでもいいことを考えながら俺は、

「あつそ。じゃあな。」

と言つて、そのまま走り出した。それが意外だったのか、

「え！？ ちよつ、ちよつと待つてください！…せ、せめて名前だけでも！！」

と後ろの方で叫んでいた。いつにもいろいろあるんだ、かまつてられるか。と、後ろの方で叫んでいた女子に対して、心の中でそう言つた。

「お疲れ様でした！！」

「一つ目のバイトを無事に終えて、今日は残すところ帰るだけとなつた。しつかしきついた、このバイト。もうこの生活を始めて十日になるが、未だに筋肉痛がくる。日付としては、四月二十一日火曜日。時刻は午後十時を少しまわったところ。また妹が待つてゐるのか、そう思いながら家に帰つた。

「ただいまー。」

家へと帰る途中、何事も起こらなく無事に着けた。疲れたから風呂入つて寝よ。そう考へて俺は一階に行こうとしたら、

「お帰り、お兄ちゃん。今日もまたバイト？そんなにお金が必要なの？」

と、妹がリビングから顔を出して訊いてきた。

『この名前は、八神茜。今年で中三になる俺の妹だ。ただ、これは俺の本当の妹じゃない。その理由は、俺が小学生になる前に両親が、『これからこの子がお前の妹だ。』と言つてきた。その当時俺は、母さんがまだ生んだのかと思つたが、両親に事情を聴いた後俺は、世の中何でもアリなんだなあと感心した。その事情というのが、『散歩してたら孤児院があつてさ、その中を覗いたら、可愛いこの子が寂しそうに遊んでいたから引き取っちゃった。テヘッ』だそうだ。これが本当にできるのか、とこつこに訊いたら、

『法律上は問題ないよ。』

だそうだ。こうして、俺と茜はめでたく兄妹となつたわけだ。ちなみに、こいつの過去の事は、俺は何も訊いちゃいねえし、あいつも言つ気がねえから、今までいいと思つてゐる。余談だが、最近こいつは誰に見せたいのか、よくファッショング雑誌を見て、オシャレをしている。その度に俺は、こいつに『どうかな？』と訊かれてゐる。なんで俺にいちいち見せに來るのか疑問に思つたが、現状の問題があまりにもでかいため、そのことについては保留にしている。

「ああ。何かと必要なんだよ。」

「例えば？」

「昼夜だろ、本代だろ、あとは…………。」

「ええ！？あの本全部自分のバイト代で買つたの！？」

「昔は親からもらつた小遣いからだが…………って、ちよつと待て！？お前いつ俺の部屋に入つたんだ！？鍵をかけてくはずなんだが！？」

「え？お兄ちゃん、たまに鍵かけ忘れるよね？」

「なんだとつ！？」

しまつた。特に見られてヤバイものはないが、これからは時間に余裕を持つて行動しよう。

「…………今まで以上に。やつ決心した俺は茜に、元へ

「そろそろ一階に行け。そして寝る。」

と言つた。すると、

「お兄ちゃんが『お休み』つて、言つてくれないと寝ないもん。」

と、あらうじとか条件を出してきた。畜生！なんでそんなこと言わなきやいけねえんだ！

そう思いながら仕方なく俺は、

「分かつたよ。…………お休み、茜。」

と言つたら、

「お休みなさい！」

と、上機嫌になつて一階に行つた。あれで寝られるのか甚だ不思議だが、気にもいられないでの、俺も一階に上がつて自分の部屋で風呂に入る準備をした。

準備が終わつて下に降りると、

「おかえり、つとむ。」

「お前、バイトせつているからつて遅くないか？」「でやつているんだ？」

両親が、リビングで酒盛りをしていた。一応、両親の紹介をしておくか。親父の名前は八神すすむ。普通のサラリーマンである。ただし、喧嘩はそちらのヤクザどもを圧倒する。俺も何度か勝負したが、

たいていはボロボロにされる。昔より衰えた、と本人は言つが、今でこの強さなら昔ほどのがらいだったのかと思う。そして、お袋のハ神玲子。お袋は、何かというと俺に家事をやらせる。自分は専業主婦なのになんで俺にやらせるんだと訊いたら、『こいつもやつてゐるから。』と笑つて言いやがつた。なので、俺がいる時は問答無用で家事をやらされる。

まあ、そのおかげで得意になつたんだがな。説明としてはこれくらいいだが、俺の両親は体质の事は知つている。ついでにひとつ、いつきも知つてゐる。そろそろ俺の体质について話そうか。

俺の体质。それは、何事にも巻き込まれてしまふ体质だ。例えば、今日起こつた不良に絡まれた女の子と遭遇する。こんなことが、毎日のように俺の身に降りかかる。他には、一番古いのでは、ヤクザ間の抗争に巻き込まれたことが挙げられる。その当時俺は、両親とはぐれてしまつたために歩き回つていたんだが、その時に丁度抗争が勃発した場所にしてしまつたために巻き込まれてしまつたといふ訳だ。それ以降俺は、何かと事件やトラブルに巻き込まれてしまつことが多くなつた。その度に全部解決している俺は、いつきに『よく全部解決できるね。普通なら一つでも解決できただけでもすごいのに。』と言われた。それに関しては俺も同感だが、時々、交通事故に巻き込まれるんじゃないかと思つてしまつたりする。

…………現実にならなにように祈るか。

これで大体の説明は終わつたな。じゃあ、さつきの場面に戻るか。

「別に。大したところじやねえよ。つていうか、中学一年の時に小遣い止められたときに、

『高校に入つたら、バイトでもして小遣いためひ。』と言つてきたのはあんたらじやねえか。』

「そりだつたな。

「やうねえ。』

と、思いつきり他人事のように流す両親。おい。そのおかげで、中

「からかの頃に何にも買えなかつたじやねえか。そんな恨みを知らす、アーラ

「さつさと寝たらどうだ。明日も早いんだろ?」

「さうよ。寝たら?」「

「言われなくとも寝るが、その前に風呂だ。お休み。

『お休み。』

これで普段の一日は終わり。明日も早いことだし、さつさと寝るか。  
そして俺は、風呂に入った後に、自分の部屋のベッドに突っ伏して  
寝た。

「お兄ちゃん、起きなよ～。」  
「お兄ちゃん、起きなよ～。」

茜が起こしに来ていた。…………よし、まだ寝られるな。  
そう思いながら一度寝した。

そして、田覚まし時計が鳴る六時に俺は起きた。  
起きてみると、頬を膨らませた茜が田の前にいた。

「おはよう。お前がここにいることは、また鍵かけ忘れたんだ  
な。」

と状況の確認をしていたら、

「お兄ちゃん…どうして私が起こしに来たの無視して、田覚ましで  
起きるの…？」

茜が怒っていた。どうして、つてお前…………  
「自分で決めた時間までは寝たいから。それにお前、普段俺より先  
に起きないだろ。」

「ひっ。そんなにはつきり言われると反論しづらいよ。」

はつきりと言つてしまつたら、言ご返せなくなつた茜。それより……

「なんだ今日こんな早く起きたんだ?」

「ひ、秘密!」

目的を訊いたら、勢いではぐらかされた。…………まあ、別に  
いいが、それは。そう思つて俺は着替えようとしたら、

「え…? ちよつと、お兄ちゃん…? 私の田の前で着替える貯…?」

「ん? ……あ。じゃあ、ちよつと着替えるかい出でけ。」

「その言い方はあんまりじゃない?」

「じゃあ、どう言えど。」

「もうちょっとソフトに言つてくれればいいじゃん。」

「そんなことしてこむりに時間が無くなるから、やつれと出でけ。」

』  
と言つて、茜を部屋から追い出した。結局、どうしてあいつが早起きして、俺の部屋に来たのかは分からなかつたなと、考えながら着替えていた。部屋の外から、『お兄ちゃんの寝顔見れたし、別にいいかな。』と聞こえたのは、不思議に思わないと駄目だろうか。

「いってくる。」

朝食を食べて、学校に行く準備をし終えた俺は、自転車にまたがつて言つた。俺が通っている学校は隣町なので、自転車で行くと一時間位かかる。なので、毎朝七時には必然的に家を出ないといけなくなる。ちなみに、いつきはリムジン。格差社会つてこれで感じられるね。ただいつき 자체は、俺を乗せてもいいと言つているが、そうするとバイトに遅れる可能性があるので丁重にお断りしている。

「いってらっしゃ~い。」「頑張つてね、お兄ちゃん。」「気を付けて行けよ。」

と、三人が口々に言つてきた。・・・・・・・・・何事も無ければいいよな、本当に。

登校中は何事もなかつた。その一言に、俺はちよつとだけ感動しけたが、学校にいる間にまた厄介なことが起きそつだ、と考えてしまつたために感動が失せた。俺はいつも同じで自転車を置いて、自分の教室に向かつて行つた。

「おはよう、つとむ。」

「よう、いっか。」

教室に入つて自分の席に着いた時、いつきが俺に挨拶してきた。こいつは、席が自由なことをいいことに、俺の隣か、その周辺に座る。俺はとつと、最初に座つた時から変わらず窓際の席である。よじ。この学校に構造について触れるか。

この学校は、結構広い土地に建つてるので建物が色々とある。俺達がいるところが役者専門のところ。校門の正面の方にあって、別名『スターの館』。

この両隣には、林と体育館がある。そして俺達がいる校舎の後ろの方に、大道具やメイクなどを専門で学ぶところがある。

さてと、もう説明するのも面倒だし、元の場面に戻るか。  
「なあ、いつき。ちょっと相談があるんだが。」

「またあ～これでもう七度目だよ。」

「分かつて。だが、同じ道を通りたらまたすぐに巻き込まれちまう可能性があるんだよ。だから、こうやって相談してんだろ。」

二〇

۱۰۷

「えへと、昨日まではこの道だつたんだよね？」

「二三事」

「おお!! ありがとな。ハツモ助かるぜ!!

「どういたしまして。僕もいつも楽しませてもらひつてゐるからね、別

「うれしくなりなれど。

「それが無ければいいやつなんだけどな…………。」

こいつは、あまり人が寄つてこない俺に、子供の頃から一緒にいる。まあ、家が近かつたんだ、最初の方は。そのせいでちょっとした事件に巻き込まれたが、あいつにとつては楽しかつたらしく、その事件が解決した後に、

『話には聞いていたけど、つとめて面白い体質してるね。うーん・  
・・・・そうだ！これからも一緒にいてあげるよ。どうせ君、その  
日つきのせいで友達いなさそうだから。』

と言つてきた。しかもかなりいい笑顔で。それから、こいつは何か  
といふと俺と一緒にいる。それと、助けてもらつてもいる。高校に  
入つてバイトをしているのは、こいつのおかげと言つても過言では  
ない。

…………ふむ。こじだけを見ればいいやつ  
に見えるな、こいつ。

「実際いい人でしょ？」

「そこだけは反論させてもらひうぜ！！確かに良いやつではあるが、  
その分俺を色々と巻き込んでいるだろ！！」

「いいじゃん。僕は楽しめるし、君はいろいろと経験できる。バイ  
トみたいなものじゃん。」

「うむせえ！！何が『色々と経験できる』だ！！そのせいで変な  
通り名が付いちまつたじゃねえか！」

「皇帝、だつけ？あれには僕も驚いたね。でも僕が引っ張る前から  
呼ばれたみたいだよ？」

「まじでか！？」

嘘だろ。俺はこいつに連れ出される前からそう呼ばれていたのか。

その上に若干ショックを受けながらそのまま話していくと、

「あ、 もう午前中の『あれ』が始まるよ」

גָּדוֹלָה וְסִגְמָן

午前由  
ぐすりも

室を出た

『詠君は俺達が言う、あれ』が何がわからなかったら、『あれ』とは、役者にとって大切な体力や声の大きさ、滑舌などの基礎を徹底的にやることである。これは一年生は必ずやらないといけない。まあ、俺にとつては別にどうでもいいんだがな。

正直に言ひと俺はこの学校はいふこと自体が嫌だからだらう。がこの学校と一緒にいる限り、俺を必ず学校に連れて行くだらう。だから俺は、眞面目にこの学校に通つてゐるわけだ。

「次！！八神！！」

卷之三

2

今はその授業中。何をやつていてかって？確かに『十メートルの幅をいかに美しく思いつきり飛べるか。』だな。要は舞台と舞台の間の走り幅飛びだ。それくらいなら普通に飛べるんだが、問題は、『美しく』の部分。これに美しさなんて求めてどうするんだ？ そう思つ

「早くせんか！！」

と叱られた。うつせ。やればいいんだろ、やれば。若干キレそうになりながら俺は、

「だらりしゃ――――――」

と叫びながら、十メートルを余裕で越えていった。着地は普通にできたから、怪我しなくて済んだな。そう思いながら舞台から降りると、

「裏から出て行けと言つているだら――何度も言わせるな――」

と怒られた。なので俺は、

「わっかりましたあ～。」

と、とりあえず返事をした。直す氣なんてねえけどな。その返事を聴いた先生は、

「まあいい。次――本宮――」

「はい――」

次はいつきか。あいつなら無難にできるんだろうな。そう思つて見ていると、

「よつと。」

「す”じいぢゃないか、完璧だ――」

あつさりとクリアした。しかも、先生の奴が言つ『美しく』までクリアしやがったみたいだな。あいつは超人か、と疑問に思えてしまつても仕方がないような気がするな。そう考えていたら、

「失礼な。僕に言わせると、君の方が超人だと思うんだけど。」

「うおつ――いつの間に――？」

いつの間にか、いつきが俺の目の前にいた。その口についてはツツ「まないが、

「お前、人の心が読めるのか！？」

「付き合いが長いからぢゃないかな。」

と、至極あつさつと答えるいつき。それでもす”じいぢゃん。そう思つていると、

「よし――今日ほ”れまで――午後からの授業を寝ないで受けてくれ――！」

と、締めの言葉を言つていた。どうでもいいぜ、そんなこと。聞きた  
流しながら、そんなことを思った。

「相変わらず混んでるね～、ここは。」

「普通じゃないか？ 食堂なんだから。」

そう。ここは食堂である。ここは、一年から二年までとたくさんの  
生徒が利用する。ちなみに購買という手もあるが、あそこはスーパー  
のタイムセール並みに混むだろうから、大人しくここを利用して  
いる。

察しのいい奴は、これで俺達は弁当を持つてきて来ないんだなどわ  
かるだろ？。いつきは、家が家なので弁当がかなり豪華になるから  
弁当は作つてもらつてないと言つている。俺はというと、母さんが  
『あんた、自転車で通学するんでしょ？ だったら弁当作つたら中身  
が飛び散りそうで怖い。』と言つて、作つてもらつていらない。それ  
は俺もちよつと否定できないので、バイト代からいつも出している。  
余談だが、俺のバイト代の使い道は、旅行雑誌の購入代や昼飯代、  
後はたまにCDを買つたりしている。まあ、ほとんどが貯金だがな。  
「じゃあ、いつものように僕が席を取るから、つとむは僕の分まで  
料理を取つてきてね。料金は食べてる時に払うよ。」

「分かった。目印は？」

「多分、女子が集まっているところじゃないかな？」

「了解。」

そう言つて俺は、券売機に並んだ。これは初めて食堂を利用した時  
から変わつていない。それは、これが何かと効率がいいからだ。い  
つきだと並んでいる途中に抜かれたりしそうだが、俺だと外見の  
せいでの抜かされることはない。たまに譲つてもらつたりしている。  
その時は断つているがな。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・自分  
で言つて悲しくなるな。

まあいい、気にしないで待つていいか。

十分後、俺は券売機でいつきのカレーを、そして自分の親子丼を買って、料理を作つてこむねばばかりやんに券と料理を交換していつきを探していると、

「 ジハチだよ、ジハチ。」

と、窓際の席からいつきが手を振つていた。ずいぶん田舎たりがいいな、俺はそう思ひながらいつきのところに向かつた。

「 ほりよ。」

「 あ、サンキュー。じゃ、いただいます。」

「 いただきます。」

と言つて、俺達は食べ始めた。その間の会話はやれどといふな感じ。

「 お前つて、いつもカレーだよな。どうしてなんだ?」

「 いついつ家庭料理の中で、カレーが一番好きだからだよ。つとむはどうして丼ものなの?」

「 ジの系統が一番安くて、ボリュームがあるから。」

「 即答だね。……………でもそんなにお金が必要なの?」

「 貯めておいて損はないだろ。」

「 そうだけど、さ……………あ。」

「 なんだよ。」

「 今思い出したけど、巻き込まれた事象を訊いてなかつたね。教えてくれる?」

「 ちつ。分かつたよ。つても、そんな大したものじゃないぜ。不良に絡まれた女子を助けただけ。ハイ終わり。」

「 なるほど。あそこは道が狭いからね、そうしなきゃいけなかつただろうね。」

「 だろ?」

「 それで、その女の子は誰なの?」

「知らねえよ。バイトに行く途中で巻き込まれたからな。その後はそのままあの場所に行つたぜ。後ろの方から何やら叫んでいたがな。

「うわ。流石とこ'うか、不愛想というか、君のスルースキルは相も変わらず健在のようだね。」

「俺は急いでたんだ。あっちが何といおうが、俺にとっしゃあ、あの時はうるさい以外の何物でもなかつたな。」

「それって、見る人が見れば、酷いとか、人の心がないのかーとか、言われそうだね。」

「関係ねえよ。どんなことを言われようと。」

そんな会話をしながら、俺は食べ終わって食器を片付けようとしたら、

「あ、待つていてくれたつていいじゃん。どうせ午後からは普通の授業なんだし。」

「俺はさつと寝たいんだが。」

「授業中に寝てるでしょ？」

「それはたまにだ。」

「だつたらバイトやめればいいじやん。」

「俺にこれから的生活をどうしろと?」

「僕がお金を貸してあげるよ。」

借りた後が鮮明に思い浮かんだので、

「・・・・・・・・・・・・・・ 分かったよ。待つていてやる。」

「本当!ー? ありがとね、つとむ。」

「別に。」

と言つて、大変不本意ながらも、いつきが食べ終わるまで待つことにした。

「それにしてもさあ、つとむって本当によく巻き込まれるよね、事件とか。どうしてなんだろうね?」

「知るか。それより、しゃべってばっかりいねえで、さつさと食べ

ろ。」

「分かつたよ。…………でも、これから巻き込まれるんじゃ  
ないかな？」

「は？」

「どういふことだよ、と訊いとしたら後ろから、

「うわっ！」「おうわっ！」

誰かがぶつかってきて、その反動で俺はテーブルにぶつかった。  
イテテテ…………、あ、危なかつた。食器は無事だ。弁償な  
んて面倒だからな。

それにして誰がぶつかってきたんだ？ そう思い俺は後ろの方を向  
くと、

「僕は何もしてないじゃないですか！！」

「うるさい！ お前は我らが『アイドル』<sup>ひがり</sup>の光<sup>ひかり</sup>さまで近づこうとした  
ではないか！ それは許されない行いだぞ！！」

「そ、そんなことはないですよ！」

と言いついていた。それにしても、『アイドル』？『光<sup>ひかり</sup>さま』？  
いつら、新手の宗教団体かなんか？ こいつらが何を言つているの  
か分からないので俺は、

「何言つてんだ？ こいつら。」

いつきに訊いた。すると、

「君つて、本当に知らないよね…………。確か、入学式に

いろいろと説明があつたでしょ？」

「寝てた。」

「はあ…………。」

いつきがため息をついた。この学校にいたくないと思つていたら、  
いつの間にか寝ていた。

だから俺は、何の話だか分らない。それに、俺は教室にいる時は  
ほとんどが寝ているため、誰も（いつき以外）俺に話しかけてこな  
い。廊下を歩いている時は、俺の外見のせいか話しかけてくる奴は  
いない。せいぜい、俺の事を見てひそひそと話すだけだ。

「こつも思うんだけど、君は友達をつくった方がいいんじゃない？」

「そんな事より早く説明してくれ。」

「わかったよ。・・・・・僕達の学科ではね、入学式に『アイドル』を選ぶんだよ。そのアイドルってのはね、僕達と違つて優先的に仕事がまわされるんだよ。彼女たちは将来を嘱望されていてるからね、結構僕達とは違うカリキュラムを受けているんだって。」

言わなかつたか？

「うん。各学年に一人ずついるんだよ。だから言つたでしょ？入学式に選ぶ、つて。」

なるほどな。だからあんな奴らが出てくるのか。そう思いながら、静かに成り行きを見守るひつとしたひ、

?

「そりやあ、君が何も知らないからだよ。」

ノハラ・ヒカル

「おい、貴様。貴様も同じ学科なんだろ? ならば、光さまのことを  
何故知らない?」

さつき、俺に人をぶつけたやつが威圧感を出しながら訊いてきた。

たが。そんなことを考えながら俺は正直に、「思ひやうござい。

第一回

「なんだ!? 貴様、それでモこの学園にしるものか! ?」

「別にいいだろ。そんなのは人の勝手だ。それと、さつきの話を聞いて思つたんだが、別に話そりとしたりするのは良いんじゃないかな？」

「光さまは『アイドル』に認められた方だぞ！－そのような方が、

「いつみたいにやつと喋るなんて言語道断ー！」

「かつこいこと言つてゐるよひに聽こえるがお前ら、自分が何のためにここに入学したのか、忘れたのか？」

一  
なに!?

「お前らは『テレビ』に出たいんだろ？それなのにそんな親衛隊みたいことしたり、追っかけみたいなことしたりと、普通の人たちとなんら変わらないじゃねえか。」

卷之三

俺が言った一言で、いつき以外の奴らは全員黙った。俺としては当

「 そ う だ な ！ ！ 僕 達 テ レ ビ に 映 り た い か ら こ こ に い る ん だ つ た よ な  
！ ！ ！ 」 「 そ う ね ！ ち ょ つ と 目 標 を 忘 れ て い た わ ！ ！ ！」 と 急 に あ たり  
が 騒 が し く な つ た 。 僕 に ぶ つ か つ て き た 奴 は 、 「 か つ け え ・ ・ ・ ・

七

しまつた！役者とかそういうのになりたくないのに、何を言つてい  
るんだ俺は！？と顔こぼれで葛藤していると、

「…………ふん！ とりあえず今日のとりは見逃してやる。次我らに口答えするなら、容赦はしないぞ。」

もな、そんなこと。それに、容赦しないのはこっちの方だぜ。なんて思つていると、

「ああ、本当に役者向きのような気がするんだけどなあ。」

「そんな！」となじよ。

樂しかつたよ。・・・・・・・・・・・・・

「誘導尋問の意味を辞書で引いて確認して来い。今のは自爆というんだ。」

「うう・・・・・、卑怯だよ。」

「そんなことより、さつさと食堂出ようぜ。授業の準備しねえとな。

「うう、君のスルースキルが時々憎くなるよ。」

「何の話だ?と心の中で首をかしげながら俺達は食堂から出た。その時に、

「あ、あの!先程は助けてくれて、ありがとうございました!僕の名前は菊地慎です。あなたの名前は?」

「……………ハ神つとむ。」

「僕は本富につきだよ。」

「ハ神つとむさんですか。あなたの先程の言葉、とても心に響きました!これからあなたのこと、『アニキ』と呼んでもいいですか!?

「はあ!?なんでそうなる!?」

「だって、先程のあの親衛隊に一步も引かないあの態度!みんなの目標を再確認させるあの言葉!それらを見て僕は感動しました!!だから呼んでもいいですか!?!」

「ははは。この学校でも『アニキ』呼ばわりか。君はつべづく人を惹き付けるね。」

「うつせ。……………いいぜ。ア

「一キでもなんでも。」

「本当ですか!?ありがとうございます!僕の事は、『慎』と呼んでもらって結構です!それでは!」

と言つて、俺にぶつかつたやつ 菊地慎 は食堂を後にしていつた。やれやれ、変な奴に入られたな、なんて思つていて、  
「友達できたじやん。よかつたね。」

と笑いをかみ殺している感じでいつきが言つてきた。

「どちらかというと、舍弟に近いような気がするんだが……

・・・。」「

「ははは。地元じやあ、君は『皇帝』って呼ばれているんだもん

ね。

「セレに触れるんじやねえよ。」

等と言いながら、俺達は自分の教室に向かつて行つた。

## 1 - 4 食堂 喧嘩（後書き）

主人公、最強（笑）。

「会長。昼休みに食堂で起きた騒動の事ですが。」

「早いですね。それで、何が起こったのですか？」

「は。どうにも一年の親衛隊が過剰な行動に出たみたいで。」

「それは穏やかじやありませんね。ですが、その時は丁度昼休みのころだったんでしょう？どうして報告が上がつてこなかつたのでしょうか？」

「それは…………。」

「それはですね、同じ一年がその騒動を収めたらしいんですよ。その上、みんなを勇気づける言葉を言つていたそうですよ。」

「そうなんですか？」

「ええ。訊いたところによると、その一年は暴力に頼らず、言葉だけで収めたそうです。それに、自分たちの目標を思い出せる言葉を言つていたとか。」

「それはそれは…………ふふつ。で、誰なんですか、その人は？」

「それが…………。」

「実は、我々でも調べられないんですよ。」

「あら？どうしてですか？」

「おそらく、学園側が何らかの理由で情報の封鎖をしているのでしよう。どうしますか？」

「じゃあ、しばらくは様子見といつことで。いいですね？」

『分かりました。』

「…………ふふつ。たのしみですね。」

「どんな人なのでしょう？」

会長と呼ばれた生徒は、楽しそうに笑っていた。

キーン、コーン、カーンコーン！

「ふわあ～。やっと授業がひとつ終わつたぜ。」

と言つて俺は、欠伸をしながら起きた。すると、

「君は良い神経をしているね。僕だつて寝たいと思つてゐるの。」

前からいつきの声がした。

「だつたら、寝ればいいじやんか。」

「そうしたいけどね、僕だつていろいろと体面があるんだ。君みた  
いに外見が不良みたいじやないからね。」

「大変だな。」

「ねぎらいといふ言葉なのか、同情といふ言葉なのか、判別しにく  
いね。しかし、まだ授業は二つあるわけだが、それを全部寝るのか  
い？」

「当たり前だろ？誰かさんのせいで、思いつきり先まで勉強しちま  
つたからな。」

「あれは、君が『受験勉強したいんだが、いらないやつでいいから  
参考書くれ。』と言つてきたんだろ？だから僕は、いらないと思つ  
た高校の参考書全教科、三年分を君にあげたんだよ。」

「しかし、カバーには『高校受験に必ず勝てる！』とか書いてあ  
つたよな？」

「やつてから気付いたんだじょ？どうして返さなかつたの？」

「一度貰つたら返しにくいだろ？だからだよ。」

「君は律儀だよね。そして眞面目だ。僕があげた本、結局僕に訊き  
ながら、全部終わらせたもんね。」

「あれのおかげで、授業が始まつて五分くらいで寝れるぜ。」

「いや、ノート位は取ろうよ。」

と会話していたら、急にあたりが騒がしくなつた。

「どうしたんだ？ 一体。」

「あれじゃないかな？」

といつきが指差した方向にいたのは。

身長はパツと見一<sup>一</sup>60ぐらい、髪はショートの茶髪、全体的な雰囲気は何処かオドオドしている。顔立ちは、可愛い、の部類に入るんじゃないかな？俺は知らんが。体型はとりあえず、どつかのグラビアかと思えるぐらい他の人よりはいいじゃないか？こうこうのことに関しては俺は知らん。と適当に観察しながら俺は、

「あいつ誰だ？ 分かるか？ いつき。」

と訊くと、本日何度目かのため息をいつきが吐きながら「う言つた。「君はこの学校の常識とか、そういうものを調べた方がいいじゃないかい？ ··· ··· 彼女が食堂で言つていた、今年の一年生の『アイドル』だよ。」

「ふうん。 ··· ··· ··· ··· ··· ··· 名前とかわかるか？」

適当に相槌を打つていたら、

「君は一度、僕に頼らず自分で調べてみてはどうかな？」

と声にちょっと怒りが入つていた。正直これはまずいな、何とかしないといけない、と頭を必死に動かしていると、

「あれ？ ねえ、つとも、彼女がこっちにくるよ？」

「は？」

と、いつきが言つてきたので顔を上げてみると、確かにこちらに向かつて走つてきていた。辺りからは、「なんで光さまが！？」、「おい！ あいつって、···」、「一体どういう関係なのかな？」などと、大変うれしくないひそひそ話が聴こえた。変な噂が流れそうで怖いな、まじで。と思いながら、ふと取り巻きが言つていた一言を思い出した。

「なあ、いつき。もしかして、あいつが『光さま』か？」

「そうだよ。長谷川光。<sup>ひがり</sup>一年の『アイドル』認定生で、この学校に入る前から色々と仕事をしているみたいだね。スリーサイズは上から、」

「そこまで訊いていない。 ··· ··· ··· ··· ··· っていうか、

お前のその情報はどこから仕入れているんだ？」

「それは、いくら幼馴染だからと言つても教えられないよ。」

「その言葉でなんとなく想像できるから、いい。深くは訊かない。」

「それはどうも。」

とやつていたら、

「あつ、あの、あなたですよね？昨日、私を助けてくれたの。」

いつの間にか田の前まで来て、そんなことを言つてきた。いつきは、その言葉で事情は理解したらしい。俺も理解したが、他の奴らは分からないうらしく、頭に疑問符を浮かべている。俺としては、これ以上また何かに巻き込まれるんじゃないかと思い、

「人違いだろ？俺はあんたとは今日初めて会つたんだぜ？」

思いつきり否定した。

よくいるんだ。助けたやつが俺のところに来て、お礼を言おうとするのは。俺はその時、周りに人がいなくても否定する。その理由は、別にお礼を言われるようなことはしていないし、俺は巻き込まれただけだ、という気持ちが大きいからだ。そのことをいつきに言つと、『君は特徴があつて分かりやすいからね、いくら否定しても、君が助けてくれたと確信できるんじゃないの？』と言つてきた。まあ、

その時相手側が一回引くんだが、また口を改めてお礼を言ひに来る。その時に俺は否定しないので、やつぱり、とよく言われる。え？そんなの、初めから肯定しどけばいいだろ？今の状況みたいだと、肯定すると確実に学年全体で噂になる。それだけはなんとしても避けたいので、この場はそのまま否定させてもらおう。そう思つてそいつ 長谷川光の次の言葉を待つていて、

「嘘ですっ！昨日確かに、私を助けてくれました！」

と言つてきた。ちょっと理詰めで攻めるか。と、俺は否定する方法を決めてこう言つた。

「証拠は？」

「しょ、証拠つて……。」

「俺だと確信できる証拠は？」

「そ、それは・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「ないなら人違いだな。さつさと自分の教室に行け。とんだ無駄足

だつたな。」「

「…………あー！昨日あなたはあそこを通りませんでし  
たか！？街灯があつて狭い道のところです……」

「この町、そうこううとこころ多くはないのか？どこだか分からぬんだが。

「うつ！そ、そうでしたね…………じゃあ、私に絡んでいた人の人数は？」

「しらん。」

「はうつ！…………これでも駄目ですか。じゃあ、  
あの人たちに『皇帝』と呼ばれていませんでしたか？」

「え？ そんな奴いたのか？」

そいつが訊いてくることに対する俺は、全部を否定した。罪悪感？  
何ソレ？

そして、ついに訊くことがなくなつたのか、

「やつぱり人違ひだつたのでしょうか…………？」

と呴き始めた。その時に一コマ田の授業が始まるチャイムが鳴った  
ので、

「ま、また訊きにきますからね！私、確かに見たんですからね！」  
と言つて、去つていつた。だから、俺じやねえって。と言おうとした  
が、そいつが教室を出て言つたので、何も言わずに寝みつとした  
んだが、

「本当は？」

二コマ二顔でいつきが訊いてきた。こいつは俺がやつたことを知つ  
ていて、なおかつ俺が隠す理由を知つてゐるはずなので、これを訊  
いてくるといふことは…………、

「この状況で遊ぶ気か？」

「駄目かな？」

と訊いてくるいつき。…………なんでお前、上田づかいをしてく  
るんだ？いくら女っぽい顔立ちだからといって、やるか、普通？な  
んて思つていたら先生が来たので、

「」の話を引つ張るんじゃねえぞ。

と忠告した。それをちゃんと理解したのか（多分、理解していくとも、構わず引っ張る気でいるだろうが）、  
「分かったよ。君に退学されたら僕もつまんないからね、ここは君の言つ通りにしてよ。」

と語りてゐた。…………素直なところをたまに  
あひだよな、」

「一コマ田、二コマ田の授業をなんだかんだ言つて寝ていた俺は、終わりのチャイムが鳴つたと同時に机をきれいにし、それを素早く終えた後に教室を出た。他の奴らは教室で友達とかと話して、俺の事に気付かなかつたようだ。・・・・・それでも、いつきだけが俺と一緒に帰つている。理由は、『家でやることがあるから。』らしい。

俺はかなりの急ぎ足で廊下を歩いている。他の奴らから見ると、俺はかなりの速さで走っているように見えるらしい。まるで何かに追われているような感じみたいだと、いつきが言っていた。そのいつきはとくに、俺を追いかけるように走っていた。

「ちょっと…いつも思うんだけどさー走っているんじゃないんだよね!？」

「ああ、急ぎ足だぞ、これでも。」

「ちょ、ちょっと、は、速くない?」

「そうか?」そう言いながら俺は、歩く速度を少し遅めた。それでようやく、いつきが俺に追いついた。

「ふう。君の歩く速さが尋常じゃないくらい速いんだけど。急ぎ過ぎじゃない?」

「別に。いつものようになりたいだけだ。それに、」

「バイトがあるから?」

「そう。一時間でも多く働かないとい時給の関係上、金が貯まりにくいからな。」

俺のバイトについては……後で説明できるだろう。

「前から訊きたかったんだけどさ、つむつむって、お金貯めて何をしようつていうの? そんなに必死に働いてさ、倒れたら元も子もないんだからね?」

「俺がこんなに必死に働いて、金貯めてる理由? そりゃあ、旅をしたいからだよ。」

「旅、つて……・・・・・・・・・?」

「さあな。とりあえず、田舎は三十万だな。それぐらいあれば、日本どこかには行けるだろ?」

「ツアートかじゃ駄目なの?」

「一人旅だ。これだけは譲れない。そうじゃないと、何のためにバ

イトして金貯めてるのか分からねえからな。」

「どうして？」

「お前がついて来るって言つても、絶対に置いていくからな。・・・  
・・・・・平穩な一人旅をしたいんだ、俺は。」

と自分の夢を語つていた。  
・・・・・あれ！？いつの間に！？

「これだナは両親にも内緒だ

心地がいい野川さん

「ふうん。・・・・・・・・・いい夢だね。でも僕はついてい

くからね。君が何と言おうと、ね。

いつまはそれでも俺と一緒に行くと言った。

二三

それに置ぐと准はぐなるんじやないか」と

「ええええ!!!!」何をいい言っているのかな!?僕はそんな二  
もつともうつてないからぬ!幼達ハシナリぞよぬ!?

思いつきり、いつきがうなたえていた。珍しいな、こいつがこんな

顔するなんて

卷之三

伊方一不見

訊くことにした。

「なあ、いつか。

僕たごでそごの趣味はなしからね!!

なにとむ

「うるさいな。どうしてだ？」

え!!?  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
え!!  
え!!と  
そ  
その!!  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・・・・・あ！たゞて彼女をへぐったら、つとむか巻き込まれた」とを逐一かんさ・・・・・・・・話が聴けないじゃないか。」

「おい、今『観察』して詮ねうとしただろ。」

「そんな訳ないじゃない。…………君だつてモテるのにどうづして彼女をつくるなの？」

「は？俺が？モテる？」

「うん。」

それを聴いた俺はびっくりした。そんなことは知らなかつたし、そもそも俺はこの外見でモテないと思つてゐるからだ。続けていつきはこう言つた。

「小学校の頃のバレンタインデーにチョコもらつたでしょ？あれね、君への数が一番多かつたんだよ。あと中学の時、よく文化祭などの時に『暇だつたら来てくれませんか！？』とか言われてチケット貰つたでしょ？これらを聴いてもまだピンと来ないのかい？」

確かにそんなことあつたな。と思い出しながら、なんでこいつはそんなに憶えているのか不思議に思つた。しかし、

「あれつて、全部お前宛じゃなかつたか？俺はそれらの後必ずお前に渡したはずなんだが。」「もう。君は本当に鈍くて自覚がないのか、それとも興味がないのかい？」

「興味がない方だな。だから俺は一人旅をしたいと思つてゐるんだよ。」

そう言い合ひながら、俺達は校舎を出て別れた。

こつもの場所に置いてある自転車のロックを外して俺は、バイト先まで自転車をこぎだした。この学校は、くれな町の割と外れにある。なので、自転車で通うやつが多い。電車やバスを乗り継いだり、歩いてきたりする奴や車で来るやつもいる。車で来るやつは、いつきみたいな金持ちや、学校から近くにある職場の親が送つてくるぐらいである。俺はというと、雨が降るが、嵐が来ようが、地震がこようが、自転車で行かなきやならない。理由は、まず親が車を持つていいない。次に、俺自身が節約としてバスや電車を使わないと決めているからだ。実際、このことをいつきに言つたら、『君はバカかい？』と本氣であきれられた。やつぱりあきれられるのか？普通は。

## 1・7 バイト 労働

俺は自転車をこじきながら時計を確認した。時刻は午後二時四十分。このままいけば普通に着けるな。そう思つてそのまま自転車をこいでいった。

「ふうう。今回もちょっと危なかつたな。これからはスピードあげて行かないと駄目だらうからな。」

とバイト先について早々、俺はそんなことを言つた。・・・・・・

独り言だから気にするな。そして、俺はバイト先の店に入った。

カラシコローン！

「よう、つとむ。今回もギリギリだなあ、さつさと準備しろよ。」「分かつてるよ、マスター。」

ドアを開けた先にいたのは、大分いかつい顔をしているマスター。辺りを見渡すと、いつもながら人がいない。よくこれで店がやつていられるもんだ、といつもここに来ると思つ。

この場所は、俺のバイト先の一つである『喫茶モンタージュ』。この店は、いつきがよくコーヒーを飲みに来ていた店らしい。そのおかげで俺は、ここでバイトができるんだがな。

ちなみに、いつきが言つには、『あそこの店はコーヒーぐらいだよ。本当においしいのはね。だから君がそこで働いたら、結構繁盛するんじゃない?』らしい。俺はマスターの料理は不味いと思ったことはないけどな。あと、俺のバイト代は時給七百五十円、賄い飯付き。

「準備できたぜ。」

そう言いながら俺は、調理場のほうに来た。こここの従業員はマスターと俺の二人だけ。家族とは離婚して以来会つていらないらしい。俺が働く場所は基本的に調理場だが、たまに店内で起こつた揉め事を解決したり、接客をやつたりしている。

ここに来るやつらは（俺がいないときは知らないが）、近所の暇な奴らか、近所の女子高生どもぐらいだな。後は、いつきが来たり、

俺の知り合い（俺が働いていることも知らないで）が来たりしている。・・・・・・・・・ 知り合いの場合は、俺がここで働いていることを他言無用にさせている。知られたくないだろ、こんなところに。ちなみに、家族は俺がバイトをしていることは知つていても、どこでバイトをしているのかは知らない。

「おせえぞ。わざと注文されたものつくれ。えーと・・・・・  
ショートケーキにチーズケーキを二つずつだ。ちなみに、飲み物は  
もう出しているからな。」

「了解。生地はあるんだから他のやつから作ればいいか。」

「ほら、出来たぜ。ショートケーキにチーズケーキだ。」  
「相変わらず早いな。よつと、・・・・・・・・はいよ。ショ  
ートこチーズだ。」

「うわあ～、これって八神君が作ったんでしょう！？ いつ来てもすごいわ～。」

「そ、うだよ、ねえ。」私達、八神君がくるこの時間帯狙つて来るもんね

「ううう！ やつぱりおいしいわー！！・・・・・・ねえマスター、今暇なんだからハ神君をこっちに呼んだら？」

「いいけど、あいつ凄い人相悪いぞ。お前らそれでもいいのか？」

ちよつとだけ四つさが悪かつたけど。

「悪かつたな。」これは生まれつきなんだ。

と一通り会話が進んだので、俺はカウンターの方へ来た。その時の

客（女子高生が四人）の反応はとこりうと、『結構カッコイイじゃん！』『でしょ？』『怖そつだけど、結構イケているわね。』『怖そうなのに料理ができる、つてギャップがいいね～。』と日々に感想を言つていた。

・・・・・・・・・・・・・・これは褒められているんだよな？そう思つてゐると客の一人が、

「ねえ八神君。八神君つて彼女いないの？」

どうして女子たちは、何かと彼女とか恋愛ものについて訊いて来るんだ？いつもそう思うが、男子が好きなモデルとか訊いてくるのと同じなんだうな、と、いつもその結論にいたつてしまつ。別に気にしないが。

「いねえよ。それがどうした。」

「え～、そんなの勿体無いよ～。八神君、折角かっこいいんだからさ、誰かと付き合えばいいじゃん。」

「生憎と、俺には今好きな人がいないんだ。それに、仮に付き合つたとして、長く続かないと思うしな。」

「そうちかな～。八神君はその人を一生大切にしそうな気がするなあ～。」

「あ！分かるよ、それ！確かに、八神君つて普段は怖そつな人だけじさ、話してみると結構親しみやすいんだよね～。」

「あと、八神君は女性に優しいわね。料理を出す時は必ずと言つてもいい程女性に最初に出す、と聞いたことがあるわ。」

それは親父と勝負しているときに、『男ならば、女子には優しく接するべきだ！！！』と言いながら俺を殴つていたからである。そのおかげで俺は、割と女子に対しては普通よりちょっとだけ優しく接している、らしい。らしい、とは、いつきが『僕と女子との接し方がちょっと違う。』と不満顔で言つっていたからだ。・・・・・・

・・・何が不満だったのだろうか？

「それ、誰から聽いたんだ？」

「忘れたわ。」

「でも、確かに八神君って優しいよね～。なんだかんだ言ってケーキとかにトッピングしてくれたり、ちょっとサービスしてくれるじやん。・・・その分の代金は払わせられるけど。」

「いいな。私、これからもここに来ようかな。」  
「…………その分の代金は搊ねせられる」と

「来るのは別に構わないが、何か注文しろよ。」

「八神君が作るならいいよ。」 「私も。」

「そうだね。」

そんな話をしていると、

「ん? もう六時か。マスター、俺は上がるわ。」

「おう。ほら、まかない飯だ。バイト代は・・・・・・・・・い

つも通りだな。

「分かってるよ。じゃあ、また明日。

「アリバ」

七八

「これが考へてくれた新ルートで俺は、次のバイト先に

つた。昨日までのルートよりちょっとだけ時間がかかるが、それぐらいならなんとかなる。そう思つてペダルをこいで行つた。

「お疲れ様でーす！」

「十五！」

俺は二つ目のバイト先に何事もなく着いた。・・・・・言  
い忘れていたが、俺はバイトを掛け持ちしている。そつきの喫茶店  
と、今からやる道路工事での雑用だ。夜のバイトって、高一では無  
理じゃないかって？まあそこはな、いつきに色々とやつてもらつて  
いるから大丈夫なわけだ。ここでの時給は千五百円。それで、ここ  
で働く時間が七時から十時の三時間。要は、ここで働く代が、  
普段の俺の生活資金に充てられる。つまり、ここで働くないと普段  
の俺の生活はできないという訳である。

ここの人たちは結構いい人たちなので、本来は時給千五百円なんだ  
が、たまに一千円にしてくれる。・・・・・どうから出して来

るんだろう、その金は？

こんな感じで俺のバイトの説明は終了。ここからは、特に面白いことはないので概略だけ説明するか。

この後は、何事もなくバイトを終えて、何事もなく家に帰り、茜にいつもの言葉を言い、両親に、お休み、と言つて寝た。明日は何事も無ければいいぜ。

## 第一話～面倒事は必ずあります～（前書き）

これから第一二章が始まります。

## 第一話～面倒事ほんぢ事ひじへる～

翌、二十三日木曜日。今日もいつも通りに起きて朝食を食べているところで茜が起きて、昨日遭った出来事を色々と話しあつた。ちなみに、俺が巻き込まれたこと（一年同士の喧嘩）については話していない。いらぬ心配をかける気がするからだ。そして、いつもの時間に俺は、学校に向かつた。

俺がいつもの道を自転車で走っていると、一人の老人が赤信号のなかを渡ろうとしていた。それを見た俺は、反射的に自転車を降りてその老人に駆け寄り、肩をつかんでこう言った。

「危ねえだろ？！ いつたい何考えてるんだー死ぬところだつたんだぞ！？」

そう言いながらその老人の目を見てみて俺は、「…………チツ、余計なお世話だつたか。そんなふりするじゃねえよ。紛らわしい。」

そう吐き捨てて自転車を再び「じいづ」としたら、「…………なぜわしが演技をしているとわかつたんじゃ？」

とその老人が訊いてきた。俺は自転車の調子を確かめながら説明した。

「あんたの目を見て氣付いたんだ。あんたの目は、これから死のうとしてる奴の目じゃなかつた。これから死のうとしている奴の目は、本当に死んだ魚のような感じがするんだ。目に正気がないつて感じが。あんたの目には正氣が感じられた。だからだよ。」

そしたらその老人は、

「ほう。まるでその人を見たことがある言い方じゃのう。」

と言つてきた。そこまで話したからこのまま話していいだろ？ と時計を確認しながらそう思つて、俺はまた説明した。

「あるよ。今までで、少なくとも一十回はな。そいつらはな、いろ

いろんな理由で死のうとするんだ。家族に死なれた、とか、借金ができた、とか。その度に、俺はそいつらの事を見ながら、そいつらをなんとか生きようとしたからな。雰囲気でなんとなく分かるんだよ。そのことで言えば、あんたには騙されたぜ。じゃあな、爺さん。

「

「お主、名前は？」

と訊いてきたので、俺は自転車をこぎながら、

「ハ神つとむだ！もうこんな事するんじゃないぞ……」

と言った。だから、

「今年の一年にそんな奴があつたのう。……………  
今年は面白うことになりそうじゃ。」

と老人がつぶやいたのを、俺は知らない。

「ふう、なんか変な爺さんだつたな。あいつのせいでの、ちょっとスピードを上げなきゃいけなくなつた。」

そう言いながら自転車をこいでいると、  
「キヤー！ひつたくりよ……」

と叫ぶ声が近くで聴こえた。……………また巻き込まれそうな感じがして嫌だな、と思つていたら、何とひつたくり犯が俺の方へ向かってきた。やつぱりか、とあきらめにも似た感じで溜息をつきながら、

「おい。」

と犯人に呼びかけた、

「邪魔だ！……どけつ……！」

と言つて、ナイフを向けながら俺に向かつて来た。……………

・ナイフ」ときで俺がビビるかつての。そう思いながら俺はその犯人に、

「大人しくしろ。」

と言つて相手の両手首をつかみ、そして、

ガシツー！ドシャアアン！……！

「ぐはああ！！」

と背負い投げをしてその犯人を気絶させた。ふう、やれやれ、こうなつたら今日は遅刻確定だな。と半ば諦めて俺は、いつきに電話した。

ブルルルルッ！ピッ！！

『なに？つとむ？朝から僕に電話なんて珍しいね。』

「ああ。単刀直入にいうとだな、今日は遅刻するから理由を含めて先生に言つてくれ。」

『ははあくん。また巻き込まれたんだね？・・・・・・・分かつたよ。理由は僕の方で考えるから、君は何があつたのかを、学校に来てくれたなら話してくれ。』

「助かるぜ。ありがとな、いつき。」

『そう思つんだつたら、今度泊まりに行つてもいいかな？』

「・・・・・それは考えておこう。」

『じゃあね、あんまり遅くならないでよね。』

と言つて電話を切つた。・・・・・・最後の言葉を聴くだけだと、待つているつて感じがするのは、なんでだろうな？そう思つていたら、

「あ、ありがとうございました！」

と、ひつたくられた人がお礼を言つてきた。俺としては、いつもの事なので、

「別に。」

と素つ気なく返した。そういうしていると、誰が呼んだか知らないが、パートカーが来た。どうせ俺がかわつた事件なんだから、いつきが恐らくあいつを呼んでいることだろう。俺達が巻き込まれた事件の時に知り合つた、あいつを。

第一話～画園事記～（後書き）

これまでの感想、お願いします。

## 2・2 警察ひつたくり

「やつぱり、お前か。本当によく巻き込まれるな、いろんなものだ。  
呪われてんのか？」

「うつせえよ、菅さん。あんたが呼ばれたんなら、俺がいるってこと  
とぐりいわかるだろ？」

「まあな。」

とタバコを吸いながら笑う菅さん。ちなみに犯人は、俺の背負い投  
げで気絶してパトカーに運行された時に気が付いた。・・・・・  
よかつたぜ。死んだのかと思つた。

さてと、菅さんについて説明しなきやな。名前は菅本信吾<sup>すがもと しんご</sup>。職業  
は、この流れからわかるように、警察官。俺といつきが巻き込まれ  
た事件で世話になつて以来、俺が巻き込まれた事件の時には必ず来  
る。俺と菅さんは、その原因はいつきだとにらんでいる。

「しつかし、お前、凄いな。」

いきなり菅さんがこいつぶやいた。

「あ？ 何がだよ？」

当然俺は分からないのでそう返したら、

「なにがって、お前が捕まえたひつたくり犯、指名手配されてたや  
つだぜ。なかなかシンボをださねえから、どこに居るのか分からな  
かつたんだぜ。」

と説明してくれた。ふ〜ん、結構すごいやつだつたんだな。と捕ま  
つたやつに対しても通りのやつだな。じゃ、行くぞ。」

「さてと、これからはいつも通りのやつだな。じゃ、行くぞ。  
と菅さんが手招きしてきた。俺も慣れているので、

「自転車で行くから先に行つてくれ。あ、学校には遅刻するつて  
言つてあるから。」

と返した。

「やつぱり慣れてんなあ〜。」

「慣れる必要はないと思つんだが。」

「まあ、そつだがな。」

と言つて、菅原さんはパートカードで、俺は自転車で警察署に向かつた。

といひの変わつて、学校では、

「ハ神。・・・・・・ん？ハ神は欠席か？」

「あ、先生。ハ神君は自転車のタイヤがパンクしたとかで、学校に遅れるそうです。」

「そういえば、あいつは隣町から来ているんだつたな。分かつた。え～と、次は、安井。」

「はい！」

そんな感じで点呼が進んでいた。

「学園長、おはよひいざれこます。」

「おはよひ、諸君。」

「それにしても、少し遅かつたようですが、何をしていらしたんですか？」

「ちよつとした練習をしていたんじや。・・・・・まあ、そのまま、その練習で危うく死にそうになつたがの。」

「な、なんてことしていたんですか！－そんなことならないでください！－」

「いいではないか。それに、そのおかげで改善点が見つかつたしのう。」

「・・・・・・・・・？」

「そついえば訊きたいことがあるんじやが、ハ神つとむせこの学園にいたかのう？」

「ええ、こますよ。教師達からはだいぶ評判が悪いようですが。」

「ああ、そつだがな。」

「ほほう。なるほどのう。…………才能とは意外と誰にも  
気付かれないものじゃな。」

「学園長、何か言いましたか?」

「なんでもないわい。…………わて、今日も一日、頑張る  
かのう。」

と言つて、学園長と呼ばれた老人 鯨井朱雀 はいつものよう  
に仕事を始めた。

「久し振りだなあ、ここに来るの。」

俺は警察署を見上げながらそうつぶやいた。ああ、シンド。自転車  
であそこから地元の警察署まで軽く一キロぐらい走つたぜ。と、息  
を整えていたら菅さんが、

「ほりつ、さつさと来いよ。調書つくれねえだろ。」

と言つてきた。分かつてるよ、全く。そうつぶやきながら、俺は警  
察署の中に入つた。

「これで、全部だな。」

「ああ。」

「登校中にひつたくり犯が向かつってきたので、返り討ちにした、と。  
いつもとかわんねえなあ、おい。」

「別にいいだろ。」

「…………いいぜ。もつ終わつたからな、さつあと学校に  
行けよ。」

「分かつてるよ。」

と言いながら、俺は席を立つて帰つとしたんだが、そこに一人の  
刑事が来て、

「野郎、証拠は拳がつているのになかなか他の件を認めません。」  
と言つてきた。往生際が悪いな、そいつ、と思いながら帰つた  
たら、

「そうか。…………おい、つとむ。」

と薔さんのが呼び止めた。俺はその後の言葉が予想でたので、

「断る。」

「いいじゃねえか、俺とお前の仲だろ?」

「ふざけんな!…それぐらい自分で口をわらせり…。」

と言つたら、

「・・・・・・・やつてくれたら、お前さんのせいで被つた被害に、田をつむつてやるぜ。」

と言つてきた。それに俺は、ものすゞく心当たりがある。畜生、こんなところで使いやがつて。

「てめえ、そりゃあ、齧しつていうんじゃねえのか?」

「で、やるのか?やらないのか?」

「・・・・・・・いいぜ、やつてやるよ。そのかわり、次からこんな」と俺にさせんじやねえぞ。」

「分かつてるよ。じや、よろしくな。」

と言つて、薔さんは俺を取調室に入れた。薔さんに報告した刑事は、『なんで一般人にやらすんですか!?』と言つていたが、薔さんと俺は気にせずに入った。

「なんで一般人に手伝わせるんですか!?」

「ああ、お前はまだここに来て間もないから知らないんだな。」

「何がですか?」

「あいつ 薔さんと一緒にいた少年は、事件解決にすゞく貢献しているからな、この署じや結構な有名人なんだよ。」

「そりなんですか?」

「ああ。それと、この町はヤクザや不良グループがほかの町より多いだろ?」

「そうですね。なんだか雰囲気としてはどこもかしこも一色触発、つて感じがしますからね。」

「でも、その割にはそいつらの犯罪件数が少ないだろ?」

「確かにそうですね。ですが、それと何が関係しているんですか?」

「まとめているのはあの少年だ。この町のヤクザや不良グループは、あの少年がいるからこの町では犯罪を起こさないんだ。いや、他の町でも起こせないかな？彼はそういう騒ぎに敏感のようだからね。」

「・・・・・・・・・・・・」

「という訳だ。この町が平和なのは、ひとえにあの少年の力があるからだろうな。」

「す、凄いですね。」

「ああ、全くだ。」

# 邪魔するぜ。

「言いながら俺は、取調室に入った。もちろん菅さんも一緒にだ。そいつ、名前は横井達哉と言うらしい。は、俺を見た時に思いつきり舌打ちをした。捕まえたやつが来れば、その反応は当然だよなあ」と感じながら俺は、

「……からは俺達がやるから、あんたには別にいいぜ。」

「俺もここにいなきやいけねえのか。」「

と云ふた菅さんはスルーして、

十数キロの山へ出立つて、第三幕が開く。

「やつてねえよ。今回が初めてだよ。

一 その割にはだいぶ慣れてる感じだったけどな

魔の一族

俺のその一言で、そいへは黙ってしまった。恐るくは諂ひ詫でも考えているのだろう。が、そんなことをしても意味がないことを思い

知らせてみるか。そう思つて俺は、唐突にこう訊いた。

おじさんたつては、仕事のハル一に立っていなかつた。

「いいだろ、別に。で、どうなんだ？入つているのか？いないのか

?  
L

「リーダーの胸中」

その一言で、菅さんは俺がどうするのか分かつたようだ。・・・・・

……このおさん、勘と推理力はすごいのに、どうしてずっと平

刑事をやつているんだ?と毎回疑問に思うところだから、過去に何かがあつたんだろうな。そう考えていると、

「…………安達剛志さんだよ。」

と言った。安達剛志、ねえ。俺は、そいつが言った名前を頭の中で復唱しながらケイタイのアドレス帳を見た。  
えーと、安達、安達……あつた、あつた。よし、あいつには悪いがちょっと電話に出てもらつか。そして俺は、電話をかけた。ちなみに、捕まつたやつは俺の行動を見て不審に思つていたことは、言つまでもないな。

「フルルルルルルツ！！ピッ！！

「よう、久し振りだな、安達。」

『つともじやねえか！！なんだよ、いきなり電話していくんじやねえよーびっくりしたじやねえか！！』

「悪かつたな。…………ところで、今大丈夫か？」

『ああ、いいぜ。珍しいな、お前が電話してくるなんて。いつたいどういう風の吹き回しだ？』

「ちょっと確認したいことがあつてな。…………横井達哉って、お前らのグループに入っているのか？」

『横井達哉？…………ああそうだ、入ってるぜ。そいつがどうしたんだ？』

「ひつたくりをして捕まつたんだよ。』

と俺は正直に言つた。ここまでで、横井の顔がものすごい勢いで青ざめていつた。こつから先是、お前に言論の隙は『えないので。

『あいつ…………また性懲りもなくやりやがったな！！だから指名手配になつた時に、『もう自首しろ』って言つたのに……！』

と安達が怒つていた。ほほう、つまり…………

『指名手配になる前からやつていたと。』

『ああそうだ。…………なあ、つとむ。そいつに代わつてくれねえか？』

『いいぜ。…………ほらよ、安達からだ。』

と言つてそいつに電話を渡した。そいつは、全身をガタガタと震わ

せながらゆつくりと電話を受け取った。

『 よう、横井。お前、捕まつたんだな。』

馬鹿じやねえかテメエ！！なんでそんなことして

「一、一メモ」

すみません………」出来心で

「それで済むたゞ警察はいらねえだ奴が!!」  
もういい。お前は今田からメンバーから外す。分かつたな?』

「わ、分かりました。・・・・・・・。」

『じゃあ、ケイタイは持ち主

「は、はい・・・・・。」

と笑って、横井は俺にケイタイを返した。それを受け取つて俺は、

「 ありがとう 」

いいさ、別に。…………それより、こんなことになつてし

まつたのは、俺がしつかりまとめていなかつたせいだ。済まない。

「いや、みんな」とは。お前はよくやつてこぬよ。」

『その言葉はありがたいな。…………もう用は済んだか

1

「ああ。助かつたぜ。」

『 セーつか。じゅ、また会ねいわよ。』

-  
おお

と書いて、電話を終了させた。それと同時に、

「さて、全部はいてもいかつか。」

「お、きの態度が喰のよしは自分の犯行だと嘗さんか語った。」

・・・・・ よほどショックだったんだな。と思ったが、自業自得なんだから同情する必要はないな、すぐに思い直した。

「助かつたぜ、つとむ。お前のおかげで事件が解決したよ。今回も表彰状いらねえんだろ?」

「いるわけなんだろ。あんなの、大分もらつていたからな。」

取調室から出た俺と菅さんは、そんなことを言いながら歩いていた。  
「そういうえば、そうだったな。小学校に上がる前からもらつていたんだよな。そりやあ、いらねえよな。」

「ま、それは今はどうでもいいわけだが。今何時だ？」と肝心なことを訊いてみた。

「ん？今は十時半ぐらいだな。…………そういえば、おまえ、学校に行く途中だつたんだよな。ワリイ、ワリイ。」と笑つて流そうとする菅さん。おい、そりやあ…………、

「まじでか！？俺はさつさと行くからな！！またな！！」

といふと同時に俺は駆け出した。ヤバイヤバイ！！ここから学校までは最低一時間二十分钟ぐらいかかる……そう思いながら署内を出て、俺は自転車を思いつきりこいだ。

その時の光景を見た人は、

『まさか自転車で自動車と同じような速度を出す人がいるなんて…………』

と言つていたといふ。

## 2・4 再び 一年

「どうやああ  
キキッ  
…………」  
「…………ズザザザザザー

と、ものすごい音を出しながら自転車が止まつた。

「ハア、ハア、ああ、もう駄目だ、死ぬ。と思いながら腕時計を見ると、時刻は十一時十分。なんと一時間も経たずに着いてしまつた。  
・・・・人つて、死ぬ氣でやればできるもんなんだな。そう思いながら俺は、自転車をいつもの場所に置きに行つて、校舎に向かつた。

昼休みは十一時から十二時まで。十二時から五十分の授業が三つ。だから帰りが三時くらいになる。という説明を忘れていたな。スマン。

そのまま食堂に行つたら、

「お~い、ここだよ、つとむ!~」

といつきが叫んでいた。今の俺には、それに対して怒鳴ることができない。なので、スルーして自分の料理を取つてきてからにしよう。そう決めた俺は、券売機に並んだ。

意外にも早く順番が来たので、俺はとりあえずカロリーが高いものを三つほど頼んだ。受け取る時におばちゃんが、『あんた、ものすごい怖いけど、大丈夫かい?』と心配された。今の俺はそんな大変なことになつているのか? そう思いながらもいつきが待つていて席に向かつた。

「もう、なんで無視するのかなあ?」

「大丈夫っすか? アニキ?」

席に着いた時にいたのは、つとむと菊地慎だった。ツツコむ気がお

きない俺は、

「もう無理。死ぬ。」

と言つて、勢いよく自分が頼んだものを食べ始めた。その光景を見た二人は、

「…………遲刻した理由を訊くのは、今は無理そうだね。」「ずいぶん食べますね…………。」

とバラバラなことを言つていた。

一十分後、

「あ～、食つた、食つた。今日でけよつと散財したから、明日からどうすっかな?」

と言つていたら、

「僕たちの事を忘れないよね?」

「そうですよアーチキ。僕達を忘れないでください。…………。つていうか、さっきのアーチキの顔、ものすごい顔でしたよ。そちらのヤクザが裸足で逃げだしそうなほど。」

と言つてきた。…………そんなにひどかったのか?俺の顔。ふと疑問に思つたが、いつもの事なので、考えるのをやめた。

「ところでさ、ずいぶん遅かつたんじやないの?僕の予想では、午前中の授業の途中に来ると思つていたのに。」

「ああそれはな、いろいろとあつたんだ。」

とはぐらかしていると、急にあたりが騒がしくなつた。

「なんだ、なんだ?」と驚いていた、

「あ、あれですよアーチキ。」「あ、なるほどね。」

と、慎が指をさした方を見ていつきが納得したようだ。何が起つてんだ?と思つて慎が指をさした方を見るとそこには、

「久し振りに食堂を使うというのも悪くはないですね。」

と言ひながら入つてきた、

いかにもお嬢様です、つて雰囲気を出している奴が、取り巻きあれは親衛隊か? を引き連れながら席を探していた。ふむ、もしかすると…………、

「あいつも『アイドル』か？」

「よく気付いたね…………と言いたいとこりだけど、彼女の名前と学年はもちろん知らないよね？」

「当たり前だろ。」

「堂々と言い切らないで下をいよアーキ…………。」  
それに慣れているいつきが、

「彼女は一年生の『アイドル』で、篠宮ルカ。篠宮財団の娘さんだね。あ、ちなみに妹がいるよ。」

「いや、最後の方はいらないんだが。…………それはどこで仕入れたんだ？って、訊くのは野暮だな。いろんな所で会ってるんだろう？」

「ううと、ため息を吐きながらいつきが、

「そりなんだよ。僕はあいう性格は嫌いなんだよね。あの、はなにつく態度もね。」

と言った。本当に珍しいな、こいつがここにまで言つなんて。

「面と向かっては言えないんだろ？」

「それが言えたらどれだけ楽か。」

と話していると、

「え？ 本宮君とあの人は知り合いなの？」

と、慎が訊いてきた。…………こいつも意外と何も知らないよな。そう思いながら俺は、

「こいつの親はな、金持ちなんだよ。だから、ああいう奴でも知り合になっちまうんだよ。狭いからな、金持ちの世界って。」

と説明した。それで慎は納得したようだ。いつきはとくと、「まあまだね。」とでも言いたそうな目つきだった。ふう、何とか俺の命の危機が去った。上手く説明しないと、いつきが俺に罰ゲームと称して、色々ヤバイもんをやらせる。一番最近にやられたのが確か、雪山で一週間生き延びる、だつたな。あれ以降、俺はこいつの説明をうまくできるように、毎日毎日考えていた。それが報われてよかつたと感動していたら、

「あれ？ アニキ、 本宮君。 その人がこっちに来るんだけど。」

「あ、 なんか既視感。<sup>デジャブ</sup> いつきの方を見ると、 あいつも呆気にとられた様だった。 そして、 篠宮ルカがこちらの席に近づいてこう言った。

「あら、 こちらの席を使ってもよろしくでしょうか？」

物腰としては穏やかな感じがするが、 口調は完全に俺達が席を譲る、 と決めつけている感じがする。 それを聞いた俺らは、

「どうしようね？」 「僕はまだここにいたいんですけど。」「だな。俺もさつき食べ終わつたばかりだから、 もうちょっととゆつくりしたい。」「なら、 つとむ。君がそう言いなよ。」「ハア！？ 何言つてやがんだ！？」 「アニキ、 頼みました！」「だつて。」「結局俺なのか・・・」

と相談をしていた。 結論が出たので喋ろうとしたら、

「貸しなさいと言つているでしょ！？」

と勝手にキレていた。 これがこいつの本性なのか。 と感心しながら俺は、

「貸せるか、 馬鹿野郎。」

と吐き捨てた。 これを聴いた他の奴らが、「おい。 あの一年、 二年相手にケンカ売つたぞ。」「でも、 あの人つて確か昨日の・・・。・・・・。」「おい。 こりやあ、 生徒会呼んだ方がいいんじやねえか？」 と話していた。 また騒ぎが大きくなりそうだな。 とぼんやり思いながら俺は、 目の前のやつめちゃくちゃ怒つている先輩にあたる人 を適当に観察していた。・・・・・・・・・・・・

こいつは感情に流されるタイプだな。 一旦怒れば冷めるまでそのまま、 つて人だな。 と観察結果を分析していると、

「なんですか？ どうして貸せないかしら！？」

と案の定、 キレたまま突つかかってきた。 理由つてそりやあ、

「俺達が今ここで使つていいんだ、 どうして貸さないといけないんだよ。」

「それは私が、 ここで昼食を食べたいからですわ！！」

「他にも似たような席があるだろ。 そこを使え。」

「私はここがいいんですわ！」

「子供みたいなこと言つてんじゃねえよ。お前はあれか？自分が言ったことがそのまま現実になるとでも思つていいのか？だったら、やっぱり子供だな。」

「なつ！？そ、そんなことはないですかよ！」

「言つたな。だったらこの席は諦めるんだな。」

「うつ！？・・・・・分かりましたわ。と言つともお思いでしたか！皆の者、この物を強制的に他の席に移動させなさい！」

『はつ…』

と言つて、そいつの周りにいたやつ 親衛隊だらうな が俺

達を強制退去させようとした。なので俺は、

「ふざけてんじゃねえぞ、テメエら。死にたいのか？」

と、俺がいつも不良の喧嘩に巻き込まれた時に出す冷たい声と、殺氣を周りに出した。いつきはそれを平然と受け、慎は腰が抜けた状態になり、周りの親衛隊も完全に怯え、命令した本人も、腰が抜けたみたいだった。

はん。暴力沙汰で俺にかなうと思つんじゃねえよ。

そう思いながら、俺は殺氣を引っ込めつつ、

「一年もそうだが、どうして親衛隊をつくるんだらうな？あんなもの、つくつたつて何の意味もないのに。」

と言つた。すると、怯えていた親衛隊の一人が、

「ば、馬鹿にしているのかつ！－親衛隊はその人を守るためにつくられるものだぞ！－」

と言つた。それってよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「自分でそれ位できるだろ？つていうか、それ位出来ないんだったり、テレビに出るなんていうのはやめるべきだな。」

「な、何を言つてゐる？！－！」

「なにつて、簡単なことだ。テレビに出るつてことは、自分が有名になるつてことだろ？だったら、ストーカーとか自分で何とかできなきやいけねえだろ？このご時世なんだからよ。」

俺が言つたことにより、他の取り巻きとかも「そうだよな・・・・・・・。」「確かに、今は何かと危ないわよね。」「人を頼るにしても、誰が信用できるか分からぬよな。」「結局自分で何とかするしかないのか・・・・・・・・・・。」と話していた。

いい具合に周りがざわついたな。これは、俺がこうなるような言葉を言つただけだが、予想以上に効果が出ているな。などと辺りを見渡していると、

「お前には、守りたいと思つてゐるものがないのか！？」

とそいつが言つた。よくしゃべるな、こいつ。他の奴らはまだ怯えているのに。と素直に驚きながら、

「じゃあ、お前はそいつを、命を懸けて守らうと思つのか？そいつには命を懸けて守るだけの『何か』があるのか？」

と言つたらそいつは、とうとう黙ってしまった。それを好機と見た

俺は、

「ないと思つてゐるんだろ？そういう奴が偉そつなこと言つたじやねえよ。軽々しく『命を懸ける』なんて言葉を一度と口にすんじゃねえぞ。次俺の前で言つたら、今度はこれだけじゃすまねえからな。」と言つたら、今度こそそいつは黙つた。やれやれ、ようやく終わつたか。と先程座つていた席に再び座つたら、

「おお…………」「すげえ…………」「なんだあの一年！？一年相手にあそこまで啖呵をきれる奴がいたのか！？」「やべえ、同じ一年としてすげえ誇りに思つぜ！？」「私は一年だけど、彼、とても素晴らしいこと言つわね。」「テレビのワーンシーンだと思つたぜ！」「私も！！カメラがビームあるのか探しぢやつた！！」などと歓声を上げていた。

・・・・・・・・・ひょっとすると俺、またやつちまつた？畜生！！なんで毎回毎回いつもなるんだよ！？と誰にもぶつかられない怒りにさいなまれていると、

「アーニキ！？僕、ずっとついていくシス！？」

「全く、君は生まれながらの役者だよ。」

とそれぞれ感想を言つてきた。慎は良いとしてもだ、いつき！？お前ふざけてんじやねえ！元はと言えばテメエが俺に押し付けたからだろうが！？そう心の中でシッコんでいると、

「・・・・・・・・フン！？気分が悪いですわ！こんな奴に負けるなんて……」

と言つながら篠宮は戻つていった。あー、ようやく終わった。今日はえらく巻き込まれるなあ。とにかく前に巻き込まれたことを確認していると、

「ねえ、君。名前は何でいの？」「お前、よく言つてくれたぜ！？」「どこのクラスにいるの？」「趣味は？」「どうやつたらこんな演技ができるの？」と、さつきまで成り行きを見ていた奴らが俺に詰め寄つてきた。うおつ！？いきなり来んじやねえよお前り！？また面倒になつてしまつたぜ！？と思しながら、どうしようか

考えていたら、

「あ。もうすぐ授業だよ、つとむ。」  
といつきが言った。

「さうか。じゃ、教室へと急ぐとするか。」

と言つて、俺は詰め寄つてきた奴らを飛び越え、いつきはその隙に  
慎と一緒に食堂を出た。残つたやつらは、呆氣ことられたまま食堂  
に取り残された。

「つとむ、もう一回マタタキ終わったよ。起きなよ。」  
 「ねえ、つとむってば。」  
 「もう、じうなつたらこれしかないね。」  
 「（ハーパーハーパー）」  
 「（ガバッ！）俺はそんなことをしていいない！」  
 俺の一言で辺りが静まりかえった。その原因をつくった張本人はと言つて、  
 「あ、やつと起きたね。全く、疲れてるのは分かるけどさ、説明してくれないかな？」  
 と俺の目の前でそんなことを言いやがつた。…………起  
 こすためにあんなこと言つたのか？おい。と半ば俺が呆れていると、  
 「早く説明してよ。」  
 といつきが催促してきた。…………しようがない。やつさ  
 と説明してさつさと寝るか。やう考へて俺は、簡単に事の有り様を  
 説明した。説明を聽いたいつきは、  
 「それは大変だつたね。…………怪我とかしなかつたの  
 ？」  
 と言つてきた。珍しいな、こいつが俺の怪我を心配するなんて。な  
 んて思いながら、  
 「別に、どいつも怪我してねえよ。」  
 と正直に言つてから、  
 「二回マタタキが終わつたら、起こしてくれ。」  
 と言つて俺は寝た。…………今は体力を回復させるのが優先だか

らな。話してゐる場合じやねえんだ。と考えていただろうが、そのま  
ま意識がなくなつた。

「全く、いつもいつも無茶をするね、君は。だから僕は心配しているのに……。」

といつきが咳いていたら、辺りが騒がしくなった。それが誰のせいなのかはもう知っているので、いつきはそのまま放つて置くことにした。すると、

寝ているんですか？」  
ひかり

「朝から大分大変だつたらしいからね。多分、今日は放課後まで起きないよ。残念だつたね。」

「全く、君は巻き込まれたことを全部解決しちゃうから、こんなことになるのに気付いているのかな？・・・・・・・・・・まあ、僕もその内の一人なんだけどね。」

いつきが微笑しながらやつて言つてはいたことは、誰も気が付かなかつた。

「さて、バイト行くか。」

完全に回復したとは言い難いが、七、八割は回復しただろうな、と体をほぐしながら考えていたら、

ピンポンパンポン！！

「八神つとむ君。至急、学園長室に来てください。繰り返します。八神つとむ君。至急、学園長室に来てください。」

ハ福」とお君、三急、学園長室へ来てください」

「昨日と今日で騒ぎに巻き込まれたから、それについてじゃない？」と言っていた。確かにそうだが、そしたら昨日の時点で、俺は呼ばれていたはずだぞ？と思つてたら、

「取りあえず、行ってみないと分からぬでしょ？」  
と、いつきが俺の隣で言つてきた。ん？ これは・・・・・・・・・・

「ついて来るつもりか？」

即答だった。なので、俺はあえて返事をせずに、そのまま洋園長室

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

と並んで、ながれの志、掩の後を越つてくる二〇世。

・・・・・ にしても、学園長が俺を呼んでいるのか。一体ど

「失礼します。」

「失礼します、学園長。」

初めが俺で、後がいつき（本当にきてきた。）の声。

早速中に入つて視界に映つたものは、見覚えがある爺さんと、秘书つぽい人だつた。

「んたなのか！？」

「ふお、ふお、ふお。朝は世話になつたのう、八神君。そうじや、儂がこの学園の長、鯨井朱雀じや。よろしくな。」

「あー！朱雀さん！！お久し振りでー！色々とありましたが、ここに来  
す！」

「本宮の子か。久し振りじやのう。よくこの学園に入学できた・・・

・・・・と言いたいところじゃが、おせとつては当たり前じゃつたかのう？」

「そんなことはありませんよ。むしろ、僕はつとむが合格したのは当然だと想つてこましたからね。」

俺が話していたはずなのに、いつの間にかいつきと爺さんが話してゐでいた。なので俺は、

「帰る。」

と言つて出ようとしたら、

「すまん、すまん。呼び出しておこでこの態度はなかつたのう。早く呼び出した理由からこいつかの。」

と爺さんが呼び止めた。

・・・・・・・・・最初から話を脱線させるなよ、爺さん。と思ひながら俺は、

「そつと話せや、爺さん。」

と言ひながらソファに、いつきと一緒に座つていたら、「学園長になんて口のきき方だ！――」

秘書つぽいやつが怒鳴つていたが、

「別にいいではないか。」

「何故ですか！」

「そのように呼ばれても、儂は別に氣にしておらんからじや。それに、こつちの方が親しみがあつていいじやろ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 分かりました。これからそのこ

とについては、もう触れないことにしましよう。」

と言つて、一応口論が終わつたようだ。壁に掛けられた時計を見る  
と、三時十分になるところだつた。

・・・・・・・・・やばにな。このままじやあ、バイトに遅れちまう。などと焦つていると、

「さて、君を呼んだ件については、食堂で起つた騒動についてではないから安心せい。」

と言つてきた。俺はその件とは関係ないと想つていたんだが。

「で？要件ってなんなんだ？まさか、今日のお礼を言うだけに、俺を呼んだんじやねえだろうな？だったら、俺は帰るぞ。」

L

「ふむ。それもある。が、それだけではない。」

「は？」

「お主、今日学校に遅れたのは自転車のパンクではなく、ひつたく  
り犯を捕まえたからではないか？」

「アーマルのバグ」が・・・

それはそうだが・・・・・・・・それで?

「やはりか。まあ、それは別にいいんじゃが。」

「いいのかよ！！」

「わい。お詫びを貰つた。助かつたのじや。」

תְּלִימָדָה וְעַמְּדָה

「その礼じやが・・・・・どうじや?お主にびつたりなドラマがこの度撮影されるのじやが、それの出演交渉権といるのは。」

の度描景されるのり、力がそれの上演交渉柄といふのは、

- 1 -

爺さんから、助けてくれたお礼の内容を聴いた俺は、即刻断りの返事を言って、その場を立ち去つた。後ろから、「待ちなさいっ！！」まだ話は・・・・・！「と言つていたが、そんなのは無視だ、無視。そう考へ、俺は廊下を走りだした。

## 2・7 現実 幻想

「行つてしましました。」

と秘書っぽい人が言つた。その言葉を受けて、  
「どうしたんじゃろうな?なぜ彼はいきなり出て行つたんじゃろう  
な?」

と疑問に思つていた。すると、

「もう、朱雀さんも<sup>でる</sup>聳碌したね。つむはドラマが嫌いなんだよ。  
見るのも、出演のもね。」

といつきが含み笑いをしながら言つた。

「?」

「彼には、ドラマなんて時間内で終わらすためにつぶられていった  
だの幻想・・・幻かな?ともかく、そういう認識なんだよ。だから、彼はテレビをあんまり観ないんだよね。観るとしたら生放送  
か、実録!といった番組ぐらいだよ。」

「そりなのか・・・・・・。じやが、どうしてじや?」

「彼の資料を見ているんなら分かるんじゃない?・・・・・・  
じや、僕も行くね。」

と意味ありげな笑みを浮かべながら、こつきは部屋を出て行つた。

「・・・・・・・・学園長。どうするおつもつで?」

「ふむ。・・・・・・・・今すぐ彼の、中学までの資料を  
集めてくれ。本富の子のも、じや。」

「わかりました。」

「今年の一年はすごい才能を持った奴らが多いのう。・・・・・・  
楽しみじや。」

学園長の顔をその時に笑つていたといつ。

廊下を歩いていると、曲がり角の付近で声がするのをこつきは聴いた。なんだらう?と思い、顔を覗かせると、

「なんなんですか、あの男は！？折角わたくし自らが声をかけて差し上げたといふのに、無視してそのまま走り去っていくなんて！！と、篠宮が一人で怒っていた。これに関わるのは嫌だつたために、いつきは迂回した。

全く、なんだつたんだ？あいつは、急いでいたつてのに、わざわざ道をふさぎやがって。そのせいで、結局今日もギリギリだつたじやねえかよ。と思いながら店に入ると、

「つともーさつさと支度しひーおめえの料理じゃねえと嫌だ、とか

か言いだしてる客がいるんだからよーーー」  
入つた早々マスターの怒りの声が。これはちと支度しないといけないな。そう思つて俺は、そそくかと支度をした。

「ほいよ。オムライスに、ショートケーキに、イチゴパフェだ。  
「おう。……………」はい、つとむがつくれたものだ、満足だろ。」

と不機嫌そうに料理を手渡すマスター。それを見た客の一人が、「マスター、不機嫌にならないでよ。ハ神君が普段通りの時間に来ないから騒いだのは謝るけどさ。その代わりに、マスターが淹れたコーヒーとか飲んでたじやん。」

といふと、

「うるせえ。折角俺が作つてやるつて言つたのに、どうして『ハ神君が来てからでいい。』なんだ！？」

と返してきたので、

「そりゃあ、」

「マスターよ」

「ハ神君のほうが美味しいから。」

と客の奴らが詰つと、

「お前ら、俺にもプライドがあるんだぞ。」

と素早くマスターがツッコミを入れた。

「俺はマスターの方が上手いと思うけどな。」

と俺も会話に参加すると、

「や、そうか。まだまだ俺に勝てねえのか。困ったアルバイトだな。」

とマスターが嬉しそうに言つた。客の一人が、

「え？ 嘘じやないの？」

と言つてきたので、

「ああ、まだまだだな。マスターは一人で喫茶店を経営してるからな。それに、まかないめし賄飯を食べていると分かるんだが、アレンジ力ハンパねえぞ。」

と俺が言つと、

「へえ～そなんだ。マスター、それなら僕達にも出してくれればいいのに、賄飯。」

と言つてきた。

「馬鹿野郎。そんなもの出せるかよ。」

「いいじやない。マスターの腕が本物かどうかわかるんだから。」

「……………分かつたよ。明日くればつくつてやる。」

「あ。明日は無理だ。」「私も。」「うん。」

「人の善意をどこまで踏みにじる氣だ、お前ら?」

とマスターがちよつと怒り出した。何とかしないとなあ、と思ひながら辺りを見渡すと、

「ん?マスター、あんな客いたのか?」

そこには、本を読みながら飲み物を飲んでいる客が窓際の席に座っていた。しかも、どうやら俺が通つている学校の奴だ。なぜかとうと、うちの学校の制服を着ていてるからだ。

と指をさした方を見てマスターが、

「ん?・・・・ああ、あの客ならわしがからいたぞ。お前が来る前からな。」

「そりやが?」

「ああ。最初にコーヒーを出してからずつとだな。」

「もう中身がなくなつてそんなんだが。」

「じゃ、頼んだ。注文を取つてくれ。」

と平然とした顔で言つマスター。

「仕方ねえ、いくか。」

何を言つても駄目だと思ったので、何も言わずに俺は、その客の方に向かつた。

「ふう。この本を読んでいると、時間を忘れてしますわね。・・・

・・・・あら?飲み物はいつの間に無くなつていたのでしょうか?・・・

「そりやあ、ちよつと前くらいだな。おかわりにするのか?それと

も、別のやつにするのか？

しかし、結構美人だな。そう思いながら俺が訊いたら、その客が「う」訊き返した。

「あら？ こここの店員さんですか？」

「そうとも言えるが、アルバイト、だな。で、どうする？」

「そうですねえ・・・・・・・・・・おかわりしましょう。それと、飲み物ばかりじゃ悪いので、このチーズケーキもようじいでどうか？」

「分かつた。コーヒーとチーズケーキだな。・・・・・・・・マスター！」

「ケー キはお前がつくれよ！・・・・

「知ってるよ！」

そう言いながら、俺は調理室でケーキを作り始めた。・・・・・しかし、あの客、抜けているのかそうでないのか分かりにくいなあ。

「もうすぐ待ち合わせの時間なんですが、来ませんわねえ。一応、場所は分かりやすいところのはずなんですが・・・・・。

カラソロローン！・

「いらっしゃい。」

「あつ・ごめん・ごめん！・ちょっと仕事があしてたものでね。」

「ようやく来ましたか。・・・・・・・・とりあえず、取材の前に何か飲んだらどうです？」

「そ、そうだね。・・・・・・・・え、と、紅茶でも頼もうかな。」

「紅茶だな。少し待つてろ。」

「え？ 今ので注文終わり？」

「ここではそうみたいですね。」

「はいよ。チーズケーキとコーヒー。・・・・・・・・何か注文があつたら呼んでくれ。」

「ありがとうございます。・・・・・・・・聴いてた通り、おいしそう

です。」

「そうか。」

と言つて去つていったハ神。それを見た後に、

「なんか田つきがすごいね。悪っぽい感じがするね。」

「見た目はそうですけど、話してみればそうでもありませんよ。」

「はいよ、紅茶。」

「どうせ。」

お礼を言つた時には、マスターはカウンターのところにいた。

「この店の人は戻るのがはやいね。」

「だから注文されたのを早く出せるのでしょうね。」

「（ゴクリ）…………うまいね、この紅茶！！」

「こちらのケーキもおいしくですよ？…………うん。評判通りです。」

「誰の？」

「このあたりの人達のです。」

「そう。・・・・なら、僕も何か頼もうかな？」

「それもいいんですけど、はやく取材をお願いしますよ。平塚さん。」

「分かったよ。白鷺さん。」

しばらく色々と話していたみたいだが、俺にとつてはどうでもいいので自分の仕事（暇な時は調理室の掃除など）をしていた。マスターはとくに、他の客と談笑しながら飲み物の注文を取つていた。  
・・・・・抜け目ねえな、おい。

そして、俺の仕事がひと段落ついた時に、丁度話が終わつたらしい。二人が席を立つのを見た俺は、マスターに言われるまでもなくレジに移動した。

「会計をしたい」

「コーヒーが一杯二百一十円。チーズケーキは四百三十円。紅茶は一百円。合計で千八十円。」

「早いね、君。千八十円ね。はい。」

「千五百円からだな。おつりは・・・・・・・・四百一十円だな。」

「はいよ。」

「「」のそつをました。おいかつたですわ。」

「せうか。それはよかつたな。また来てくれれば、店としてもありがたい。」

「ふふっ。それならまた来ようかしり。…………せうこえ  
ば、あなたの名前は？」

「は？ どうしてそんなこと訊くんだよ？」

「また会つそうですから。」

「…………嫌な予想をありがとう。俺はハ神つと  
むだ。んで、そつちは？ 俺だけつてのは、ちとずるこんじやないか  
？」

「せうですね。私の名前は白鷺美夏しらさぎみかと申します。それでは。  
「ありがとうございましたー。」

そんな会話をし、そいつ 白鷺は帰つていった、のか？ せつ  
きの奴と一緒に行くみたいだから、まだどこかに行くんだろつな。  
とほんやり考えていると、

「おこ。もうすぐ時間だぞ。」

「何だと？ ー？」

マスターの一言で、俺は我に返つた。時計を見ればすでに五時五十分。もうすぐ上がる時間だった。なので俺は、いつも着替えているところに素早く戻つて着替え始めた。

・ · · · · なんか、今田はこんななんばつかだな。

「いやー、あの店は静かで取材にはもつてこいだね。今日はありが  
とね、白鷺さん。」

「いえいえ。私も初めて行きましたが、静かでいいと思いますよ。」

「そういえば、どうしてあの店員さんの名前を訊いたの？ それに、  
どうして自分の名前を教えたの？」

「なんとなくですよ。」

「やっぱ。…………といいで、今日も帰りは迎えが？」

「せうですね。もうすぐ来ますよ。」

キキッ

！！

「来たみたいだね。それじゃ、僕はこの辺で。」

「ありがとうございます、平塚さん。一緒にいてもううて。」

「いって、いって。君に何かあつたら、僕の首がとぶからね。これぐらい構わないよ。じゃ、また。」

「はい。またですね。」

「お嬢様。お迎えにあがりました。」

「ご苦労様です。」

「ん？ お嬢様、何か喜ばしことでもあつたのですか？」

「いえ、そんなものじゃないですよ。それでは、帰りましょ、うか。」

「かしこまりました。」

そう言って、お嬢様と呼ばれた少女　白鷺美夏は迎えの車に乗つて、帰つていった。

## 2・9 秘めし思い 苦労

ふう。二つ目のバイトに行く途中に何もなくてよかつたぜ。今日だけで三つぐらい巻き込まれたからな、これから先は何もないと思いたいな。そう思いながら、二つ目のバイトをこなしていった。

「ただいま～。」

と家に帰った俺の体力は、もうほとんどゼロ。正直、このまま布団に入ったら、翌朝まで寝てられる自信がある。そう思いながら玄関から二階に上がろうとすると、

「あーお兄ちゃん！おかえり！…………って、ちょっと！？大丈夫なの、お兄ちゃん！？」

と茜が心配そうな声を上げていた。

「ん？ 大丈夫だぞ。寝れば何とかなるからな。」

「そういう問題じゃないよ！！なんでそんな無理するの！？」

「いや、無理はしないぞ。ただ、」

そう、無理はしていない。ただ、

「ただ？」

「面倒事が起き過ぎただけだ。」

「え？」

今日はとにかく、面倒事が起き過ぎただけだ。朝、爺さんが自殺しそうになつたり、ひつたくり犯を捕まえて尋問したり、二年の女子に絡まれたりと、ともかく大変だったんだ。だが、それをいちいち茜に言うと、またこいつが心配しかねないので俺は黙つたまま、

「お前も、もう寝ろよ。俺も寝るんだから。」

「お風呂は？」

「明日の朝入る。」

と言つて、俺は一階に上がり自分の部屋に入つたらそのまま寝てしまつた。オヤスミ。

「お兄ちゃん、どうしたんだろ？」「

そつ茜がつぶやいた時、

「ん？ つとむの奴、帰ってきたのか？」

と、すすむがリビングから顔を出した。

「帰ってきたけど、すぐ一階に行つたよ。」

「ああ、そう。ならもう、茜も寝なさい。」

と玲子が言つと、

「なんでおんなじお兄ちゃんに対しても淡いなのー。」

茜が怒り出した。すると、

「それがあいつに對しての愛情だからだよ。」

ぶつきらぼうに、すすむが言つた。それを玲子は『そつなのよねえ』。と頷きながら聴いていた。その言葉を受けて茜が、

「え？ なんでそれがそうなるの？』

と困惑していた。

「子供を守るうとするだけが、愛情じゃないんだよ。特にあいつの場合は、自分で何とかできないと駄目だ、と思つたから、仕方なくこいつの態度をとつているんだ。…………そういうじゃない」と、あいつはいつ死んでもおかしくは無かつたからな。』

最後の方は、茜に聽こえなによつに小声でそつ言つた。それで疑問が氷解したのか、

「そつなんだ。愛情つてわからないね。』

と言つて、茜は自分の部屋に行つた。それを見届けた後、

「こつまで隠しとけばいいんだろ？ な、あいつの体質。』

「こつまでも隠せるものじゃない気もするけどね。』

とこつ夫婦の会話があつたといつ。

対談 アイドルツ！×考える人×普通の人が送る日常

「さて始まりました。第一回とりあえずクロスさせたら面白いんじやね？ラジオ！！イエ～イ！」

「なんの一体？」「なんなんだ、これ？」「僕、どうしてここにいるの？」

「ゲストはこの方たち！『アイドルツ！』から、主人公八神つとむ！」

「おいこら。ちゃんと説明しろ。」

「次！」「無視かよ。」

「『考える人』から同じく主人公、風間大輝！」

「あ、どうも。」

「最後に、『普通の人が送る日常』からも主人公、池田連！」

「これはなんの一体？」

「以上、この三人をゲストとしてお送りします！ちなみに、DJは私、末吉がやります！」

「いい加減説明しろ。」

ドカッ！バキッ！ドオォン！

～しばらくお待ちください～

「いたた・・・・・。」れぐらうてよく生きてるね、あそこの人たち。」

「八神君、だっけ。今日はよろしくね。僕は連でいいよ。」

「だったら俺はつともでいいぜ、連。」

「じゃ、僕は大輝でいいよ！」

「ふう。気を取り直して。じゃ、早速いってみよ～！」

「説明しろ。」ドゲシッ！「グフオツ！」

～しばりへお待ちへださ～

「……というわけ。分かつた?」

卷之二十一

・ 単純は思ひこめて書きたがったやつなんだね？」

• • • • • • • • • • • • • • • • • • •

「なあ末吉。さつきから大輝がしゃべらねえんだが、大丈夫なのか

「アサヒアサヒ。尊君の御心ではござらぬか。」

「やあ本物に氣を取り直していつてみよー！最初のコーナーは・・・

「単純な質問が送られてこないでさうね。

「末吉さん自体、ただの思い付きで

リカリかなしのは三たび前だよ

遠い目をするな。」

「なるせーーー。つまつこいつことじだつたのかー！」

「知りませんよ。」

「作者だろうが。」

「…作者が何でも知っていると思ひな！」

「ストップ」  
一人と

話を進めなきやー！

連君君は本當はうしれ」そ二たな」ヤヤはいを

～作者が泣き出したため、一時中断します～

「さて、記念すべき第一回の上に最初の質問！まずは・・・・・・・・

「いぬかこな。で? どいつなの? 好きな食べ物あるの?」

「どうだな？ ここはあんまり話さない大輝からいつてみよー！」

卷一百一十一 牛蠅山

十分後

トリアにカルボナリにはギャビアルしかな?」

「え? どうして?」

「キャビアって、高級食材で

「うん。両親が送つてきてくれた時があつたんだよ。あれはよかつ

12

「えええー、どうしてみんな一気に這いつのー?」

「ゴホン。じゃ、次はつとむだ！はい、好きな食べ物は！？」

タリの有坂か？

「マスターつて、誰?」

ひとむのハイト先の西郷だよ。結構ちやこからしてゐるところある

۱۷۰

「そうだな。あの野郎、俺が非番の時に来ると割引なしで会計するんだぜ？ ちやっかりしてみだろ？」

「へえー。でもそれって、その時の契約内容になければやる必要はないんじや？」

「まじでかつ！・・・・・いつきに紹介してもらつたバイトだからな。

契約内容は詳しくは知らないんだ。

「そりやめた。」

「人だね。」

「だけどな、それ以上に俺が大変な目に遭つてはいるんだぜ？ 例えば  
よ、雪山に何の準備もなしに遭難させられたし、どこか知らない山  
奥に放置させられて一週間で脱出しうとか・・・・・・・・・・。

L

～これからじょりいへりまへむのトクウマ話がわれています～

「・・・ほかにもあるぞ？」

「もういいよー。お願いだからやめてー。」

「進めて進めて！」

「分かったよ！では次は連！好きな食べ物は！？」

「三番車、車掌。

「新羅」新羅」

「放つておいてよ！」

「末吉。その辺にしどけ。連がつずくまつてしまつた。」

「ごめんね、連。悪気はなかつたんだ。」

いいんだよ、末吉さん。僕はどうせ普通なんだから・・・・・

「ああ!! 連がなんだかネガティブここ!!

「どうにかしろよ。作者なんだから。」

「分かつたよ。」

（連が戻るまでしばりくお待ちください）

「よつしやーこれで「はやくしる。次だ、次。」わかつたよ・・・・・・・。では次！三人の共通点は？」

「「「家事ができる。」」

「ですよね。」

「ていうか、お前自体は料理そんなにできないだろ？」

「完全に願望だよね。」

「人つてどうしてそんなことするんだろ？」

「うるさいー別にいいじゃないか、高望みしても…」

「気を取り直して。次行け、次。」

「うわひどー！」

（作者が立ち直るまでしばりくお待ちください）

「さあ、次行こつか・・・・・・・・・・。」

「大丈夫？末吉さん？」

「最初っから飛ばしそぎだ。疲れるだけだろ。」

「もうやけつぱちじやなかつた？」

「問題ない！行くよ！質問！一番面倒だと思つてることは…？」

「学校生活。」「両親の世話。」「学校生活。」

「わ～お。話的にはアウトの答えいただきましたー！連を除いて。」

「ん？今何か言わなかつたか？」

「別に～。さて、理由は何となく想像できるから置いといて。次！

連以外は高校生なんだけど、そこんとこどう思つてる？」

「別に？俺は、中学生だろうが高校生だろうが大変なことばかり関わっているからな。どうとも思つていないぜ。」

「僕は中学生のほうがいいなあ。そっちのほうが楽しく遊べたから。」

「僕は・・・・・・・・・・どうなんだろ？先のことを考えてないから

」

なあ。」

「そりなのか？」

「うん。」

「じゃ、最後！将来の夢は？」

「平穏な暮らしがしたい。」「サラリーマンになる。」「世界を放浪したい。」

「切実な答えが一人、まじめな答えが一人？そして、ただの願望が一人？」

「誰だか見当はついたが、それはないんじゃないか？」

「ま、いつか。次のコーナー行ってみよー！」

「「「これで終わりじゃないのかよ！？」」」

「次のコーナーは・・・・・『苦労話を分かち合おう!』です！」

「タイトルだけで内容がわかるな。」

「もうちょっとひねつたら？」

「そんなことはどうでもいいからーーでも、張り切って話してみよう！」

「じゃ、誰にする？」

「末吉さんからでいいじゃない？僕たちを作る時の苦労話をしてみてよ。」

「私？ そうだね・・・・・まあ、苦労というわけではないけど、思いついたら忘れないうちに書き留めようとするでしょ？それをそのまま書いてたら、いつの間にか止まらなくなつてね。他の作品のやつを考えると並行してやつてることが、苦労してゐるところかなあ。」

「そりが。だつたら俺のところを進める。」「僕のところもね。」

「分かつてるよ。じゃ、次は・・・・大輝！」

「僕！？うーん、僕は・・・・世のことなんだけどね。」

「ふむふむ。」

「昔、両親が僕を置いて海外に出て行ったころかな。その時は波風の家に世話になっていたんだけどね。そのころの僕、まだ小さかつたからさ、色々と覚えるのに苦労したよ。」

「子供つて、普通は連れて行くものじゃねえのか？」

「なんでも、波風が僕と別れるのが嫌だつたらしく、それだつたら」ということで、僕を置いて行つたみたいだよ。」

「すごいね、大輝の両親は。」

「じゃ、次はつとむだ！」

「俺か。そうだな・・・・・・。ああ、あつたぜ。確か、小学生のころだな。いつきの付き添いでと言えば聞こえはいいが、実際は俺のことを強引に連れて行つたわけだ。」

「大変だね。」

「それで俺は誰の誕生日だつたかしらないで、パーティに連れて行かれた。しかも、俺だけ私服だぜ？どう考へても目立つわ、なにやら子供はいるけど誰もかれもがドレスやら着てるわで場違いだとすぐわかったんだ。だから俺はいつきに、家に帰せと言つたら『いいじやん。別に。』と言われて一蹴された。」

「可哀想だね。」

「それで仕方なく外を眺めてたら、変に金持ち思考のお坊ちゃんが俺のところに来てよ、俺のこと散々変なこと言つんだぜ？俺は気にしなかつたけど。ま、その反応に怒つたのか俺のことを殴ろうとしたんだろうな。」

「そういうのつて、たいてい男だよね。」「そうそう。」

「そしていざ殴りかかるつとしたら、どうやら主催したやつが来たらしいよ。殴るに殴れずそのままそいつのまゝに行つたんだ。あの時我慢するのが苦労したなあ。」

「それでどうなつたの？」

「うへん。そこらへんは思い出せないな。」

「ま、そんなことはどうでもいいさ！ 次次！」

「じゃ、僕だね。僕は一杯あるよ。例えば……………」

「三十分後。」

「末吉、てめえ、連に苦労しかさせてねえのか?」

「もうやめさせようよ。連が変な空氣まとい始めたから。」

「そ、そうだね。…………つとむー任せたよ!」

「はあー!?」

「殴れば何とかなるから!」

「…………分かつたよ。連、元に戻れ。」

「カツ!」

「…………いてつ…………あ。」「めん」「めん。」

「さて、次は何するんだ?」

「えつとね…………大変言いくらいんだけど、終了の時間が近づいてるんだよ。だから、今回はこれまで…」

「「「はあー!?」」

「まだ二つしかやってねえぞ!」「そ、うだよ!」「どうしてさ…」

「色々とあつたじゃない!色々と…そのせいでの時間が足りなくなつたんだよ!」

「馬鹿じやねえか!」

「一回田をやるかどうかは気分次第!あとは、質問が来ればやるかもしれない!以上!第一回とりあえずクロスさせたら畠田こんじやね?ラジオでしたー!」「勝手にしめるんじやねえ!…」

「これから一緒に買い物行かない?近くに安いところあるんだよ。」「本当に!?ちょうど部屋が綺麗すぎて何かほしいなあと思つていたところなんだよ!」

「…………俺も行つていいか?」

「いいよー!」「うん!」

「D」は私、末吉!ゲストは池田連!八神つとむ!風間大輝でした!アティオス!」

対談 アイドルッ！×考える人×普通の人が送る日常（後書き）

いかがでしょう、こんなラジオ番組は？

幕間 わよひとした黙つぶつ（漫書モ）

初の幕間です。お楽しみください。

## 幕間 ちよつとした腰づぶし

「あ～、暇だ～。」

「ちよつとつむ～いきなりびつしたんだい～。ビツしてそんな無気力モード?」

「バイトはねえし、学校もねえ。やる」と無くて暇すぎる。「平穏に暮らしたいんでしょ?」

「ああ。今この場にお前がいなければ、平穏に暮らすところ夢が少しかなう。だからじっかいけ。」

「まつたく、君には本当に困ったものだね。しようがない。そんな暇を持て余してる船には、これを貸してあげよう。」

「スマン、いつき。」の通りだ。せつきの発言は俺が悪かった。だから電気椅子をどこかへ置いてこい。

と、土下座する俺。プライド? 何それ?

それを見たいつきは少しだけ残念そうにしながら、電気椅子をどこかへ置きに行つた。

・・・・・ていうか、どこからあんなもの持つてきたんだ?

さて、先ほどの会話の意味がわからぬだろつた。ちよつと簡単に説明すると、

今日はバイトがない休日だーーと、誰もいない家で万歳していた俺。

その後、しばらぐのんびりと家の中で過ごしていたら、だんだん飽きてきた。

俺の理想とする平穏と、この状況がちよつと違つことに気づきそのままだらけていたら、インターフォンが。

何の気なしに玄関を開けたら、目の前にいつきがいた。どうしてお前が? と訊く間もなく、いつきが勝手に侵入。そして、先ほどの会話が繰り広げられたというわけだ。わかつた

か？

そういっていったら、こつきが戻ってきたので、再度訊くことにした。

「どうして？」

するとこつきは堂々と戻った。

「暇つぶし。」

「家でやれ。」

どうやら、俺の言葉は想定済みだつたらしく、  
「家にいるのが暇だつたから、ここに来たんだよ。」  
と言つてきた。

はあ、まつたくこつけ……。

そう思いながら、俺はこのまま話を進めることにした。

「で、何をするんだ？」

「え？」

「え？ ジゃないだろ。俺のところに何をあるつもりで来たんだよ？」  
その言葉に、こつきはうろたえた。

「えー？ ああ、おや、その、なんてこつか……。」

「お前……。」

「…………そだ……これだよ……これ……これをやるつもりで来たんだ！」

そう言つてこつきが持ってきたものは、人生ゲームっぽい何かだった。

「これ、なんだ？」

「なについて、知らないの？ 最近発売されたボードゲームだよ。」「

「タイトルは？」

「『双六～人生設計編～』だよ。結構面白いらしいんだよね。」「  
思いつきりパクリじゃないのか？」

俺をすぐさまそう思つたが、言わぬが花だと思い何も言わなかつた。

で、こつきはやる気満々ひしゃべ、もつ準備をしていた。

「なあ。これ、四人でやつたほうがいいじゃないか?」

俺は説明書を見ながらそう言った。そしたらいつきが、「人数いないほうがいいよ。だって、結構恥ずかしいものがたくさんあるから。」

と言った。嫌な感じがめちゃくちゃするな、大丈夫なのか、これ?

で、やつてているわけだが…………。

「あ?『逆立ちしながら腕立て三回』?だいぶ楽だな。」

「ねえつとむ。どうしてそういう筋トレ関係のマスにしか止まらないの?」

「よつと。…………さあな…………知るかよ…………。」

俺はマスの指示通りに、逆立ちしながら腕立て三回をやつていた。ちなみに、いつきは変装やらモノマネやらやっていた。で、さすがにあの学校に通っているだけあって、どれもうまかった。

で、俺が二十回をやつたところで、いつきがサイロロを振った。このゲーム、ボード型なだけあってマスが多い。かれこれ一時間ほどやつてこるが、俺たちはゴール手前でよくスタートに戻されている。

ていうか、明らかにこれが狙いなんじゃないかと俺は思つ。現在の地点は俺が半分くらい、いつきが終盤くらいにいる。

「お?やつた。四だ。あと三以上でゴールできるよ。」

そういうながら、いつきがコマを進めていった。そして、止まったマスの内容を見て、いつきが固まつた。

「どうしたんだ?」

三十四やり終えた俺は、固まつたいつきを見て、訊いてみた。しかし、返事が返つてこない。

どうしたことだと、俺は訝しげながらそのマスの内容を見た。

「なになに・・・・・・・『好きな人の名前を言つか、スタートに戻る。』か。ふうん。で、どうするんだ、いつき?」

俺がそう訊いたら、いつきは黙つてスタートに戻つた。ま、言いた

くないといつわけだな。

俺は気にせず双六を進めていった。

結局、このゲームが終わったのが一時間三十分後で、俺がゴールして終わった。これをやり終えた後、いつきが「ちょっとこの会社に文句言つてくる。」といって帰ってしまった。会社がつぶれないことを祈る。』

そして、時計を見たら三時近くになっていた。  
俺は明日いつきに感謝しないとなと思いながら、洗濯物を取り込んだ。

次の日。

「よひ。」

「おはよう、つとむ。」

「昨日はありがとな。おかげで楽しかったぜ。」

「えー!? あ、そ、そづー? ほら、僕が昨日来てよかったです。」

「あ、ああ。どうしたんだ、一体?」

「なんでもないよ!」

いつもの光景が繰り広げられていた。

「会社潰してねえだらうな?」

「まさか。ただ、『ボードゲームのマスを少なくして。』って言つに行つただけだよ。」

「そうか。」

## 人物紹介その1（前書き）

色々と変わったり、増えたりします。

## 人物紹介その1

八神つとむ（15）…………このお話の主人公。巻き込まれ体质もち。そのせいで喧嘩や事件に巻き込まれまくるが、そのたびに解決している。ちなみに、そのおかげで町にいる不良たちやヤクザたち、警察たちと仲良くなつた。何事も一人でやらなくちゃいけない環境だつたので、基本的なスペックは高い。ドラマ嫌いなのは、現実を知つていてるから。人脈は結構あつたりする。将来の夢は、平穏な暮らしをすること。恋愛には興味がないらしい。

本宮いつき（15）…………つとむの幼馴染であり、つとむを学園に入学させた張本人。色々と秘密がある。家がお金持ちで、その影響力はとんでもなく強い。つとむの悩み事を聞いたり、解決したりしている。

八神茜（14）…………つとむの妹。ただし、義理。本人は忘れていたが、孤児院からつとむの両親が引き取つて今の生活に至つていて。つとむのことは、昔はどこか怖くて近寄りがたいと思っていたが、あることをきっかけにすごい頼りになる兄と印象が変わり、それ以降何かと一緒にいたいと思っている。本人は自分の気持ちに気づいていない模様。

長谷川光（15）…………つとむが登校する学園の、一年生のアイドル認定者。ちょっと前まではグラビアの仕事をしてたらしいが、この学園に入学した時にアイドルと認定されて以来、ドラマとかの仕事に変わつた。つとむに出会う前まではどことなくオドオドとしていたが、今では割と自信に充ち溢れているらしい。

篠宮レミ（15）…………篠宮家次女。姉とは正反対な性格で、

傲慢さは一切ない。あることでつとむに出会って以来、つとむのことが好きに。お嬢様だが、姉とは違う学校に通っている。そのせいでつとむに会えないこと、若干の不満はあるようだ。

篠宮ルカ（16）…………篠宮家長女であり、次期当主を有望視されている。高飛車で傲慢な性格なので、意外と人付き合いが悪いと思われるがちだが、猫かぶりが得意なので人当たりは良好である（ただし、つとむといつきだけは例外）。また、一年生のアイドル認定者で、ドラマにも多く出演している。最近の悩みは、八神つとむの存在についてらしい。

## 第二話～生徒会と喧嘩騒動～（前書き）

最近、後悔先に立たずといつ言葉が身に沁みます。

## 第二話～生徒会と喧嘩騒動～

次の日、となると金曜日なわけだが・・・・・・日が覚めたら俺は、床で寝ていた。自分の部屋についたという記憶はあるのだが、そのまま眠つてしまつたらしい。ねむい頭を働かせて起きたら、

「おはよー、お兄ちゃんー！」

茜が俺の部屋の前に突っ立つっていた。

「ああ、おはよー。・・・・・・・俺、風呂入つてないよな？」「うん。だつて昨日のお兄ちゃん、凄く疲れたみたいだつたもん。」「やうか・・・・・・・・じや、風呂入つてくるわ。」

と並つて、

「またあー!?お兄ちゃんーちよつとは私の事を気にしないのー!?」  
茜が怒り出した。「これは最早あれか?パターン化しているのか?そ

う思いながら、

「んで?今日は何の用だ?まさか、挨拶するだけじゃないだろ?」

?

と言つたら茜が、

「ち、違うよー!ー?今田はきちんと話すからねー!ー?」

と慌てて言つた。俺に何の用があるんだ?そう思いながら、話の続きをまたた。

「え、えつとね、明日は土曜日だよね?」

「そうだな。」

「や、それでなんだけどさ・・・・・・・お兄ちゃん、明日暇?と期待した田で訴えてくる茜。まあ、暇なんだが。

「暇だが。なんだ?何処かへ行くのか?」

「本当!ー?実はね、明日から撮影があるらしいから一緒に行ってほしこんだよー!ー?」

「ええええ！？？妹をここまで喜ばせておいて酷くない！？」

「行きたくない、観たくない、近づきたくない。」

「いいじゃん、行こうよ。」

とやつていたら、

「話は聞かせてもらつた！！」

「ん？」  
「だ、誰！？」

「ならば私と行くつではないか！」

セリフは、いつの間にか繋がっていた。

「アーティスト、音楽、映像」

卷之三十一

「アーティストの才能を発揮するためには、自分自身の才能を認めることから始めなければなりません。」

「それ……現状は二段二ノ三」

「それで？新父は何しに来たんだ？」

「ここでスルーが、お前はど

それは当たり前じゃないのか?

「んで? 何しに来たんだよ?」

「ああ。さうさと風呂入って、飯食え。じゃないと、遅れるぞ。」

「……………なに…」やがて少しだけおれん…。

「お兄ちゃん、口調がおかしくなつてゐるよ。」

「そんなの気にしてられつかよ……とにかく！ 話は帰ってきてから

だ  
！  
！  
」

「ええ！？ それはないよ！…………つて、待つてよ！」

俺としては、早く行かないと巻き込まれた時に遅刻が確定してしまいかねない。なので、急いで下に行き、シャワーを浴びるだけにし、朝食をとりあえずという事でパン一枚を加えて、急いで一階に戻つて準備をした。

「と、とりあえず、行つてくる。」

つ、疲れた。まさか朝から面倒なことになるなんて。おかげで、朝食はろくに見えなかつた。

仕方ない、コンビニ寄るわ。

また余計な出費だ。

もつとうなつたら遅刻なんて関係ない！…そう思つて俺は自転車を

いざ出した。

行く途中でコンビニに寄つて、時計を見たら七時半。このまま道中  
にも無かつたら、普通に学校に着けるなあと淡い希望を抱きなが  
ら、再び自転車をこじうとしたら、

「あのおー、お聞きしたいことがあるんですけど……」  
と声がした。幻聴か？それとも、誰かほかに人がいるのか？後者の  
方だと想いたいんだが、生憎、うまい具合に誰もいない。となる  
とだ。俺に訊きに来た、つてことになるわけだが……、

「交番は近くにあるわけだが、なぜそこに行かない？」

「え？あ、そ、そうなんですか？ですが、こうして訊いてしまった  
のですから、答えてくれませんか？」

「あ？…………分かったよ。んで？何が訊きたい」  
んだよ？と言いかけて俺は止めた。いや、やめざるを得ない、の方  
が正しいか。なぜなら、

「久し振りに会話ができますね。憶えてますか？私のこと。」  
と笑顔を向けながら俺に話しかけてきた。お前は…………

「誰だつけ？」

「ええ！？お、憶えていないんですか！？」

うつすらと憶えがあるが、誰だか忘れた。そんなことより…………

「すまんが、そろそろ学校に行かないと遅刻しちまつ。じゃ。」

「ま、待つてください！――！」

「…………チツ。なんだ？この前の続きか？」

俺は急いでいるんだが。

「それもありますが…………さよ、今日の昼休みに  
林に来てくれませんか！？」

「は？」

何の話だ?と訊こうとしたら、そいつは走つていった。  
・・・何だつたんだ?そう思つたが、

「あ、いけね。遅刻する。」

学校の事を思い出し、そのまま自転車をこいでいった。  
やつべえ、またいつきにネチネチ言われる。

・・・・・

## 第三話～生徒会と喧嘩騒動～（後書き）

人物紹介、そろそろ入れるべきですかね？

### 3・2 林 秘密の場所

学校に着いて、いつもより自分が自分の席に着いて、買ったものを食べようとしたら、

「今日はどうしたの？いつもは家で食べてくるのに。」

いつきがこう訊いてきた。

「うつせえな。昨日から色々とあって、今田の朝も面倒なことになりかけたんだ。おかげで飯がパン一枚だぜ。」

「なるほど。だからコンビニで買つてきたのか。…………ところで、君の噂が凄い事になつてているのは知つてるかい？」  
は？噂？なんだそれ？そんな表情が出でていたのか、

「分かつてないみたいだね。…………このところ、君が騒動を收めてるからだいぶ学校全体でもちきりだよ？」  
いや、最後の語尾を疑問形にするなよ。ヒツツ「ミたがつたが、噂かな？」

「その噂って？」

どうこう内容だか気になつたため、聴くことにした。

「僕が聴いたところではね、『一年を黙らせた一年がいる。』とか、『役者としては一年の中で一番レベルが高い。』とか、『親衛隊を十秒で黙らせた。』とか、『不良みたいだけど凄い奴。』とか。一番はそうだね…………『本宮君とデキてる。』って噂かな？」

最後はマジで聴きたくなかった。

「ふほつ！…ゲホッ！…ゲホッ！…………食事中に

何言い出すんだよ！？」

「もちろん、最後の方は嘘だよ。」

くそっ。お前のおかげで食べる気が失せちまつたじゃねえか。残つたのは…………仕方ない、昼にでも食べるか。と思つていると、

「やういえば、さつき『昨日色々とあつて』って言つたよね？あの

「後何があったの？」

「と、いつきがふと思い出したかのようこ訊いてきた。…………そこに戣いつくるじやねえよ。さてどうするか、と考えよつとしたら、

「あ、もうすぐ授業だ。じゃあ、昼にでも訊くからね。」  
と言つてきた。

「あ。昼はダメだ。」

「どうして？…………もしかして、誰かに呼ばれてるの？」

「そのままかだ。」

「ふうん……………そうだ！」

「尾行は禁止な。」

「だつて誰だか気になるじやないか。君みたいな人を呼ぶ人が。」

「ほつとけ。もうすぐ授業なんだろ？行くぞ。」

「待つてよ！？」

そして俺達は、授業に向かつた。

午前中の授業が終わつて、昼休みに入つた。俺は教室に戻つて今朝買つてきたものを持って、林の方に向かつた。

「この中かよ……………」

いざ林の前まで来てみると、すづぎえ生い茂つてゐるんだな。中がどうなつてゐるのか分からねえ。どうせつて中に入らうかと辺りを見渡したら、

「ん？ 看板……………なんであんなところに？」

俺のいるところのちよつと先に、看板が見えた。近づいてみると、

『この先、新緑の広場』

と書いてあつた。……………なんかの憩いの場所なのか？と思つてしまつてしまつがいい。ともかく、ここから行けると分かつたので、俺はこの中に入った。

3 - 2 林 秘密の場所（後書き）

すみません。忘れてました。

### 3・3 相談 自信

んで、中を進んでみると急に視界が開けた。そこにあつたのは、「随分とまあ、寂しいな。ベンチが一つだけかよ。しかもその周りには何にもねえし。」

そこにあつたのはベンチが一つ。その周りは掃除がされてるのか、大分綺麗だった。こんなところに呼んどいて、何の用だあいつ?と思つてベンチに腰かけて、今朝買つてきたものを食べようとしたら、「す、すみません、私が呼んでおいて遅れるなんて……。」

長谷川が来た。そして俺を見るたび、いきなり謝つた。

「いや。俺もついさつき来たばかりだ。」

嘘は言つてない。その言葉を受けて、

「そ、そうですか。あの、隣、いいでしようか?」

「あ? 空いてるんだから勝手に座れ。」

「じゃ、じゃあ、し、失礼しますね?」

と言つて、俺の隣にぎこちない動作で長谷川は座つた。語尾が疑問形なのはなぜ?と思いながら、肝心なことを訊いた。

「何の用だ?あの件だったら別にお礼を言わなくていいぞ。もう忘れたから。」

「え。そ、そうなんですか……。でも今回は違いますからね?」

「そうか。でもなんで俺に?先生に相談すればいいだろ?」「

普通はそりじやないか?それが何でよりによつて俺?そり思ついたら、

「えつ!えつ、えつとですね……。噂で聞いたんです。」

「噂?またか。今度は一体どんな内容なんだろうな?と聴いていたら、

「『何でも解決してくれるやつがいる』っていう噂です。なんでも、

その人は田つきがとても悪いみたいなんですが、悩みとかを解決し

てくれるやつなんです。」

・・

「おい。」「

「はい？」

「その噂、どこから聴いた？」

「確かに…たかあき町周辺から出てたみたいですが…。…って、どうしたんですか！？頭を抱えだして…。…このいつの言ひ噂。その発信源はどうやらうちの地元だつたらしい。その事実に俺は、このまま逃げて発信源の奴を殴ろうと思った。確かに俺は、色々と解決した覚えはあるが、それは巻き込まれてからであり、こうやって直接相談に来るやつはいなかつた。それをどこかで省かれた結果がこれだ。

「でも、田つきが悪いってだけで俺に来るんじゃねえよ。」

「はう！す、すみませんでした。」

全く、田つきが悪いってだけだつたら、俺の地元はほとんどが田つき悪いぞ。

「遠回りしたが、本題にいこつか。…食べながらでもいいぞ。」

「わ、わかりました。それで、相談したいことなんんですけど…。実は私、今度ドラマの主演に決まつたんですよ。」

「よかつたな。」

「それは嬉しかったんですけど…同時にそれが悩みになつてしまつて。」

「それが俺に相談したかったことか。」

「そうなんです。ドラマの主演に決まつたことは確かに嬉しいんですけど、本当に私でよかつたのかなつて思つたりしちゃうんです。」  
「つむきながら話す長谷川。…どうでもいいけど、こいつ、食べる量少くないか？これだったら、俺は三十分で空腹になるぞ？」

「そもそも、私が『アイドル』に決まったことに対するもやう思つてましたから。なんで私なんだろう、他にもいい人がいるんじゃないかつて。」

「…………。」

「だから、今回もそう思つたんですよ。私以外にもできる人がいるのに、どうして私が選ばれたんだろうって。」

その後、長谷川は何もしゃべらずに食べることに集中したみたいだつた。…………これで相談内容は全部話したともいうように。

### 3・4 回答 辛辣

そうか。こいつは自分に自信がないんだな。それについて俺に相談してきたのか。

なら、俺の答えは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「おい。」

「は、はい！－な、なんでしょうか！？」

「お前の『悩み』について、俺の意見を言つてやる。それを参考にするかしないかはお前の自由だ。」

と前置きして、俺は俺の『意見』を言つた。

「自信を持て。以上だ。」

あまりにもあつさりと言われたせいなのか、ポカンとしてから、「ど、どういう意味ですか！？」

と訊いてきた。どういう意味かつて？んなもん、簡単だ。

「お前はそれに選ばれたんだろ？ならそれに胸を張れ。そして選んでよかつたと思わせる演技をすればいいだけだ。だから、自信を持つてつて言つたんだ。」

そこからさらに、

「大体、自分に自信がなくてどうする？選ばれたのにはきちんとしだ理由がある。その理由は分からなくても、選ばれたことを誇りに思えばいい。それが自信を持つという事につながるだろうからな。」  
と畳み掛けた。・・・・・・・・色々と思つことはあるが、今は気にしない。

「で、でも・・・・・・・・・・・・・・」

「でも、どうした？」ひこう、役者とかになりたい奴なんか全国にいるんだぜ。そいつらの夢を壊すんじゃないくて、より一層『なりたい』と思わせることが大切なんじゃないか？・・・ま、これが俺の『意見』だ。そこから何を学ぶかは、お前次第だな。」  
その言葉で止めた。・・・・・もう一度言おつ。色々と思つことは

あるが、今は気にしない。

と、話が終わったのを直感したのか、

「そ、そなんですか！……やっぱり、あなたに相談してよかつたですっ！……ありがとうございました！」

とベンチから立つて、俺に向かつてお辞儀をした。

「そんなたいしたもんじゃねえよ。俺は、お前の『相談』に対しての『意見』を言つただけだ。それをどう受け止めて、どう自分の意見にしてくかはお前次第だ。」

「でも！……あなたのおかげで解決したような気がします！本当にありがとうございました！」

そう言つてまたお辞儀をした。…………これ、誰にも見られてないよな？

「あ、いいよ、もう。それよりもお前、それだけで大丈夫なのか見てないよな？」

「へ？え、えっと。大丈夫ですよ？」

と言つていたら、

グギュルルル！

「…………」

今の音、あいつからしたよな？そつ思つて見ると、

「え！？べ、別に、鳴つてなんかいませんよ……いませんからね！」

必死に否定していた。やつぱり、と思つた俺はバイトのために取つて置こうとしたパンを、

「ほれ。腹が減つてはなんとやらだ。食つていいくぞ。」

「そ、そんな、悪いですよ…………」

「お前にそ、その状態だったら次の授業もたないだろ？だからほら、食べ。」

折れたのか、それとも食欲に負けたのか、

「い、いただきます…………。」

と言つて食べ始めた。それから間もなく、

「そういえば、名前を教えてもらいませんか？私、あなたの名前知らないままでしたから。」

と言つてきた。

「…………俺は八神つむだ。あなたは名乗らなくていいや。一度会つた時に、いつきに教えてもらつたから。

長谷川光、だろ？」

「そうですよ。…………といひで、私は何て呼んだらいんですか？」

「八神でも、つむでも、ビラでもござ。ただ、『皇帝』ってだけは呼ぶなよ。」

「あれ、やっぱりあなただつたんですね。つていうか、ビラして私の名前を知つているのに、呼んでくれないんですか？」

と会話していたら、

「そういえば、お礼をしたんですけど……」

「いやね。」

「即答ですか！？」

そこで驚いてんじやねえよ。

「何度も言つがな、俺は『意見』を言つただけ。そんなお礼なんていらない。」

「でつ、ですけど――あなたのおかげで解決したみたいなものですから、私なりにお礼がしたいんです！」

と力説してくる長谷川。どうでもいいが、はやくしないと午後の授業に間に合わなくなつうなので、

「いいぜ。」

若干投げやりに言つたら、

「本当ですか！？」

と言つた後に、

「お礼と言つのはこれなんですけど、見てくれませんか？」

と言つて差し出されたのを見て、やっぱりと思つてため息をつきながら俺は林を出て行こうとした。それに驚いたのか、

「ま、待ってくださいハ神君！…匕つして何も言わないで行こ！」  
するんですか！？」  
と弓を留めに来た。

「どうしてって、俺に『観に来てください』とでもこいつもりだつたんだろ？生憎だが、俺はそういうドラマとかは、撮影も、出演も、観るのも嫌いなんだ。そういう訳だ。じゃあな。」

そのまま行こうとしたら、

「嘘です！！だったらなんであんなこと言えるんですか！？あんなの、演技が好きな人にしか言えないはずですか！？」

と反論してきた。やうに、

「だったら、どうしてハ神君はこの学校に来たんですか！？演技が好きだからじゃないんですか！？」

と言つてきた。なので俺は、自分の本心をばらした。

「はっ。俺は無理矢理この学校に入学させられたんだ。じやなかつたら、こんなところにこよなうとは思わねえよ。」

「！？」

「それにだ、俺はこの学校に来てから疑問に思つていたんだが、この学校の奴らは本当になる気があるのか？」

「あるに決まつてゐるじゃないですか！？」

「それだったらお前ら『アイドル』の親衛隊なんて、なんで作つてんだ？」

「そ、それは…………」

「学校は学ぶところだ。しかも、この学校は『テレビ関係者を輩出』している学校だ。それだったら、ここでは演技を学べばいいものを。」

「

と言つたら、長谷川はまづ黙つたまま、何も言わなくなつた。これでもうこいいか。そう思つて再び歩こうとしたら、

「…………」

「だったら、どうしてハ神君はあんな演技ができるんですか！？」

と、涙をうつすらと浮かべながら顔を上げて長谷川が言つてきた。

ここまで訊かれたら、少し本気で言つてやるか。そう思つて、俺は  
こういった。

「なぜ？・・・・・・・・・・・・じゃあ、そうだな。お前、ヤクザの抗争に巻き込まれて死にそうになつたことは？」

「え？」

「不良グループの喧嘩に巻き込まれたことは? その時にナイフを刺されそうになった時は?」

「な、なにを・・・・・」

「暴力団のアジトに乗り込んだことは？銀行強盗に巻き込まれたことは？通り魔事件の犯人を目撃したことは？暴走族の連中と喧嘩したことか？ないよな？もちろんないよな？」

あ な た は

一あるが、全部な。全部俺は体験した。それらを解決するために俺  
は、あらざり一素でもいはーとこかはがつぱ。生きるためにはば。

何も言わぬだらう

「さあ、がんばってやつらが嫌な顔を

「え？」

「さっきの言ったことから付け足すが、俺は実際に体験している。だから、あんな時間内に終わらそうとするために、いろいろと細工をしているのが分かるドラマが嫌いなんだ。それと、割り切ればいい、と思うだろうが、俺はそんなに賢くはないからな。割り切る、

なんてことはできないんだ。」

と言つて俺は立ち去つた。後ろの方で泣いてる声が聴こえたような気がしたが、俺は気にせず校舎に戻つていった。

### 3・6 惡役 親衛隊

午後の一コマ目が終わって、次の授業の準備をしていたら、俺が座っている席の周りに見覚えがあるやつらが来ていた。

「どうした？ 何か用か？」

と普通に訊いたのだが、その時のそいつらの雰囲気が少し違い、違和感を持った。

「お前ら、話し合いで来たわけじゃなさそうだな。」

「当たり前だ！ …貴様はもう許さん！ …覚悟しろ！ …」

そんなやりとりを聴いた他の奴らが、「また、あいつか。」「今度は何をやらかしたんだ？」と話していた。・・・・・・・・・・

・・・・・こいつらは無視するか。

「んで？ なんで俺が覚悟しなきゃいけないんだ？」

「しらばっくれるつもりか！ …光さまを泣かせた罪、その身で後悔させてやる！ …」

と思いつきり大声で言つたのでクラスの奴らが、「おい、まじかよ・・・・・・・」、「つていうか、どうして光さまに近づけたのかしら？」と、もうだいぶ噂で広まりそうなほど生きよくしゃべり始めた。・・・・・全く、面倒なことになつちました。そう思しながら、「いいぜ。お前らがやるつてこいつなら、オモテ出る。お前らを後悔させでやる。」

と言つて、俺は窓から校庭に出た。ここは一階だから別に怪我はない。それに、この行動に出たのなら、俺について来るだろつからな。俺の行動を見たそいつらは案の定、

「追うぞ！ あいつを後悔させるために！ …」

「おお――――――！」

と言つて、そいつらも窓から出でてきた。数を数えてみるとひとつ三十人くらいはいた。

・・・・・・・・・ん？ 俺を囲んでたやつらは十人くらいしかいなか

つたはずだが・・・・何があつたんだ?と疑問に思つてみると、「さつきの人人が言つた一言で、大抵の人が君を倒そうとしてるみたいだよ。」

いつきが窓の方から言つてきた。まあ、あいつが敵側じゃなくてよかつたぜ。周囲の状況を確認してから、

「さてお前ら。覚悟はできるんだろうな?俺は容赦しないからな。

』

と言つたら突然、

「死ねえーーー!」

と言つて突撃してきた奴がいたので、

「フン。」

バキツッ!!!

一発殴つたらのびたのか、そのまま氣絶した。後二十九人か。とぼんやりとしながら空を見ていたら、

「全員、あいつを倒すぞ!!」

『おお

!!』

と言つて、全員で俺に向かつってきた。数で突撃なんて、サル以下だな。と思いながら俺は、迎え撃つことにした。

### 3・7 亂闘 天才（前書き）

戦闘シーンやらの描寫に期待はしないでください。

「会長。校庭で乱闘騒ぎがおこったのですが、止めに入らないと駄目なのでは？」

「それですよ。でないと色々と詮われますよ。」

「私もそうした方がいいかと。」

「豈かんの意見は分かりましたけど、あの状況で止めに  
入るのですか？」

「これは・」

そこで彼女らが見たのは、突撃してきた奴らを片つ端から倒していく

「どうですか？」それでも行きませうか？

「…………無理ですね～。」

「そう、たな」

「だからどうした！！私は行く！！」

と書いて一人は出て行つた。それを見届けた三人は、

「私達も行つた方がいいと黙りますよ。」

「そうですね・・・・・でも、あの人の戦つてる姿はとても

「総はなつでいいですね」「ううん、アラマの乱戦シーソーを防衛する立場になります」

です。こんな人がいたのですか。

「これはもはや、『天才』と言つてもいいかもしだせんね。」

「どうぞ。」「早いですね。」

見ると、ひとりを除いて三十人が倒れていた。その時に立っていた

人の顔を見たのか

「あら? あの人は・・・・・・・・・・・・

「どうかしましたか？」

「いきましょう、みなさん。」

「どうしたんですか？」いきなり。

「ふふっ。あの人でしたか……………楽しくなりそうです。」

と言つて、割と早足で教室を出て行つた。

「ふむ。やはり儂の目に狂いはなかつたのう。」

学園長室にて。秘書っぽい人と、学園長は校庭を見ていた。

「一人で三十人も…………………………どこの鬼神ですか？」

「あやつの資料を見たんじやが、これがなかなかす」くてな。」

「？いきなり話を変えられると困るのでですが……………どういった内容で？」

「小学校に上がる前から、警察から表彰状を貰つていたようじや。「なにでもらつたのですか？」

資料をパラパラとめぐりながら、学園長は言つた。

「それが……………おお！これじゃ…これ……………

ふむふむ。もらつた理由が『ひつたくり犯の逮捕』だそうじや。」

「しょ、小学生になる前にそんな事件に遭遇していたのですか……

・・・。」

「その後も『連續通り魔犯の逮捕』『強盗犯の逮捕に貢献』とかでもらつてゐみたいじやな。」

「……………。」

「これで判ることはないかのう？」

「随分いろいろな事件に遭遇してゐみたいですね。」

「そう。本富の子が言いたかったのは、おそらくやじじやう。」

「？と、いいますと？」

「あやつがドラマを嫌いな理由。それは実際に事件に遭遇してゐるか

らじや。」

「憶測ではありますか？」

「そうかもしけんが、これがしつくつとくる理由、じや。」

「憶測ではありませんか？」

「そうかもしけんが、これがしつくつとくる理由、じや。」

「…………そうですね。しかし、この騒動に対する処遇をどうするおつもりで？」

「アーニー、おまえがやるんだから、おまえで決めていい。」

と学園長がつぶやいた瞬間、

パリ  
ン！――！――！――！

が。

「だ、大丈夫ですかっ！？学園長！？」

「大丈夫じや。あやつも、儂に直接やる氣はなかつたみたいじやか

「アーティストの才能を発揮するためには、必ずしもアーティストとしての才能だけではなく、その他の才能も必要です。」

「え！？」

と驚いて窓ガラスの方へ駆け寄つて校庭を見ると、

あ、あんなどこるから投げたんですか？

卷之三

校庭の中心に近いところからここまで、実際に百メートルくらいはある。そこからどのくらいの速さで投げたのかと想像すると、秘書っぽい人は顔を青ざめた。

「あ、ありえない。い、一体、どうやつたらいいまで投げられるん

だ。

「投げられたものを見てみると、

学園長の言葉で投げられたものを見た。すると、

「木刀を投げて！」ここまで来ないと自体驚きじゃが、あのスピードで

「で?どうですか?」これは退学なのですよ?しかも、前代未聞です。」「

「じゃが、彼を手放すのは大変惜しいのう。ひよつとすると、大変

な損害になるかもしだん。」

「早く決めた方がいいですよ。・・・・おや？久し振りに生徒会  
が動いたみたいですよ？」

「録画しておいてくれ。儂は処分について考える。」

「分かりました。」

と言つて、学園長は彼らの処分について考え始めた。

### 3・8 遭遇 生徒会

一対三十人の戦いの割と始めの方に場面を戻す。

「うわあ～。一人で特攻しちゃったよ。つていうか、この学園に勝てる人つているのかな？」

といつきがつぶやいたと同時に、

「や、ハ神君！！今すぐ逃げ・・・・・・」

長谷川が入ってきた。間が悪いのか遅れたのか分からぬが、

「今やつてるけど。」

「え！？」

と言つて校庭に行こうとする長谷川。しかし、

「駄目だよ。今あそこに行つたら君も巻き添えくらつちやうからね。」

「いつきが腕をつかんだ。」

「ど、どうしてですか！？？」

「よく見た方がいいよ。」

理由を尋ねる長谷川に対し、実際に見た方が分かると言つてあえて言わないいつき。

しぶしぶ見ると、

『どりやあ　!!!!』

『雑魚どもが。数だけで勝てると思つてんじやねえよ！』

「ゴスツッ！バキッ！ドシャ　！」

『グハ　!!!!』

まとめて攻められていたのに冷静で、それでいて洗礼された動きで攻撃してきた奴らをのした。

「ね？巻き添えくらうでしょ？」

「そ、そうですね・・・・・・・・」

と会話しながらも校庭を見ている一人。すると、

「でもなんで君は泣いていたの？」

「え！？ど、どうしてそれを！？！」

いつきのつぶやきが聞こえたのか、長谷川が驚いていた。

「どうしてつて、親衛隊の人たちがつとむのところに来たから分かつたんだけど……何があったの？」

「そ、それは…………」

と事情を説明しようとしたら、

「ねえ！？あの人木刀もつてるわよ！？！」

との声がしたので再び校庭を見ると、そこには木刀を持つて攻撃しようとしている人がいた。

「あ、危ない！？」

と長谷川が言つたが、

「大丈夫、大丈夫。つとむはそんなものじゃ殺せないから。」

といつも通りの笑顔でいつきが言つた。

『覚悟つ！？！』

ガン！！！

『な、き、効かないだと！？化け物か！？』

『いってえな。だがな、こんなしょぼい打撃で俺が倒せると思ったのか？』

ガシッ！！！

『取りあえず、木刀だけは持つとくか。』

『ガツ！？』

と木刀を持っていた奴の腕をつかみ、木刀だけを落とさせて、そちらへんに投げた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・人の方を。

「ああ。武器持たせちゃった。後はもう、全滅コースましげらだね。」

「す、すごい。」

呆れたいつきと、怖さを通り越してカッコイイと思えるような強さを見て、驚く女子たち。

「これくらい普通にやるのがつとむなんだよね。しかも息上がり

ないし。片手間で相手してゐみたいだ。」

と冷静に状況を見て解説するいつきを見て、八神の本氣はこれ以上なのか、と女子全員が驚いたのは言うまでもない。ちなみに、長谷川はこれをみて「（キウン）」となっていた。

その後、武器を持つたつとむが数十秒で残りの奴らを全滅させ、いらなくなつた木刀は思いっきり投げた。・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・学園長室に。

「あ。の方角は学園長室だ。もしかして・・・・・・・・・・・・・・・・・・この騒ぎに便乗して退学する気かな？もしそうだったら、ビラじょうかな？」

と笑いながら呟くいつき。しかし、その笑顔とは裏腹に、もし退学したらどうしようかと怒りながら考えていた。その時、

「あ。誰かまた来たみたいだ。誰だろう？」

と、新しく来た人を見て、自分の情報にはない人が来たことに驚いた。それを見たひとりの生徒が説明してくれた。

「本宮君、知らないの？生徒会の一人で岡部未来おかべみくって言ってね、この学校で起きた騒動を、基本的に取り締まってるのがあの人なんだよ。」

「ふうん。そうなんだ。ありがとね。」

いつきはその場でお礼を言つて、すぐさま校庭に目を向けた。観ると、つとむと岡部がなにやら口論していた。その口論はそのまま殴り合いに発展し、岡部が殴りかかってつとむが避ける、の繰り返しだった。

「中々やるみたいだけど、結局駄目だね。つとむと彼女の場数が、倍以上だからかな？」

その光景を見ていつきは呟いたが、それは誰にも聞かれなかつた。そして、しばらくすると、

「校舎側からまた人が出てきた。・・・・・・・・・・もしかして、生徒会かな？」

残りの生徒会のメンバーが、校庭に集合した。その中に一人、見覚

えのある人がいた。

### 3・8 遭遇 生徒会（後書き）

どこまでここが嫌いなんでしょう、この主人公？

3-9 ものまねなし ものまねあり

また時はさかのぼつて、三十人を全滅させた後。戦っている途中で木刀を使い出したつとむにとつて、残つていた十数人は取るに足らない相手だった。襲つてくる相手を木刀で一振りしただけで、その相手は全滅。それを繰り返す単調な作業になってきたために、つとむは欠伸をしだした。

「ふあうあ。・・・・・ん?終わったのか。やつぱり弱かつ

たな  
そういう 怪我はおそらく力したもんじゃねえから

と語り、ひの刃刀をどう見るかと考えていたが、ふとこれを使つて退学であるんぢやないのかと思いついた。そして、

「おまえは確実に退学にならうよ。」

ビュン！！パリ  
ン！！！！！

だ、大丈夫ですか？！？学園長！！

アリスの元気な言葉に、アーヴィングは心地よい笑みを浮かべた。

木刀は投げ終え、これが二

誰かがこっちに向かってきた。そいつが俺の前まで走ってきて、  
恐らくと言つか、間違いなく女子だろう

た

生徒会だ！！大人しくして！！

いやもう絶れでたし この状況を見ればわかるだろ

それ以前に、来ること自体遅かったような気がするんだが。そう思

たが、心と口の間に最初に言つた一言が氣になつた。

「ああ。確か一回、二二八が主導

「ああ、確かに語ったぞ！！私は生徒会書記で一年の团委員だ！」  
「どうか。なら、じいづらをどうにかしてくれ。どうせ、軽い怪我

だから心配はいらないが。」

「それもやらないといけないが、今はお前を倒す！！」

「ハア！！？いきなり何言つてんだ？お前？」

「なぜなら、私は騒動の鎮圧を任されているからだーー！」

とここにそいつは偉そうにした。・・・・・・・・・。

「あつそ。言つておくが原因は俺じゃなく、そこにはのびているそいつだ。」

「何！？」

「ただ、今は起きないんじやないか？」

「それだつたら、誰のせいにこいつなつたのか分からないじやないか

！！」

俺に言われてもな。そいつに対してだけは、私怨を込めて他の奴より強く殴つたからな。一時間すれば起きるんじやないか？ そう計算していたら、

「原因がどうであれ、お前はこいつらをやつたことには違いないだろ？」

と、口調が多少冷静になった。何かスイッチが入つたのか？ 今ので？「最初に襲つてきたのはそいつらだが。俺は全部、正当防衛だぞ？」

「それでも、他に方法があつたはずだ。」

「方法、ねえ。・・・・・話し合ひは無理だろ？ なんせ、あいつらが襲つてきたんだから。」

「もつと穏便におさめる方法があつたのではないか？」

「知らん。」

その一言に、そいつは黙つた。その時に、俺はそいつの雰囲気が変わつたことに気付き、戦闘態勢を取つた。

「おつかねえじやねえか。なんだ？ やる気か？」

「なるほど。貴様はテキるみたいだな。なら本氣で行かせてもらおう！」

そう言つてそいつは、俺との距離を一気に縮めた。へえ、なかなかやるじやないか。と思いながら、そいつが次々に繰り出す攻撃を、

かなり余裕を持ちながら避けていった。

・・・・・・・・・・・・・JRのゲートならまたの駄せしないな、ま

だ

俺の親父、もしくはいつきのＳＰの攻撃だったら紙一重か、かすりそうだ。

それに、どうしてお前は攻撃しないんだ？

と質問してきた。え？ それ言わないと駄目なのか？ そう思いながら言おうとしたら、校舎の方から人がくるのが見えた。俺が何も言わないのがチャンスと見たんだろうが、俺の表情が気になつたのか、そいつは後ろを振り返つた。そして、

「か、会長！？な、何故来たのですか！？私はてっきり待っているのだとばかり……」

と言つた。会長？もしかしなくてもそれつて、生徒会の会長だよな？それは誰の事だろう？と思つて、一いちらに来る生徒を見てみた。そしたら、見覚えのある奴だつた。

「あら？ それは当然の事じやありませんか？ 私も生徒会の一人なんですから。」

「お、お前、あの時の…………！」

「覚えてくれていましたか。私としては嬉しいことです。」

「…………まさか、あんたが会長か？ 白鷺さん。」

「名前まで憶えてくれましたか。八神君は記憶力がいいみたいですね。」

くそっ！ そういうことかよ。うちの学園の制服着た、見慣れない奴だと思つたら生徒会の会長か。…………しかし、あいつも俺については知らなかつたみたいだな。

「まさか、あなたがこの学園にいるとは思いませんでしたよ。」

「俺は何年生かと考えていたぜ。制服を着ていたからな。」

「でも、この制服結構好きですよ？ 私は。」

「会長…………この男とは知り合いなのですか！ ！ ？」

会話していたら、岡部が割り込んできた。なぜだろ？ 俺としては助かつたような気がする。

岡部の質問に対し、

「まあ、知り合いといえば、知り合いですよね？」

「俺に振るな。」

白鷺は俺に振つてきた。というかよ、

「会長！ そんなのんきに話していいで、さつわと仕事しましょ

うよ～。」

「やうですよ、会長。話すことにはいつもできますから、その前に仕事をしましょう。」

この一人の話くらい聴いたらどうだ？ と、俺が思つたが、  
「そついえば、あなたがつくつたチーズケーキ、とてもおいしかったですよ。作り方を教えてくれませんか？」

話は脱線していく一方だった。

……………とてもじゃないが、話を修正で  
きる気がしない。

そう思つた俺は、

・・

「会長……逃げちゃいましたよ……」

「というより、教室に戻つてゐるような気がしますね~。」

「会長。あなたが話かけている少年はあつちに行つてしましました

が。」

「あら?」

無視して自分の教室に向かつた。あんな奴ら相手にするだけ無駄だ  
な。そう思いながら、自分の席に置いてあつた荷物を、手早くまと  
めていつた。その時、

「あれ? 帰るの?」

いつきが笑顔で訊いてきた。長年の付き合いだから分かるが、こい  
つがこんな顔をする時は、大抵、俺に何か良くないものが降りかか  
る。思えば、SPとの喧嘩だって、一週間以内に山からの脱出だつ  
てこんな笑顔だった。今回は何が起きるのかとビクビクしながら、  
「帰らねえよ。ちと、学園長室に行くだけだ。」

正直に言つた。するといつきが、

「・・・・・・・・・・・・・退学する気だよね?」

と声のトーンを普段より低くして言つた。そういうや、こいつにはよ  
く喋つていたな。退学したい、とか。まあ、それに関しては、  
「する気ではあるが、こればかりは学園側の判断だからな。何で  
あろうが素直に受け取る。もつとも、退学だったら俺としては儲け  
もんだな。」

と言つた。そんなんだよな。こればかりは学園側の判断じゃな  
いと無理なんだよな。とか思いながら、俺は荷物をまとめ終え、  
学園長室に向かつた。(ちなみに、生徒会のメンバーは、俺の事よ

り白鷺に手を焼いていた。）

「邪魔するぜ。」

と言いながら俺は、自分で割った窓ガラスのところから学園長室に入つていつた。

「おい、君ー！ 校舎の中なんだから、靴ぐらい脱げーー！」  
…………俺が窓から入つてきたのには、ツッコまないのか？

「わあつたよ。……………とこひで、爺さんは？ まさかさつきので逝つちまつたんじやねえだろうな？」

と靴を脱ぎながら俺は訊いた。…………窓ガラスの破片がない。もう掃除したのかよ。と掃除の速さに驚いていると、

「お主、自分で外しておいてよく言えるのう。」

「まあ、そうだがよ。……………んで？ ここまで騒ぎを大きくしたんだ、当然、その分の处罚が下るんだろうな？」

つていうか、あまりにも軽かつたら暴動が起きるぞ。  
「ふむ。それなんじやが、まだ迷つておつてのう。」「早くしたらどうだ？」

「あ。言つのを忘れていたが、主が三十人倒した後は録画されておるからの。」

「そつか。別に暴れてないからいいんだが。」

実際は生徒会の奴が暴れていただけだ。

「学園長。この者の処分をどうするおつもりで？」「と秘書っぽい人が催促してきた。俺としても早くして欲しいんだが。と、そんなことをやつていると、  
「コンコンーー！」

ドアをノックする音がして、

「失礼しますよ。」「失礼します。」「失礼しまーす。」「失礼する。」

生徒会のメンバーが学園長室に入つてきた。

「ふうむ。…………おや？白鷺君ではないか。今日は何用じゃ？」「今日はですね、そこの八神君に用があるんですよ。」

と、入つて早々、爺さんと白鷺が会話をしていた。…………白鷺を俺の方を指しながら。

まあ、あながち間違っちゃいないな。

「彼かね？残念じゃが、この騒動の処遇を考えている最中じやから、その用というのは意味がなくなるぞ？」

「そうなんですか？…………ですが、この騒動を仕掛けたのは彼じやありませんよ？」

「そうなのか？」

白鷺の奴、余計なこと言つたな。…………確かに、仕掛けたのは俺ではない。ただ、騒ぎを大きくしたのは俺だ。それを判らせないために、俺は全員を氣絶、もしくは失神させたんだが…………なぜばれた？と疑問に思つていると、

「クラスの人に訊いたんですよ。丁度、知り合いもいましたから。」と答えをばらした。それにも、知り合いだと？うちのクラスにこいつの知り合いなんていたのか？と思つていると、気付いた。生徒会四人の後ろに、よく見ると一人ほど人がいることを。白鷺が、そいつらに「入つていですよ？」と言つと、その一人は入つてきた。

…………まさかその知り合いで、

「いつき！？お前かよ！？…………それと、なぜ長谷川がいるんだ？」

「私に対しては冷たくありませんか！？…………私がそもそもの原因なんですから。」

「いやあ～、まさかここに白鷺さんがいるとは思つていなくてね。しかも三年の『アイドル』で、生徒会長だったなんて。全く、まさか三年までは関わらないだろ？と思つていたから調べなかつたの

があだになるなんてね。」

そう、まさかのいつきであった。ちなみに、長谷川も来ていたが、今俺ことつてどうでもよかつた。この状況をみて俺は、白鷺の『知り合』の意味を悟った。つまり、

「白鷺さんも金持ちだつてわけか。」

「本宮君と一緒にいるからでしょうね、私の素性を知つても驚かないのは。」

「そういう事にじとくか。…………それで、こいつらから何を聴いたんだ？」

「この騒動のはじまりについて、ですね。」

「ほう。処遇については悩んでおつたから、その話を聴いて考えるとするか。」

「なら、お話ししますね？」

と言つて、白鷺はこの騒動の始まりから順に説明していった。いつきと長谷川から訊いた話だろうから、それらの情報は全て否定できなかつた。

「……………とこいつわけです。つまり、八神君は仕方なくこの騒動を片付けるために、こいついう行動に出たんですよ。」

そう白鷺は締めた。その言葉で生徒会全員は納得し、学園長たちも納得したみたいだ。ただし、

「それは分かつたが、学園長室の窓ガラスを割つたという行為の説明はできぬいぞ？」

と秘書っぽい人が言つた。そう。俺は、それとは関係なく窓ガラスを割つている。しかも、学園長室の。元々は、さらに退学処分の決断を強めるためにやつたものだが、今じや処分を受けるための保険となつっていた。

「……………ま、処分をえ受ければ俺に関わる奴はいなくなるからいいか。」

しかし、それは甘かつた。

「それは本富君が言つていきましたけど。学園。あなた、彼にドラマの出演について言つていたそうですね？」

「この白鷺の声は、本当にこの声なのかと疑いたくなるほど平原で、冷たい声だった。

「…………」

「それなら、彼がこのよつな行動に至つても、おかしくはないでしょ？」「

これは完全に『屁理屈』だ。しかも、これにはまつかりと空いた『穴』がある。そう思つたが、ひょっとすると俺が『ドラマ嫌い』なことを知つて『いるからわざと空けたのか』と思つて直した。

すると学園長が、

「彼が、ドラマが嫌いだってことを知っているのかね？」

と白鷺に訊いた。いつき、俺、長谷川、白鷺は驚かなかつたが、他の生徒会の奴らは驚いた。

「ついさっき知りましたけどね。…………嫌がつているのに薦めようとしたから、それに対する報復行為じゃないでしょうか？」「ふむ。やうともとれるのう。…………となると、儂にも責任があることになるわい。むへ、ビリしたものか…………。…………。」

と、爺さんが自分にも非があることを認め、「これからビリするか考え始めた。このやりとりを聞いて疑問に感じたことを、俺は白鷺に訊いてみた。

「しかし、なんでここまでするんだ？」

「あら。可愛い後輩の頼み事ですから、これぐらいやりますよ。それに、まだレシピを訊いていませんからね。」

「結局それなのか…………。」「どうなだれて」というなど正在りと、

「ねえ、つとむ。なんで白鷺さんと知り合になの？僕と一緒にいる時は会つたことないよね？」

といつきが訊いてきた。

「ああ。昨日、店に来たんだよ。誰かは知らんが、他の奴も一緒にいたよな？」

「平塚さんですか？あの人は雑誌の記者で、昨日取材を受けていたんですよ。」

「へえ～～、つとむつよく、いつも人たちと遭遇するよね～～。

「へ～～した、いつき？なんで怒つたよつた声なんだ？」

「ベツ、ハシ？」

?どうしたんだ?いつきの奴。みると、長谷川もいつきと同じ状態だった。どうしたんだ?二人とも?と首をかしげていたところで、「そういえば、お聞きしたい」とがつたのですけど、よろしいでしょうか?」

と白鷺が訊いてきた。俺にだよな？

一 話をたべりとひ?

昨日と一昨日の騒動を収めたので、あなたですか？」

ああ、碌かはそこだか。假面がうつむき、心を收めたわけじゃないぞ！」

四六九

アーティスト

その爺さんの顔で、それを奪へたのをやめた。

お主の处分に一してしゃか

「そう爺さんが言つたので、俺達は爺さんの前に並んだ。」

「なにでありますか？」

「私は会長ですかから。」

「僕は親友だから。」

「私は原因ですから。」

「我々は生徒会だから。」

たをいきません?」

井口山房詩集

他の生徒は、反省文でも書かせようかのう。以上じや。

それを聴いた時、生徒会の連中は「そういえば、我々は何のためにこの騒動に首を突っ込んだのでしょうか?」「彼の処分を軽くする

ために、ですよ。」と言っていたし、長谷川は「よかつたです。退学にならなくて。」、いつきは「一週間か・・・・・・・・ま、退学にならなくてよかつた。」とそれぞれ言った。

「どうした？嬉しくはなさそうじゃが。」

「一ヶ月でよかつたじやねえか。なんで一週間？」

「理由はないわい。」

「それでいいのか！仮にも教育機関の長だろ！――」

「冗談じゃ。理由は・・・・・・・・悪いが言えん。」

「は？」

「言えない？どうしてだ？」

「それも言えんわい。」

「それも秘密か。・・・・・・・・まあいい。」

「これで処分が決まつたんだろ？なら長居は無用だ。じゃあな。」  
俺は荷物を持つてそのまま帰ろうとした。その行動を見て、

「あら？帰っちゃうんですか？」

「えへへ帰っちゃうの～～？」

「帰るんですか？」

三人が俺を引き留めようとした。・・・・・・・・・・・・・・いつきはいいとして、他の奴らは何故俺を引き留めようとする？そう思つたが、

「じゃ。」

無視して、学園長室の窓（俺が割つたといひ）から出た。  
これからは大分バイトができるな、と思しながら。

### 3・12 処分内容の理由 マスター（前書き）

三十話突破してました。読んでくれているみなさん、これからもよろしくお願いします。

### 3・12 処分内容の理由 マスター

つとむが帰つてしまつた後、「帰つちゃいましたね……。残念です、まだレシピ訊いてないのに。」

「会長。そんなにおいしかつたのですか？」

「とても美味しいですわよね？本富君？」

「そうですよ。……………そこまで訊きたいの？つとむのレシピ。」

「何か言いましたか？」

「いえ、別に。」

「どうでもよくはないんじやが、お主ら。これから授業じやぞ？八神については儂が説明しどくから、そつもと自分らの教室に戻らぬか？」

「…………あ。」「…………」

学園長の言葉で全員が自分たちの教室に戻つた。その後、「いいのですか？彼も言つていたように、最低でも一ヶ月の停学が妥当だと思うのですが。」

「そんなこと言われてものう。あの一人が、無言の圧力で見てくるからのう。」

「誰ですか？」

「本富の子と、白鷺嬢じや。」

「もつと厳粛してくれませんか？」

「それは無理じやな。あの二人が関わつてしまつたら、割と面倒なことになるからのう。」

「そうですか……………あ。きちんと録画はしましたからね？」

「八神君には、追悼の念でもおくるかのう。あの一人に関わつたばかりに……………。」

「聴いてるのですか…………？それと、まだ彼は死んでいませんよ！」

割れた窓ガラスのことなど忘れ、つとむの心配をしている人がいたとか。

「ん？ つとむか？ やけにはやいな、さぼりか？」

「ちげえよ。停学になつたからさつさと来たんだよ。」「お前が停学？ …… 何やつたんだよ、一体？」

「ちと、乱闘騒ぎになつてな。」

その一言で、マスターは事情を理解したようだ。「ま、詳しいことは訊かねえからよ。バイトするんだつたら着替えてくれ。」と言つてくれた。助かるね。

それから、俺は着替えていつも通り仕事を始めた。マスター曰く、「停学なんだから、営業開始からいつもの時間までやれよ。」俺としてはそのつもりだったが、「連絡してくれれば行く。」とだけ言つといた。

で、働いてみて思ったことだが、いつもの時間とは違い、人が少ない。そりやそりや。今の時刻は午後二時をちょっといまわつたばかり。この時間帯だと本当に暇な奴らしか来ない。それか、締め切りに追われる奴らぐらいか。

「暇だ。」

そうつぶやいたら、マスターに殴られた。

「ぼやいでないで、働いたらどうだ？」

「俺が普段してる仕事なら終わつたぜ。他にないのか？」

「ん？ そうだな・・・・・・・・・・・・ない。」

「ないのかよつ！――！」

「仕事があるまでは本でも読んでる。レジの前でな。」

と言つて、スタスターと行つてしまつた。・・・・・・・・要するに、マスターも暇なんだな。

その後しばらくして午後三時になつて、ようやく俺が来るときの

常連が来た。

「いらっしゃい。」

「ハ神君じゃないか。いつもより早いけど、もしかしてよひやくサボリかい？」

「ちげえよ。停学くらつたから直できたんだよ。」

「ということは、いつもより早く来てもハ神の料理が食えるんだな。

「

「嬉しいね~。」

そんなに俺の料理は美味しいのだろうか？時折不思議に思うが、食つたやつらが「おいしそう」というので、美味しいのではないかと思っている。…………これをいつきが知つたら間違いなく、「君はいろんなところが無自覚だよね。」と言われるんだろうな。ふう。

「注文は？」

「俺、ミーツ spa。」

「じゃあ、私はイチゴパフェと、カフェオレかな。」

「俺はハヤシライス、粉チーズ付き。」

「マスター！！」

「分かつてるとカフェオレは出しどとから、他のやつづくれー！！」「了解！！！」

と言つて、俺は料理を作ることにした。…………やつづくまでが嘘のようだな。と今本氣で思った。二十分後、「はいよ。ミーツ spa、イチゴパフェ、ハヤシライスの粉チーズ付  
け。」

「相変わらずうまそうだな~。」

「ホントだよね~。」

「ああ。」

出した料理を見て、それぞれに感想を言つていた。そういうえば……

・・・・・・・・・・・・

「今日、来れないんじやなかつたのか？」

「それがね、美鶴が予約間違っちゃったみたいでね、  
「明日になつてしまつたんだ。」

田田にた  
一  
カハナ

「うん、…で、何の予約だったんだ？」

「旅行だよ。俺達三人で行くんだ。」

「それはいいじゃねえか。どこに行く予定なんだ?」

「九州のほうだな。」

「その話聞いてたら、俺も早く旅してえなあ、って思っちゃったぜ。」

「八神君はどこに行くつもりだい？」

旅したいとは思ってるぜ。」

「一人で？」

「おお」

「アカウント」

その風一談笑ノト

「うん、俺の机はいいやつだ。

お前が他の黙食のるべに力がかかる

「 あ 「

マヌダリの一言で  
密の方の動きが止まつた

わてたんたな

一そ、それじや、丁度ハ神君の料理もあるわけだし、マスターの賄

飯出してよ。

「そうだね。よろしく、マスター。」

「お願いする。」

客の一人が機転を利かせて、俺とマスターの料理対決になつた。こ

れ、誰が得するんだ?

「忘れてたんだな？・・・・・まあいいか。お前らに本当の実力

を見せてやる。」

と言って、マスターが調理室に行つた。

「と、いつ訳で、ちょっとの間、八神君の料理は食べられなくなつちやつた。」

「楽しんだな。」

と話していること十数分、マスターがいつもの賄飯を持ってきた。  
「ねえ。一介が俺の実力だ。」

ほらよ、これが俺の実力だ。

えか！  
」

え!? これが本当に、マスターかつぐのた料理!!! ? 「

「信し合われん。」

信じられないだろうが、これがマスターの本気。いつも出してる料理は、何故かおいしくないのだが、賄飯だと物凄くおいしくなる。・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
これはいつきも知らない情報だ。

『レシピ通りにつくってるはずなのに、何故か不評が来るんだよな

と断つて一歩。一歩、理由にならば二歩。

その賄飯を客の一人が食べてみると、

卷之三

「確かにいっしそうだけど…………。」

と語りながら、一人田も食べてみると、

と驚いていた。三月三日朝では、河井源吉は

うまいよな、それ。

「まさか本当においしかったとはね。最初はただの謙遜だと思った。」  
数分で三人は食べ終えて、それぞれ感想を言った。

「な？嘘じゃねえだろ？」

「そうだね～。これはハ神君とどちらが美味しいのかな～？」

「どっちもおいしいから、判断がつかないな。」

「そうだな！じゃ、引き分けだな！！」

結局、料理対決は引き分けになつたらしい。俺としては、マスターの方が上だと思うのだが、マスターも、その判定には満足しているみたいだ。

その後、俺がつくつた料理も食べ、会計時に『賄飯・三百四十円』が追加され、その常連の人たちはちよつと後悔したみたいだった。  
・・・・・意外と抜かりないよな、うちのマスター。

そして、俺が普段来てる時間帯になつた。だから、いつもの客が来ている。ま、それは俺としては、ありがたいんだがな。何故って？いつもと変わらない日常。それは平穀の時間と変わらないと、俺は感じているからだ。ああー、あいつらと関わらないところほど平和に感じられるのか。と思いつながら料理を作つていて、

カラソローネン！！

「いらっしゃい。……………久し振りだな。」

また客が来た。この時間帯でもそんなに客が来ないのがこの店なんだが、今日は客が多いな。作り終えた料理を運びながら、俺はそう思った。

「ほれ。できただぞ。」

「お～。やつぱり八神君の料理はおいしそうだね～、いつも。「やつか。」

と客と話をしていくと、ふと誰かの視線を感じた。しかも複数。誰だと思って辺りを見渡すと、見つけてはいけない奴らを見つけてしまった。…………もしかして、さつき来た客はこいつらか？そう思いながら、じつやつてカウンター席を通らずに調理室に行こうか？と考えてこねと、マスターに捕まつた。

「おこハ神。こつち来て相手しろ。そつちの方は何とかしてやるから。」

「はあ！？ザケンじやねえーじつ考えても地雷じやねえかーーわざわざ踏みに行くかよ！」

「クビにするぞ。」

「……………わあつたよ。たくつ、無事でいたい」とこねだぜ。」

「任せたかんな～。」

ハア。もうじうじうもなれ（一度田）。

「やあつとむ。今日は大分稼げるんじゃないかい？」

「やつぱりお前か。それで?なんでジジイの所に居たメンバーがここにいるんだ?」

「へー?え、えっとですね・・・・・・」

「それはですね、学校が終わって後に生徒会のメンバーでここに来る予定だったのですが、その時に本宮君と長谷川さんがここに来る話をしていたので、なら皆さんで行きましょうと呟つ話でまとまって、今に至るわけです。」

「丁寧な解説をありがとう。でも、結局は全員がここに来る」といってたじやねえか。」

「あら~。」

「そうなりますね。」

「そうですね~。」

「本当ですね。」

本当にここつは抜けてるんじゃねえか?そう思わずにはいられないのだが。

と、そんな話をしていたら、

「やういえばや、たつき僕達のこと『地雷』って言ひてなかつた?」  
こいつきが低い声でそう言った。ここつは地獄耳か?と一瞬思つたが、ここつはあんまり広くはないため、俺の声は普通に聞こえる。

・・・・・・うなつたら腹くるか。俺はそう思い、正直に言つた。  
「言つたよ。悪かったな、それは。だけどな、お前も分かつてるだろ?俺は、あの学校は嫌いなんだ。そんなところの奴とはできるだけ、関わりたくないんだ。」

ここで俺は一区切りした。長谷川はまつむいて表情は見えないが、おそらく泣きそうになつてているのだろう。丘鷺は何やら思案顔だつた。他の生徒会の奴らは「あいつ、やっぱり殴つてやるーー。」「落ち着いてよ~岡ちゃん~。」「ここは店内だ。落ち着け。」とさつていた。

・・・・・なんかスマン。

残つたいつきは「どうと、いつもの表情ではなく真剣な顔で俺の話を聴いていた。」「こんな顔も出来るのかと思っていたら、そこまでハツキリ言うという事は、やっぱり君はあそこにいるのが嫌いなんだね？」

「ああそうだな。俺は嫌いだ。だがな、「

と、いつきの質問に肯定してからこう言った。

「だがな、俺は一生懸命に役者とかになろうと頑張ってる奴は良いと思うぜ。」

これは俺の正直な思いだ。頑張る奴はすぐ」と思う。

カウンター席の奴らを見てみると、長谷川は頬を染めているし、いつきは「君はいつも正直な思いを口にするよね。反応に困るんだけどな。」と言つてゐるし、白鷺は「ふふ。八神君は正直ですね。」と言つてゐるし、生徒会のメンバーは「カッコイイですね。」「そうだな。」「フン！あればどうせ演技ではないのか！？」と言つていた。おいコラ、最後の奴。疑いすぎだろ。そう思つて、

「さてと、長話はここまでだ。なんにする？」

注文を取ることにした。こんな話、それほど終わらせないと他のバイトに行けなくなるからな。

「じゃあ僕はいつもね。」「私はこの、ショートケーキで。」「それでは私は、昨日と同じチーズケーキで。」「私はイチゴパフェで。」「私はイチゴのタルトで。」「私はチーズケーキだ！」一斉に注文してきた。分かつた、分かつた。

「モンブランひとつ、ショートひとつ、チーズ一つ、パフェひとつ、タルトひとつ。」

と言つて、俺は調理室に向かつた。こりや多いかな？

つとむが調理室に入つた後、

「それにしても、どうして八神君はバイトをしているのですか？」

「うちの学校はバイトを許可していますが、やるバイトは普通、各学科に関係のアルバイトをしていますよ。ですが、」

「ハ神君はその関係ではなく、普通の学生がやるバイトをやっていましたね。申請はされていませんが。」

「え？ あれって、申請しなきゃダメだったの？」

「ここを紹介したのはあなたですか？」

「そうだよ。つとむがどうしても、つて言つかひ。」

「いつきがはにかんでいうと、

「その話を聞くと、ハ神君と君は、昔からの知り合いのような気がするんですが？」

生徒会のメンバーの一人がこう訊いてきた。

「そうだよ。僕とつとむは幼馴染なんだよ。」

と嬉しそうに話すいつき。

「ところで、どうしてハ神君はここでバイトしているのですか？」

そこで長谷川が話を戻した。

「ああ、それ？ それは簡単だよ。単に小遣い稼ぎのためだよ。親が

小遣いをくれないらしいからね。」

「え？」

「そりなんですか？」

「うん。だって」

と話をしようとしたら、

「そこまでだ。ほらよ、注文の品だ。」

つとむがそれを遮った。

### 3・14 評価 急ぎ（前書き）

一万PV突破いたしました！・・・・・・・って、あれ？一番最初の作品より早い気がしますが、きっと気のせいでしょう！これからも、お付き合いください。

「まつたく、気付いたら俺の身の上話になつてたじゃねえか。しかも、なんでいつきが話してるんだよ？」

「あはは。最初の話題が君だつたから、ね。」「

「あつそ。・・・・・まあいい。わざと食べろ。」「

「・・・・・いたま～す。」「」「」「」「

そつぱつて、いつき達は食べ始めた。

「おーし～。やっぱり、つとむの料理はいつ食べてもおいしいね～。」「

「そうか。」「こつはこつもそんなことを言へ。・・・・・嬉しいが。」「

「お、美味しいですっ！－ハ神君！－」「

「お、おづ。ありがとな。」顔が近い。引くぞ。

「」のレシピ教えてくれませんか？」「

「頑張つてつくってくれ。」教えてたまるか。

「おいしいです～。」「

「意外においしいですね。」「

「意外とはなんだ、意外とは。」よく言われるが。

「・・・・・　おいしい。」「

「そりやどうも。」信じてなかつたんだな？

それから、少し話をしていたが、

「あ。やべっ！」

「どうしたんですか？」「

「マスター！俺上がるから！またな！」「

「明日はどうするんだ！？」「

「多分、無理！－」「

と言つて俺は更衣室に駆け込んだ。後ろの方でマスターが、「マジでかっ！－」と言つていたが、気にしなかつた。

急いで着替え終え、マスターからバイト代を貰い、店を出た。ふう。一つ田と二つ田のバイトの間の時間がきついんだよなあ。ま、こうなつてもいいと言つちましたからな。愚痴言わないでこぐか。そう思つて、二つ田のバイトへ向かつた。

……………何事も無ければいいと祈りつつ。

「どうしてあんなに急いでいたのでしょうか？」

「ちつ。つとむの野郎、時間を理由に逃げたな。」

長谷川が、なぜ八神は急いでいたのか、と疑問に思つたが、マスターは逃げたことを恨んでいた。…………相手が美人と評してもよい人たちと、頭が上がらない人だからである。

そこでいつきが、

「バイトの掛け持ちをしてるからだよ。」

と言つた。それを聞き逃さなかつた白鷺が、

「掛け持ち、ですか？どうしてそこまでお金が欲しいのでしょうか？」  
と訊いてきた。それに答えたのはもちろん、いつきだつた。

「さつき言いかけしたことなんだけじね。つとむの家は、まあ普通の家なんだよね。経済面は。」

「…………？」

いつきが経済面だけを普通と言つたので、他のみんなは『なぜそこだけ？』と思つた。

「そこには触れないでおくけどね。…………とにかく、つとむの両親が『高校生になつたら自分でバイトしろ。』って中学一年の頃に言つたんだ。確かに、その時から小遣い止められてて、遊びに行つても何も買えないで見てるだけだつたんだよね。ま、そのおかげか知らないけど、つとむは記憶力もよかつたんだよね。』いつきが詳細を説明し終えた時に、全員が『割と大変な思いしてるんだなあ～』と思つたのは言つまでもない。

「さてと、僕もそろそろ帰ろうかな。みんなは？」

「あ、私も帰ります。」

「私も帰らないといけません。もうすぐ迎えが来ますので。」

「私も帰らないといけないな。」「私もですね。」「私もです。」

と全員が帰ることになったのだが、

「会計。金は払つて行つてくれ。計二千四百二十円だ。」

マスターが、金を払つていけと言つた。

「誰が払おうか?」

「なら、私が払いましょつか?」

「白鷺先輩、いいんですか?」

「構いませんよ。今日も来ようと思つていましたから。」

「ありがとうございます、白鷺さん。」「ありがとうございます。」

「いえいえ。今日はとても楽しに時間を過ごさせていただきました

から、そのお礼です。」

「会長、我々の分もすみません。」「助かります。」「感謝いたします。」

「どういたしました。・・・・・では、これでお願いしますね?」

「五千円札か。普通の高校生がポンと出せるような金額じゃないんだが・・・・まあいい。お釣りの千五百七十円だ。」

「ありがとうございます。」

と言つて全員が出て行つた。それを見届けた後に、

「明日の店、どうすつかな?」

とマスターがつぶやいたのは、誰にも聞かれなかつた。

幕間　八神つとむの災難な一日（前書き）

時系列？何それ、関係あるの？

というのは置いといて。

このお話はつとむが長谷川光に会つ前のお話です。

## 幕間 八神つむの災難な一日

よつーなんでか知らないが俺のちょっとした一日を紹介することになった。正直言つと、面倒だ。

大体、なんで俺の一日を紹介しなきやならねえんだ！んなもん必要ねえだろ！しかもずっとやってるじゃねえか！！

愚痴を言つてスッキリした。本当は一、三十個くらいあるのだが、今回はこれくらいで勘弁してやるぜ。

ほんじゃ、始めるか。休みの日の紹介だけどな。

俺は、休みだろうが平日だろうがいつも六時に起きる。どうじつって？習慣だ、習慣。

そのあとは着替えて、一階へ行く。ただ、今日は一階へ行こうとしたら、その前に立ちふさがっていた人がいた。

「どうした、茜？」

「お兄ちゃん。おはよつ。」

「おう。おはよう。・・・・なんか怒つていなか？」

「別に怒つてないよ！ただ、昨日は私のこと無視して一階に上がったよね！？」

「あ？・・・・・・・・あー、そうだったような気が・・・・・・・・

・・。」

「ひどいよ！一人の妹を無視してそのまま行くなんて！！！」

なんだか変なことで怒つているのが、妹の八神茜。ま、義理だが。朝から元気だなーと思いながら、俺は茜に謝つた。

「スマン。昨日はとてつもなく疲れていたんだ。気づかなくてごめん。」

そう言つたら、急に茜の勢いがしほんだ。

「あ、そ、そその・・・・・うん！ 今回は許してあげる！ 条件付きでだけど…」

かと思つたら、再びよみがえつた。ていうか、どうでもこいことで怒られてないか、俺？

今更ながらそう思つたが、それを言つとまた怒られそうだったので、俺はおとなしく従つことにした。

「で？条件って、なんだ、一体？」

え、うそ、とそのあと  
もうしかして、勢いで言ったのだろうか？

そう思つた俺は、なら別に従わなくていいんだじゃね？と思つて

「ああ、今田」一橋一雄（いのう）は、今田の名前を呼んでいた。そしたら西が

と言つてきた。明らかに即興のよつだつたが、これ以上の条件を付

けられたひ面倒なので、俺は

本居宣長

一階に下りたあと、俺は朝食の準備をする。普段はお袋がやるのだが、休日に関しては俺がやることになつていて。西にでも任せつけいいだろといつたが、お袋曰く『家事ができる男はモテるわよ。』だと。

それで文句は言わなくて済んでいるのには理由があるで、をするときに料理くらい作れないと大変だと思ったからだ。

さて、そんな話をしていううちに朝食が完成した。俺は、テープルに人数分の料理を並べた後、一人で食べ始めた。いや、食べ始めようとした。なぜなら、

「おせよ、つとむ。今日も元気そうだな。」

「親父。さつさと食べろ。会社に遅刻するぞ。」

俺の親父、ハ神すすむが下りてきたからだ。起きたばかりだとみられるが、スッキリしていた。そんなに気持ちよく寝られたのだろうか？と、俺は思った。

「はつはつは。俺がそんなへマすると思つつか？」「思う。」

親父の質問に対し、俺は即答した。当たり前だろ？ 雰囲気的にダメサラリーマンだし。

俺が即答すると思つてなかつたのか、親父はショックを受けた感じでとぼとぼとテーブルまで来て、朝食を食べていった。

俺たちが朝食を食べ終えた後、茜とお袋が下りてきた。茜はなぜか気合が入つたファッショソで降りてきて、お袋はまだ眠たそうだった。親父と対照的だが、一体何があつたのだろうか？

茜の服を見て、親父は驚いていた。テンションあがつたな、たぶん。

「お、おま、一体誰と出かけるつもりなんだ？」

驚いた後に出てきた親父の言葉。そこでビリしてそんな結論が出るのか、俺は不思議でたまらなかつた。

対して茜は、

「いいじゃん別に。お父さんには関係ないよ。」

と冷たく突き放した。・・・・・・いや、そのダメ親父。う

なだれるな、会社行け、会社。

結局、うなだれた親父の機嫌を何とかお袋が直し、元通りになつた状態で親父は会社に行つた。どうなつているんだろうか、親父の精神構造は？

俺が片づけていると、お袋たちが朝食を食べていた。ただ、茜の食べるスピードが速かつたことに驚いた。そして、茜は食べ終えたらすぐに自室へ戻つてしまつた。そこまで場所を決めるのに苦労するのだろうか？とすごい勢いで自室へ戻る茜を見て、俺は思った。

お袋たちの片づけをやり終えた俺は、次に洗濯物を干していった。お袋は食べた後に寝ていた。よほど疲れてたんだなと思ったが、専

業主婦つてそこまで疲れるものなのかと疑問に思つた。この時、時刻は七時半。俺はあと一時間半あるから何しようか悩んで、とりあえず遊びに行く準備をしに、自室へ戻つた。

九時になつた。俺は家の前に出て茜を待つことにした。準備をし終えたのが八時半くらいだったので（実際は三十分くらいで終わつたんだが、部屋の掃除をしていた。）、幾分か余裕があつた。待ち合わせが俺の家だと特に何も起きないが、他のところだと行く途中でいろいろと巻き込まれ、結果的に遅刻するのである。正直恨めしいぜ、この体质。

ケイタイを見てみると、九時十分になつていた。なのに、まだ茜が来なかつた。

一体どうしたのだろうかと思い玄関を開けたら、茜が飛び出してきた。その時ちょうど俺は、茜が出てくるところにいたらしく、結果的に俺は茜を抱きしめる形となつて受け止めた。

「どうしたんだよ、そんなに慌てて。」

俺は受け止めた形のまま、茜に訊いた。だが、茜は全く話さない。どうしてだろうと一瞬思つたが、くつついてるのが恥ずかしいのだろうと思い、俺は離れた。だが、茜はなぜか残念そうな顔をしていた。もう訳が分からないぜ。

仕方ないので、俺は茜に「行くぞ。」と言つて歩き出した。それを慌てて茜がついてきた。

俺が許される側のはずだよな、これ？歩きながら、俺はそう思つた。

幕間　八神つとむの災難な一日（後書き）

ま、幕間が続いてしまった…。…ど、どうしよう…。…つていうのは六割がた嘘です。頑張って更新しようと思いつます。

## 幕間 八神つむの災難な一日その2

街を歩きながら、俺は茜に訊いた。

「で？どこに行くんだ？」

それを聞いた茜は、待つてましたと言わんばかりの勢いで話した。  
「それはね！今す”い話題のショッピングモールだよ！全五階建てなんだけど、一階一階にそれぞれちゃんとしたコンセプトがあるの！」

俺ははしゃいでくる茜を見ないでじりじりと逃げた。

「へへー。で、どこにあるんだ？」

「お兄ちゃん。さつきの返事にどうでもいいって感じがしたんだけど？・・・・・・ま、それはいいとして。どこって、鷹野町だよ。」

「鷹野町ついで、電車で三十分くらいのところか。ま、それならそれでいいか。」

場所が決まったところで、俺達はそこを目標として駅へ向かった。

何事もなく駅について、何事もなく電車に乗り、何事もなく鷹野町に着いた。ここまで何もないと逆に心配になるぜ。

そんな俺の心配を知らず、茜は「はやく、はやく！」と催促してきた。まったく、子供っぽいな、あいつ。となんだか兄というより父親のような感じになってしまったので、俺はそんな考えを頭から追い払い、茜と一緒に目的地に向かった。・・・・・腕を組んで。

「ちよっと待て。」

「どうかしたの？」

「どうして腕を組む必要がある？」

その質問に茜は、

「迷子にならないためだよ。」

もつともな理由をこたえた。だが、俺はその裏に何か理由があるの

を感じた。けど、人の心なんて読めるわけないので、それで納得しそうと思い、

「しゃあねえなあ。いいぜ。」

と答えた。それを受けて茜は、

「やつたあ！」

と大はしゃぎだつた。今日のテンショソの高さは異常だな。何がそんなにうれしいのだろうか？

さて話が決まつたので、俺達は再びショッピングモールへ行くことにした。

・・・・・結局、俺はまた面倒事に巻き込まれるわけだったが。

ショッピングモールに着いた俺たちは、人だかりとでかい看板に驚いた。

「『ミレントショッピングモール』？」これは鷹野町だろ？」

「お兄ちゃん、そこは問題じやないと思つ。」

しかし、結構人が多いなあ。これで知つてゐる奴と会つたら大変だな。そう思いながら、とりあえず中へ入ろうといふことになつて、人だかりをかき分けて中へ入つた。ただ、人だかりをかき分けて進んでいるうちに、「今日ここで撮影やつてるらしいぜ。」「マジで！？俺達も映れるのか！？」「それはわからねえけど、中に入つてみよつぜ。」という声が聞こえた。

「うつへえ、それは困つたなあ。

まあ、とりあえず中に入つてみた。それでも、人がたくさんいた。結構人気あるんだな、ここ。と思つていたら、茜が俺の顔を覗き込んでこう言つた。

「そんなことも知らなかつたの、お兄ちゃん。」

俺は全体を見渡しながら、

「興味がねえから。」

と語りてその話題を終わらした。

「何を買つんだ？」

「え?」

とうあえず休憩できるベンチがあつたのでそれに座つた後、俺は茜に訊いた。

「え?って、何か買う用事があつてここに来たんじゃないのか?」

「そ、それはそなうなんだけど…………今買いたいもの特にないし…………」

こんなにやひひ、ただの冷やかしに俺まで巻き込んだのか? そう思つて怒鳴るひとしたら、

「あ!」

と言つて、俺の手をつかんでいきなり立ち上がつた。なんだなんだ?

「あつたよ! 買いたいもの! 行ひづ、お兄ちゃん!」

「お、おこ! ちょっと待て! ……」

という感じで、俺は妹に振り回されていた。こんなんだつたら、たかあき町でそこらへん散歩してればよかつたぜと、素直に思つた。で、着いた先が、

「ここだよ!」

「アクセサリー店? ペンダントとか買つのか?」

結構有名なアクセサリー店だった(俺は知らなかつたが)。

俺の言葉に、茜は頷いてこうひつた。

「ペンドントじゃないんだよ。ここじゃなきや買えない限定モデルのブレスレットだよ。」

どうして限定とこう言葉に弱いのだろうか。俺はそれをたびたび疑問に思つてしまひ。

「じゃ、せつねと買つて帰ひづ。」

「お兄ちゃん、これ買つても私の買い物はまだ終わらないからね。」

「うわ~。」

とこうやり取りの後、店の中に入つた。で、店に入つて分かつたこと。

女性客が多い。カップルも少なくはないが、女友達同士で来れる方が多かった。

俺は居心地の悪さを感じながら、茜に手を引かれながら店の中を歩き回った。

「あれ~?どこにあるんだない?、限定のブレスレット。」

「店員に訊けばいいじゃないのか?」

「でも誰が店員なんだかわからないんだけど。」

「そうなのか?」

俺はそういうながら、あたりを見渡してみた。そして、

「茜、こっち来い。」

「え?どうかしたの?」

俺は茜の手を引きながらある方向へ向かった。その先にいたのは、「すみません。」

「ハイ、なんでしょうか?」

「この店限定モデルのブレスレットまだここに売っているんですか?」

「あ、はい。こちになります。」

そう言いながら、店員さんは俺達を案内してくれた。

案内されている間、茜は俺に訊いてきた。

「どうしてあの人があの人が店員さんだと分かったの?」

「ん?どうしてって、商品の補充とかやつてただろ?」

「そつは見えなかつたけど···。」

「よく見りや、ちゃんとやつてたんだよ。」

と語っていたり、

「こちらがその商品です。」

と言つて、その店員さんは去つていつた。俺たちは店員さんが示した商品の前に立ち止まって見た。

「これこれ!これなんだよ!...」

そつ指さしながらはしゃぐ茜。ふ~ん。デザインはいいんじゃないのか?俺はわからんが。

茜は、買おうとして値段を見たりじく、驚いてこう言つた。

「えー五千四百円…うつそ、私持つてないよ。」

そつ言いながら落胆する茜を見て、俺はどうか悩んだが、「すみません。」

「はい。なんでしょうか?」

「これ一つください。」

「かしこまりました。」

店員さんをつかまえて、そのブレスレットを買つことにした。ああ、またすごい出費だな。まだ大丈夫だろ?ナビ。そう思いながら俺は茜を連れてレジのところへ行き、そのブレスレットを買った。金は俺が払つたぜ、もちろん。

「ありがとうございました。」

そつ言われて店を出た俺だけは、近くにあつたベンチに座ることにした。

「ほれ。」

「あ、ありがとうございます。」

俺がブレスレットを渡すと、茜はまだ現実に戻つてきていなか返事が上の空だった。

「どうしたんだ? 欲しかったものじゃなかつたのか?」

「ううん!…違うの!…ただ…・・・・・・

「ただ?」

「お兄ちゃんつて、人においふとか絶対にしないのかと思つてた。だって最近バイトでもらつたお金、自分のためにしか使つていないです?」

その答えに俺は苦笑しながら、

「お前、知らなかつたのか?俺、中学一年のころから小遣い止められてたんだぜ。そのうえバイトして自分の小遣い稼げ、って言われたんだ。」

と答えたなら、またも茜は驚いた。

「ええ!そんな話聞いてなかつたんだけど!…私普通にもらつてるのは、お兄ちゃんはもらった上にバイトで稼いでるのかと思つた!」

！」

「だから、中一と中二のことは大変だったぜ？何しろ、買いたいものは全く買えない。だから、俺はずつと見てるだけだったんだ。欲しいものとか。」

「ごめん。」

「謝るなよ。で、話の続きだが、お前がこれを見て物欲しそうにしてたからついそん時のこと思い出してな、そんな思いしてるんだつたら買ってやつた方がいいと思つたんだ。それに、今日はお前の機嫌取りに来たようなものだしな。」

俺がいつも調子でそう言つと、茜は吹き出した。

「ブツ！最後の言い方はないんじゃない！？……………

でも、

「でも？」

「ありがとうね、お兄ちゃん。」

その言葉を听いてきた茜は、とてもうれしそうだった。良かつたな、まったく。

それで、他の買い物をするかどうか話し合つたんだが、その前に昼食を食べようといふ話になつた。

幕間　八神つとむの災難な一日その2（後書き）

最近、短編小説を書こうかな?と思つたりしますが、書くかどうか  
考えていません。なにぶん、更新が忙しいので。  
短編小説を読んでみたいと思う人は、とりあえあえずコメントをく  
ださい。

第四話～べたな出合こよみ、よく懲ら込まれる～（前書き）

幕間の途中ですが、本編を読みつい。

## 第四話～ベタな出会い～ほひ、よく巻き込まれる～

「お疲れさまっしたー！ー！」

二つ目のバイトを終えて俺は、帰路についた。ただ、今日でこのバイトは終わりだ。

理由？工事が終わったからだよ。工事のオッチャン達が名残惜しそうに、「次の工事場所決まつたら連絡するからな。よかつたらまた働いてくれ。」と言つてくれた。・・・・・これが人情だよな。嬉しくなるぜ。しかし、このバイトが終わつたという事は、俺の財布事情が厳しくなるという事につながる。次のバイトが見つかるまでは、喫茶店だけで稼ぐしかないな。と考えながら自転車をこいでいると、交差点から人が飛び出してきた。

「つおーーー」「さやつーーー」

キキ

！！！

あつぶねえじやねえか！－ブレーーキかけるのが遅かつたら事故つてたぞ、今のーーと思ひながらぶつかりそうになつた人に、

「なんで飛び出してきたんだーー！」

と言いながらそいつを見た。そいつの恰好は、まず普通の人はそんなに着る機会がないであろう高級そうなドレス。どんなやつかって？知らん。次に顔を見てみると、結構端整な顔立ちで髪はややロング。・・・・・・・・最近、どうしてこうも美人と出会いのかね？ふと疑問に思つたが、今はそれどころじゃない。なので、そいつの言葉を待つてると、

「いたぞーーーあそこだーー！」

と声がした。もしかしてこいつ、追われてる？そつ思つたのも束の間、そいつが突然俺に迫つてきて、

「す、すみませんが、助けてくれませんかーーー？」

と必死にお願いしてきた。それに対し俺は、断ればいいものを、「いいぜ。後ろに乗れ。とりあえず、あいつらをまくからな。しっかり掴まれ。」

と言つて引き受けた。どうやら俺は、巻き込まれたらきちんと解決するまでやり通す性分のようだ。…………今日は家に帰れるかな?と思っていると、

「は、はい!! お願いします!!」

と言つて、俺の自転車の後ろの方に乗つた。それを確認してから、「とばすぞ!!」

と言つて、俺は自転車を本気でとばした。後ろの奴は「キヤア!!!!」と言にながら、必死に俺にしがみついていた。…………後ろに人を乗せるのは初めてだが、結構難しいな、バランスとるの。そう思いながら、ここから近い公園までこいでいった。

「いないだと!!? くそっ! お嬢様はどこにこいつたんだ!!?」「さつき、誰かとぶつかったみたいだが……もしかして。」

「きっとそいつがお嬢様をさらつたのだろうな。」「探せ!!!!」

と黒服の連中が勘違いしながら探していた。

公園にて。

「あの! 助けてくれて、ありがとうございました!!」

「あ、ああ。別にたいしたことはしていないさ。…………」

それより、どうするんだ?」

「そ、そうですね。何処かに置つてもうえぱいいのですけれど……

・・・・・。」

そいつは考えながらそう言つた。今更だが、こいつ誰だ? 恰好から察するに金持ちの部類だと思つんだが…………。と考

えていたが、

「おい。」

「は、はい！」

「どこでもいいんだな？匿つてもりひなひ。」

「ええ。それからは何とかしますから。」

どうやらこいつは当てがあるらしい。それなら・・・・・・・・・・・・

・・・

「ちょっと待つて。」

「え？」

俺はケイタイで、ある奴に電話した。

ブルルルルルッ！－！ピッ！－！

『応、どうした？こんな時間に？』

「ああ、ちょっとな。今からお前んと「行くけど、大丈夫か？」

『そりや、急だろ。いくらなんでも。・・・・・・・もしかして、

何かあつたのか？』

『察しがよくて助かるぜ。事情はそっちに着いてから話す。実は俺もよく解つてないからな。』

『わあつたよ。部下もいるから早く来い。尾行されるんじゃねえぞ。』

「分かつた。」

と言つて電話を切つた。さてと、

「行くぞ。乗れ。」

「え？あの、どこに行くんですか？」

俺がいきなり乗れ、と言つたのに驚いたのか、そいつは不思議がつていた。それを無視して、

『匿つてもらえる場所だ。わざと乗らないと捕まるのぞ？』

と言つたら、そいつは驚きながらも、後ろに乗つてくれた。

『またばすからな。しつかり掴まつとけよ。』

「はい！－！」

それを合図に、俺は再び自転車を引寄せ出した。どうでもいいことだ

が、しがみつく、という行為は胸が当たることを意味している。それに気が付かないのは、必死だったからなのだろうか。

#### 4・2 逃走組

「おかしい。やつさまでここにいたはずなのに…………」

「もしや、我々に気づいたのでは?」

「あり得るかもしけん。…………しかし、レミお嬢様にも困ったものだ。」

「隊長。これからどうしますか?」

「くまなく探せ。ただし、ここは『本富』の場所だからな。派手に動くな。」

『ハツ！』

「しかし、お嬢様と一緒にいる奴は、一体何が目的なんだ?」

「着いたぜ。ここだ。」

二人乗りって、体力スッゲエ使つんだな。昨日と同じ状況になりそうだ。と思っていると、

「こ、ここですか…………?」

と、そいつはちょっと怯えながら言った。まあ、無理もないか。なんせ…………

「ああ。そうだ。」

『矢木組』って、どう考へてもヤクザの人たちのところですよね！？

そう。俺達の目の前に建つてるのは、矢木組と看板が掛けられている門がある家だ。看板に書いてある通り、ヤクザ一家が住んでいるところである。（部下も住んでいます。）ちなみに矢木組は、この町のヤクザを取り仕切っている一角だ。

「え、と、インターフォンは、と…………。」

「し、知り合いなのですか？」

「こ、か。久し振りだから忘れてたな。…………ああ。昔、

「ちょっとな。」

「ピンポーンーーー！」

『誰だ？』

「俺だよ。さつき電話で話したから、話は通つてるはずなんだが。」

『あ、兄貴じゃないですか！…ひさしごりつす！…』

「分かつたから開けてくれ。」

『わ、分かりました！…』

と言つと、門の扉が開いた。その時、

「…………あなた、何者なんですか？」

と訊いてきたが、

「ただの高校生だよ。」と言つて俺ははぐらかした。

「よう、久し振りだな。こんな夜分に悪いな。」

『お疲れ様です！…』

「す、すごいですね…………」

とヤクザの雰囲気のまれそつになつていたが、大丈夫だったようだ。大した奴だな。

と玄関まで歩いていく途中に、

「兄貴！自転車はどうしましょ？」

「兄貴！その女人の人どうしたんですか？」「まさか、さらつてきたんすか！…？」

とか言つてきた。

「自転車はいつものとこ。ここは追われてたから助けただけ。それ以外はないからな。」

全く、変な勘織りするなつてのに。と思いつながら歩いていると、玄関に着いた。

「中に入つてもいいんでしょうか？」

「ここはすでに敷地内だ。今更どうこう言つてんじゃねえ。」

と言しながら、俺はとりあえず電話した奴のところに行くことにした。

そして、今俺達はジャンクフードの有名チーン店で昼食を食べていた。

「それで? これからどうするんだ?」

「うん。特に決めていないんだよね。」

「なにかせじき？」

ג' ינואר 1990

「只」唯ノ〇

卷之三

えりといへ声を無視して

「お兄ちゃん。あれ。

卷之二

「もしかして、テレビ番組の撮影なのかな？カメラとか来るよ。」  
そう言られて、俺も茜が指をさした方向を見た。そこには、確かに  
テレビ関係者がたくさんいた。どう見ても撮影が目的で来ているみ  
たいだつた。

・・・・・ハア。

「どうしたの、お兄ちゃん？ テレビ関係者だよー。テンションあがらないの！？ ・・・・・・つて、ゴメン。お兄ちゃん、嫌いだつたんだよね。」

「ああ。」  
まつたく。ただでさえ嫌いなのにいつきの野郎。勝手に入学させやがつて。

そのことを思い出すとまたイラついたので、俺はいつたん忘れる  
まいけど、隠し印してみや。

「」と云ひ、西に訊いてみた。

「どうするんだ?・撮影を見てくのか?」

「へん。どうしよう。見たいのはわからぬが、お兄ちゃん

は見たくないんでしょ？」

「見たくないが問題はない。見たからと言つて、体調が悪くなつたりはしないからな。」

「じゃあさ、観に行こうよーーー！」

とこいつことで、俺達は撮影の見学に行くこととなつた。

幕間 八神つとむの災難な一日その4

と  
に  
し  
た

一  
か  
所  
目

「ここって、婦人服売り場だね。」

「次行こうぜ。」

二  
二  
か  
所  
目。

「 」 は食堂がたくさんあるね。」

「カメラは見当たらぬ。」

それから色々と見て回つて、十

した。その場所は、何かのイベントが行われる場所だった。

「なにがあるんだろう?」

「さあな、俺にどうちゃうでもいいが、誰かに訊いたらどうだ?」  
そう言つたら、茜は人だかりの一人に話を聴きに行つた。茜に見た  
目はひいき田なしに可愛いので、話しかけられた奴はやたらテンシ  
ヨンが高くなつていた。

ג' עירן

「なんでも、今日はここでの紹介でタレントが来るんだって。しかも、お兄ちゃんと同じ学校の人なんだって。」

「そうなのか。」

ま 知られていないから大丈夫だな

「これから、ミントシップモールでのイベントを始めたいと思います。」

卷之三

- - - - -

「いいじゃん別に。私はこれが好きだよ。」

イベントが始まって、俺達は後ろの方で見ていた。だから、全体を見ることができた。

「それにしても、うちの学園の生徒が出てるだけなのに、どうしてこんなに人がたくさん来るんだ？」

俺は今更ながらそう思つた。そしたら、茜が驚いてこう言つた。

「え！？お兄ちゃん、自分の通つてる学園の知名度を知らないの！？」

「バツ！人前でそんなこと言つんじゃねえ！」

「あ、ごめん。…………じゃなくて！あの学園の生徒のテレビ出演率つて結構高いんだよ！しかも！その中のアイドルつて呼ばれてる人たちには、まだ生徒なのに結構なファンがいるんだよ！熱狂的な人とか！」

「へえ〜。」

「お兄ちゃん！？」

「ごめん、ごめん。しかし、熱狂的なファンか…………。」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。」

俺が考え込んだのが気になつたのか茜が聞いてきたが、俺はなんでもないと言つてステージの方を見た。

茜も、それにつられてステージの方を見た。ステージでは、出演者の紹介をしていた。

『さて、それでは出演者の紹介をしていきたいと思います！…まずは、・・・・・・』

それを聴いてる間、俺は考え方をしていた。

熱狂的なファン、か。俺にはどうしてそんな奴ができるのか分からなかつた。俺だったら、ファンより敵のほうができると自負できる。ま、それは関係ないが。

ただまあ、熱狂的なファンが何をやらかすのかわからないのは確実だらう。となると、誰かが止めないといけないんだろうな。

果たして止められる人がこの中にどれくらいいるのだろうか？そ

う考えていたら、茜が俺の裾を引っ張ってきてしつけた。

「お兄ちゃん。あの人だよ！あの人！」

そう言われて、俺は指を差された方向を見た。

そこにいたのは、雰囲気的にはオドオドとしていて、スタイルがいい人だった。ただ、その人に対する声援がすごかつた。もう会場に響かんばかりの声。うるさいつたらありやしない。

あしの一の顔  
どうかで見たことか・・・・・・  
復のセ

そう思いながら見ていたら、俺はイライラしてきた。  
だって、あいつ緊張してるのでろくに話せていらないんだぜ？そり  
やイライラするつて。

見  
た。

「なにやつてるんだ? あいつ。

と俺はそいつを見ていた。そいつは、あたりをきょろきょろと見渡していた。

- ؟ دلیل؟

俺の言つたことが気になつたのか、茜が探し始めた。

仕方がないので、俺は指をさした。

え？  
・・・・・  
うん。  
そう？

俺が指をさしたやつを茜も見たが、どうやら何も気づかなかつたようだ。ただ、俺にはよくわかる。あいつはこいつで、何かをやらかす気だ。

なんでわかるのかつて？ 雰囲気だよ、  
雰囲気。 それに、あたりを  
見渡してるのが怪しそうだ。

俺はどこかが考える前に、そいつは近寄らせていた。やめればいいんだが、どうにもできなかつた。

「おー、セリの妹いわざ。」

俺が目をつけた男（推定四十歳くらい）が何やら咳こていたが、気にせず声をかけた。

「…？」

男はびっくりして振り返って俺を見た。その顔には、驚きと焦り、怒りと独占欲が見えた。感情丸出しだな、おっさん。

俺は呆ながらおっさんに対しこう言つた。

「今あんたがやろうとしてることは、やめた方がいいぜ。といふか、止める。何する氣が知らんが、ここで騒動を起しても誰も得はないぞ。」

その言葉に、やうにおっさんは驚いた。

「な、ななな何を言つているんだ！ わた、わた、私は…………」

俺はそれを無視して、

「じゃ、隠してるもの、出したらいだ？ 壱さんみては逮捕されるで、あんた。」

隠してるものを見せと言つたら、

「…？ な、なななな・・・・・・！？」

なんでわかつたんだ！？ 的な顔をしておっさんが驚いていた。やつぱりわかりやすいなあ。

すると、そのおっさんがあとなしくなつて、不気味な笑い声を出した。

「ふつふつふ・・・・・。」うなづいたら・・・

「こうなつたら仕方がない。お前を口封じのために殺すつか？ ありきたりすぎて馬鹿らし。おとなしく隠してるものを見せと言つてるだけだろ？ なんでそんな簡単なものができないんだ？」

「…？」

「いや、今更説明とか要らないだろ。小悪党すらなつてねえぞ。」

おっさんが言おうとしたことを言つたのがそんなに驚くよつなものなのか？ たいしたことじやねえだろ？

「ぐ、くそ――――！」

おっさんのがやけくなつたのか、突撃してきた。たいして、俺は突撃してきたおっさんの顔面のところにこぶしを突き出したから腕を引いて、

「じゃあな。恨み言は警察署で言つてくれ。」

思いつきつこぶしを突き出した。その結果。

バキッ！－ドサッ！

と会場全体に響く音と倒れる音がして、集まつていた人が全員俺たちの方を見た。

俺はその視線を受け慣れているのでケイタイを取り出し、電話した。

「よ、薔さんか？ 実はちょっとしたもん捕まえたからや、とりあえず、パートカーをミレントショッピングモールに寄越してくれない？・・・・・ああ。まだ確認はしていないけど。・・・・・ハア！ いいから、わざわざと来い！ とりあえずは縛つとくから。じゃあな！」

そつ言つて電話を切つた後、俺はのびているおっさんを抱いで会場を後にした。

『・・・・・えへ、ちょっとしたハプニングはありましたが、続けますよ！』

俺が出て行つたあと、司会の人があつて場を何とかまとめた。

「お兄ちゃん・・・・・・・・・またなの？」

茜は、それを見てそう呟いた。

「つたぐ、なんだよいきなり・・・・・つて、おい－こいつのことか！？ さつきの電話のやつは！－」

「ん？ あ、ああ。そうだぜ。こいつ、誰だ？ めちゃくちゃ弱かつたんだが。」

「弱かつた、って。そりや、あの町にいりやあ弱いと感じるだらう。だがな、こいつは連續通り魔事件の犯人で、少なくとも十件はやつているんだ。この町に潜伏していたのか、こいつ。・・・・・・・・・・・・

てこうか、お前はどうしてこいつを捕まえられたんだ？

「どうしてって、勘だ、勘。あと雰囲気。」

「お前のそういうところ、素直に尊敬するぜ。」

俺が根拠を言つたら、菅さんは苦笑しながら呟つ囁ついた。すまねえな、菅さん。

「じゃ、俺はこいつを連れてくわ。おさんは来なくていいぜ。それと、感謝状はいつも通りだな？」

「当たり前だ。いらねえよ。」

そう言つて、菅さんは氣絶しているおっさんをパトカーに入れて出発した。

俺は終わるまで暇潰そうかと思つたら、

「お兄ちゃん。帰ろ。」

「茜？」

茜がいた。

「どうしてここに？」

「だって、あの後つまんなかったんだもん。それに、お、お兄ちゃんが心配だったし……。」

そういう茜はなんだか恥ずかしそうだった。どうかしたのだろうか？ ま、気の仕方がなかつたので、

「じゃ、帰るか。」「うん！」

俺達は帰つた。こうして、俺の一日が終わつた。

（その裏側にて（イベント終了後））

「もしもし警察ですかーさきほど少年が暴行行為を行つていたのですが・・・・え？殴られた人が連續通り魔の犯人だった？・・・・ハイ、ハイ。そつだつたんですか。ありがとうございます。」

「あ、あの、先ほどは一体何があつたのですか？マネージャーさん。」

「た。」

「ええとね、警察にさつきのことを言ったのだけど、殴られた人が連続通り魔の犯人だつて言つてたのよ。しかも、凶器が一致したらしいんだって。」

「え？ ということは……」

「私たちはあの子に助けられたつてことね。ただ、その子の住所を訊こうとしたらダメと言われたわ。」

「どうしてですか？」

「どうも、彼の住所とかそういう類の情報は規制されてるみたいだわ。もしかして、とんでもない子かも知れないわ。」

「それはどうでもいいですけど、お礼ぐらいは言いたいですね。」

「そうね。ま、今日はお疲れ、光。」

その数日後、彼女は再び彼と遭遇することになるのだが、それは誰にもわからないことだろう。

幕間 八神つとむの災難な一日その4（後書き）

次からちやんと本編をやります。

#### 4・3 頭 篠宮妹（前書き）

すみません。たびたび謝つてすみません。話がすっぽり抜けていました。これからもそういう指摘がございましたら、よろしくお願ひします。

#### 4・3 頭 篠宮妹

「よひ、頭。<sup>かしら</sup> 久し振りだな。」

「久し振りだな、つとむ。いや、皇帝と呼ぶべきか?」「普通に呼んでもらつて構わない。さて・・・・・・今日はありがとな。」

「いいつことよ。しかし・・・・・・この女は誰だ?と、頭は俺が連れてきた奴を指差して、訊いてきた。

「俺も知らん。」

「ここに来るまでに聴けたんじゃねえのか?」

「いぐのに必死だつた。」

「そういうや、そういう奴だつたな。」

と言つて、呆れる頭。追われてるのにそんなこと訊けるか。氣を取り直して頭が、

「んで?あんた誰だ?どうして逃げてたんだ?」

と訊いた。そいつは、ちょっと怯えながらも答えた。

「私は篠宮レミと申します。年は今年で十六です。逃げていた理由はですね・・・・・・」

「ああ!」

「な、なんですかつ!?」

こいつ 篠宮レミ の名を聴いた時、俺は驚いた。

だつてそつだろ?まさか・・・・・・・・・・・・・・・・

「なあ、あんた。」

「なんですか?」

「いや・・・・・・もしかして、スミレ学園の一年に姉がいるだろ?」

「そうですけど・・・・・・せつこえば訊くのを忘れてましたね。あなたの名前はなんですか?」

「公園にいた時に訊けたんだろうが・・・・・・それは置い

ておこう。俺の名前はハ神つとむだ。年はお前と同じだ。ちなみに、お前の姉と一緒に学校に通っている。」

「ハ神、つとむさんですか。・・・・・・・・・・・・あれ？姉とは学年が違うのに、どうして知っているのですか？」

「ちと、変なことに巻き込まれただけだ。」

「？」

俺が何を言つてゐるのか分からぬ、って顔をしているが、もう無視して話進めるか。

「んで？どうして逃げてたんだ？まさか・・・・・・・・・・・・パーティに飽きて逃げてたんじゃねえだろうな？」

俺がそう訊いたら、そいつ 面倒だから篠宮妹にでもしつくかがギクッ！とわかりやすい反応をした。・・・・・・・・・・・・

図星かよ。

「え！？ベ、別に、飽きて逃げたわけじゃありませんよ！…？ただ・

・・・・・

「ただ？」

「つまんなくなっただけです！！

と胸を張った。・・・・・・・あほか、こいつ。かじり頭を見ると、「面倒なことしてくれたじゃねえか。」と若干怒り気味。・・・・・・・

・・俺も悪かったと思つてる。

でもまあ、こうなつたのも仕方ない。とりあえずは・・・・・・

・・・・・

「こいつ、どうする？」

「俺に振るな。手伝つてはやるが、それ以上はしないぞ。」

分かつてゐよ、たくわ。こんな奴をどうすれば・・・・・・・・・・・・

・・

そこで、俺はこいつと似たような境遇の奴を唐突に思い出した。この力を借りるしかないか。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

りた後に何要求されるかわからんねえけど。

そして俺は、電話した。

プルルルルルルルツ！！ ピッ！！

『何？こんな時間に？僕眠いんだけど。』

「いつきか！それはすまんが、ちと厄介」とに巻き込まれちまた

から助けてくれ！』

『…………君は本当によく巻き込まれるけど、僕に頼るつてのは初めてじゃない？何があつたの？』

「ああ。実はな……………

……………。

（説明中）

「……………といふ訳

なんだ。」

『ふーん。それはまた変なことに巻き込まれたね。…………さて、どうしようかな？』

やつぱそつなるか。分かつてはいたんだ。こいつがわざと躊躇うな  
んでことは。

・・・・・・・・・・仕方ない。俺としては使いたくなかった『力  
ード』を使つことにした。

「やつてくれたらそうだな…………お前が暇な日に何処  
か一緒に行つてもいいぞ。」

『本当！？…………うーん、それでもどうしようかな？』

こいつ…………俺にまだ何か要求するつもりか！！俺と  
しては最大限の譲歩なんだが、これ以上何を要求するつもりだ！？

「…………ちなみに、他に何を要求するつもりだ  
？」

『うーんそだね…………退学しないこと。それぐら  
いかな？』

いつきの要求としてはずいぶん軽いな。もつちよつと重いもんにな  
るかと思つてたんだが。

「それぐらいならしいが。」

『え？退学しないんだよ？これから三年間、君が嫌いなあそこにつ

ることになるんだよ?』

「ま、そうだが、もういいや。退学するのは諦めたか?』

『君が『諦めた』と言つのは珍しいね。どうしたんだい?』

「うつせ。嫌いでもなんでも、あそこ退学したら他の学校に行けるかどうか判らないからな。だつたら、あそこを卒業してテレビ関係のところに就職しなきゃいいだけだと思つただけだ。』

実は、そんなことは前々から考えてたことだけだ。とは言わない。なぜなら、最初の頃は、まだ退学したいと本気で考えていたからだ。今日の騒動で、退学するのは無理そだから前々から考えていた、これでいくしかないと思つただけだ。

俺の言葉を聴いたいつきは、

『・・・・・嬉しいよ、つとむ。君が退学しないって言つてくれるなんて。僕が巻き込んだのに、君はいつも僕の事を支えてくれるよね。』

『?何を考えてるのか知らんが・・・・・助けてくれるのか?』  
『いいよ。助けてあげる。それに、君のその状況を開拓する策を教えてあげるよ。』

「本当か!?!マジで助かるぜーーー!」

と、俺がお礼を言つと、

『いいさ。僕の方がいつも君に助けてもらつているからね。そのお礼だよ。・・・・・ただ、約束は忘れないでね?』

と言つてきた。言つた手前、破棄するつもりはないので、

『忘れるかよ。俺が忘れたことがあったか?』といつたら、

『あるよ。確か・・・・・・・小学一年の頃だったかな?』と返された。

「スマン。ただ、あれに関しては、お前がややこしい所を指定したのが悪いんじゃねえのか?

・・・・・・・・・・・・・とにかく、策を教えてくれ。』

『分かつたよ。いい、策つてのはね・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・

』

説明中

「簡単じゃねえか、んなもん。……………つて感じ。ドキドキでいいの?』

了承は取つた？

「今から取る。じゃあな。」

かしら  
と書いて俺は電話を切った。そして

頭 簡宮妃 これからやることは詔明でござ  
いいが

いつきの策を説明した。説明を聽き終えた頭は、

「いいんじゃねえか？俺の部下たちにも手伝わせてやるから、あち  
んとやれよ？」  
トにすまねえな、頭。

#### 4・4 涙準備（前書き）

さて、割り込み投稿しなくてすみません。分かり辛かつたようで、本当にすみませんでした。

一方篠宮妹は、

「なんでもここまでしてくれるのですか？これは私のわがままなのに。」

と訊いてきた。なんで、つて訊かれてもな・・・・・・・・・・・・

「俺が巻き込まれたものは、ちゃんと解決したいと思つてゐるからだな。それに、」

としか言いようがないだろ。そう言われて驚いたのか、泣きそつな顔をしていた。どうしてこゝも女つて、泣きそうになるのがはやいんだろうな？ そう思いながら、続けて言つた。

「そんなになるまで我慢するもんじゃねえよ。行きたくないなら堂々と言えばいいだけだ。俺の身近な奴は、お前より『自分』を持つてるぞ？」

その言葉で、篠宮妹は泣いてしまつた。・・・・・・・・・・・・悪いことはしてないはずなんだが。

「なんで泣いてんだよ？」

「だ・・・・・だつて、い、今まで・・・・・ヒック・・・・・・

・ そう言つてくれた ・

・ ・ ・ 人は、いません ・ ・ ・ でしたから。」

と泣きながらも言つた。余程気持ちを溜め込んでいたのか、こいつ？ と思いながらも、泣き止むまで俺達は待つた。

一分後、篠宮妹は泣きやみ、俺達はいつきの策を実行すべく準備していた。この時の時刻は午後十一時二十分。もうこゝなつたらこの家に泊まるしかない。そう考えて俺は、自宅に電話した。

『はいもしもし、八神ですが。』

『茜か？』

『お兄ちゃん！？ ちよつと今どこにいるのよー！？ 心配したんだか

らね！』

「悪いな。今日は訳あつて家に帰れないから。 そんで、知り合いの奴の家に泊まるから。」

奴の家に泊まるから。

『なんで帰ってきてられないの!? お願いだから帰ってきてよ!』

一  
わの代わりと書いたが、明田繕行にひがむが、エト

「マの撮影の見学にな？」

「本當たよね？信じてしんたよね？」

— まだ前だ 明日の朝には帰るか? —

二〇

と、準備の続きでもしないとな。  
さてと、電話を切つた。さてと、

#### 4・5 作戦決行前 待ち伏せ（前書き）

謝罪の言葉ばかりだったのを忘れていたのですが、四十話超えていました。早いですね（笑）。

#### 4・5 作戦決行前 待ち伏せ

「兄貴！…決まつてますぜ！…」  
「そうか？」  
「そうす！…これならバレません！…」  
「そうか。」  
「これ持つてください！！」  
「ああ、それも必要だな。」  
「こんな感じで、俺は準備をしていった。何の準備かって？そりゃあ、  
「これでOKつす！…」  
「そうか・・・・・野郎共！…準備はいいか！…」  
『ウイツス！…』  
「今から俺の事は『若頭』だ！いいな！…？」  
『若頭』  
・・・・・  
俺がこここの若頭になる準備だ。まあ、話を順に追つていいくとだな・  
・・・・・  
『つとむがその組の若頭になつて、その追つている人達 S P  
の人達 をそこで足止めしておいて、頭かしらとその部下数名は、彼女を乗せて僕の家まで送るつて感じ。』  
「途中でばれるんじゃないのか？」  
『それは大丈夫だよ。君たちの場所はもうすぐばれるだろうけど、  
そこから先はそこに留まっていると思わせればいいから。』  
という感じだ。俺としても簡単な方が楽だから、この策は賛成だつた。それで、話を戻すと、  
「立派な若頭に見えるぜ、つとむ。跡取りとして欲しいくらいだ。」  
「そんなこと言うんじゃねえよ、頭。他のやつらの方が適任だろ。」  
・・・・・そうそう出発しないと駄目じゃないか？  
「分かつてるよ。・・・・・・・・・あの子がお前に挨拶したいら  
しいんだが、どうする？..」

「こりゃね、どうせ明日になつたら忘れるだらうから。」

「心」

そう言って、頭は車の方に向かった。  
……………それで、俺達はや  
ることをするか。

「 」か・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「どうしますか？隊長。」

「…………しかし、なぜ『』んなどうに逃げたのだらうか?」

「分かりません。しかし、」

「分かつてる。・・・・・まずは正面突破だな。全員、玄関に集

合せやろ。」

「分かりました。」

「よつやく見つけましたよ。レミお嬢様。」

そう言つて男は、『矢木組』と看板がある門の正面に立つた。

「大丈夫でしょうか?」

「心配はいらねえよ。あいつらだつてヤワじやねえんだからな。」  
車の中で、頭かしらとレミはそんな会話をしていた。

「それに、心配するならお前さんを追つてきた奴らにするべきだな。」

「?どうですか?」

「つともだよ。あいつはこの町、いや、周辺の他の町でもか?では最強の部類なんだよ。というか、あいつと喧嘩したら勝てる奴はないな。少なくとも、本家のヒヤたちとあいつの親父以外では負けないな。」

「そ、そなんですか?」

「ああ。俺らがあいつと会つたのはあいつが小三の頃だったが、その時にそいつが俺達の喧嘩に巻き込まれてよ、」

「え!? 大変じゃないですか!?」

「そうだとと思うだろ? だけどな、あいつは俺達の事情も知らずにそのまま、手当たり次第に人をブツ飛ばしまくったんだよな。それから俺達は、喧嘩していたことも忘れてあいつに立ち向かったんだが、

「返り討ちにあつたんですか?」

「そうや。小三のガキ一人に全滅させられたよ。その時にそいつは『こんなクダンネエ喧嘩するんだつたら、ちつたあ町の不良ども大人しくさせろや。』と言つて立ち去つて行つたんだ。」

「随分キザッぽいですね・・・・・・。」

「そうだろ? だけどな、この町では不良もヤクザも強い奴の元につくつてのが、暗黙の了解なんだよ。だから、そいつを調べてみたんだが驚いたぜ。まだ小三のはずなのに、この町の半分近くのグループが、あいつに負けてたんだ。」

「……………あの人は何者ですか？」

「さあな。……………といひで、話は変わるがあんた、つとむに一目惚れしたんじやないか？出発する前にあいつの事、熱っぽい目で見てただろ？」

「……な、なに言ひしるのですか？！そ、そそそ、そんなことありません！」

「ふうん。ま、いつか。どうせもつ余えないだらうからな。」

「え？」

「どうこう意味だか訊いておいたら、

「頭かしら。着きました。」

「分かつた。……………わひと、降つりよ、嬢ちゃん。」

「は、はい。」

「インターフォンを鳴らして、自分の名前とつむの名前を出せば

いいだけだ。じゃあな。」

そう言って車を出そうとしたら、

「あ、あの。この度は本當にすみませんでした。そして、ありがとうございました。」

と言つてお辞儀をするノミがいた。

「これに懲りたらもうこんな真似すんじやねえぞ……………と言いたいところだが、無理して溜め込むんじやねえよ。」

頭がそう言つた後、車は走りだした。

残されたレミは、言われたとおりにインターフォンを鳴らして、家に入れもらつた。

#### 4・7 若頭 黒服（前書き）

2万PV行きました！…正直驚きを隠せません。

さて、時を戻して車が矢木組を出発して数分後。残った俺たちは、いつ来られても良い様に準備していた。その途中で、

ピンポーンー！

とインターフォンが鳴った。それを聴いて俺はまず、部下数名を玄関（の様な門）に行かせ、相手の動向を他の奴らに見張らせた。

「あんたら、なにもんだ？この町では見かけねえ顔だが。」

「ここに一組の男女が来なかつたか？片方はドレス姿なんだが。」

「知らねえよ。ここには誰も来てねえぜ。人違ひじやねえのか？ア！？」

「本当かね？」

「んな奴ら知らねえよ。つていうかよ、もし知つてたらどうするつもりだよ？」

「ふむ。この家を捜索する。」

「ふざけんじやねえ！なんでお前らに勝手に荒らされなきゃいけねえんだ！！」

「そうだ！！ここは俺達の家だ！！」

「隊長。この者たちをどうしましようか？」

「やんのかおめえら？上等じゃねえか！」「こんな奴らに荒らされ

てたまるかよ！」

「・・・・・仕方ない。君たちを倒して勝手に上るとする

か。」

と言つて、双方ともにやろうとした時に、

『やめる、馬鹿ども！！！』

と言いながら、俺は門まで歩いて行つた。その時に、俺と一緒にいた奴らもついてきた。俺の登場に驚いたのか黒服の一人が、

「君は？」

と訊いてきた。

「俺は矢木組若頭の矢木勉だ。あんたらがどこの誰だかしんねえが、うちの組に何の用だ？」

とつさに思いつかなかつたので、名前は自分を使つた。正直、他になかつたのかと思う。

「そうか。……といひで、君のお父さんはどこのいる？ 話をしたいんだが。」

「悪いが、<sup>かじり</sup>頭は今、他の組達との話し合いに行つている。だから、この場は若頭である俺が話を取り仕切る。…………それで？ 何の用だ？」

「いや、何、ちょっとした人探しだ。この娘が男と一緒にここに来たらしいんだが……知らんかね？」

と言つて俺に写真を見せてきた。それを見てみると、あいつの制服姿が写つっていた。どこの学校だ、ここは？ と思つたが、顔には出さずにこう答えた。

「知らねえな。俺はあんたらがここに来たからつて起こされたんだ。お前らが無断で侵入しようとしている、と言われてな。」

そう言つたら、そいつを含め、黒服の奴らはやや驚いたみたいだが、「ここに来たつて言う情報があるんだ。悪いが、無断でもなんでも、調べさせてもらうよ。」

と言つて入ろうとした。だが、

バン！！

「勝手に入るんじゃねえ、つて言つてるだろ？ 入つていいのはな、俺か頭が許可した奴らだけなんだよ。」

銃を黒服の奴らの足元をめがけて撃つてから、<sup>かじり</sup>こう言つた。……

・・・久し振りに撃つたな、銃なんて。と思いながら次の反応を待つてていると、

「・・・・・・ヤル気かい？」

とさつきから話してゐる奴が訊いてきた。

・・・・・・・・・・・・決ま

つてるぜ、そんなことはよ。

「ヤル気だぜ。ただし、お前らがこの敷地内に入つた時にな。分かつたか、野郎共！！」

『ウイツス！』

「そうか。入らなかつたら攻撃はしないんだな。 . . . 分かつた。行け。」

『ハツ！』

と言つて黒服の何人かが敷地内に入つてきた。 . . . 堂々と入つてきたな、この野郎。

そいつらが踏み込んできた瞬間に俺は、

バキッ！ドシユッ！ドシャアアアー！

『ぐわあああ！』

「入るなつて言つてんだろ。むやみにやらすんじゃねえよ。」

俺は木刀でそいつらを吹つ飛ばした。飛ばされたやつらは車道で仰向けになつたまま、氣絶したらしい。 . . . . 怪我はしてないな。

#### 4・8 決戦 紛り合い

その光景を見たそいつは、

「なるほど。君は言つだけあつて強いようだな。どれ、私が直接相手してやるわ。」

と言つて踏み込んできた。だが俺は、

「へつ！他の奴らはどうするんだ？」

と他の奴らを挑発した。こいつは結構強い。観た感じでわかる。だから他の奴を先に倒す氣でいたのだが・・・・・・

「いや、私だけでいい。君たちはそこにいなさい。」

そいつが他の奴らを留まらせた。チイ。ふざけやがつて。こうなつたら・・・・・・

「お前ら、俺がこいつの相手するからな。手、出すなよ。」

『わ、若頭！？』

「いいな。絶対だぞ！..』

『りょ、了解！..』

と言つて、俺の方も下がらせた。

「いいのかい？君だけで？」

「ああ。足手まといはいらないんだろ？」

「君もそういう考え方なんだね。いいだろう。君のさつきの実力を評して一対一で勝負しよう。」

「武器は？」

「君はどうする？私は使わないがね。」

「じゃあ俺も使わない。拳で勝負だ。」

「決着はどうする？」

「そうだな・・・・・・・・背中が地面に着いたら負け。これでどうだ？」

「いいね。そうしようか。」

そう言いながら、俺達はそれとの間合いを取つていた。その周り

で、『若頭！勝つてくださいねー！』『隊長！！頑張つてくださいー！』と俺たちを応援していた。のんきだな。

ま、じつはこっちで始めるか。

「さてと、」「勝負だ。」

ダツー！バキッ！！

「ぐう。」「つてえな。」

ドカツー！バキッ！ドコッ！ー！

「まだまだだな。」「そつちこね。」「私はまだ半分も出してないぞ。」「俺だつて。」

「中々やるな。」「あんたじゃ。」「そろそろ本氣で行かせてもらおう。」「なら俺も。」

と、互いに殴りながら言い合っていた。これ、ただ単に殴り合いだよな？と思ったが、気にする必要はないし、気にしてたら負ける。こいつ、隊長と呼ばれてるだけあって、強い。いつきのＳＰと同じくらいの強さだろう。殴られながら分析した結果がこれだったため、この勝負は負けたくないという気持ちで一杯だつた。何故かつて？いつきのＳＰに散々やられたことを思い出したからだよ。向こうを見ると、そいつも負けたくないという顔をしていた。

・・・・・・・・・いいぜ。勝負を続けようじゃないか。そう思いながら、俺達はまた殴り合いをした。

どのくらい経ったのだろうか。隊長と呼ばれてる奴とつとむの殴り合いが始まってから。

二人を見ると、両方とも肩で息をしていて、立っているのが不思議なぐらいのレベルだつた。

「ゼエ、ゼエ。・・・・・・・そろそろ・・・・・・・ぶつ倒れ・・・・・・・・・やがれ。」「ハア、ハア、ハア。・・・・・・・君こそ・・・・・・・倒れたま・・・・・・・え。」

そう言いながら、一步、また一步と、互いに近づいて行った。そし

て、

「……………オウリヤアーー！」 「……………ウオオオオ

才！！

バキッ！！！！

と互いの顔を殴つた。その後、

「くつ。・・・・・・・・・・・参つた。私のまけだ。」

と叫びながら、背中からドサリ、と倒れていった。ヤクザ側からは歓声が上がり、黒服の方は隊長に駆け寄つていった。その時に、つとも限界だったのであろう。こちらもまたドサリ、と背中から倒れていった。ヤクザ達もつとむに駆け寄つていった。それと同時に、  
かしら  
頭が帰つてきた。

#### 4・9 思い 信念（前書き）

報告です。しばらく更新しないと思います。たぶん。

なんだ、この状況は？」「

「頭！つとむの奴、やりましたぜっ！」

と言いながら、ある方向へと指を指した。それを見て頭は、「ほう。俺が帰ってくる間にやったのか。やっぱ強えな。しかし・・・・・・こいつらどう話し合つつもりだ？」「

と言われて、部下たちは田的を思い出した。

「仕方ねえ。ちと話して来るから、お前らつとむを家に運んどけ。」「了解っす！！」

頭が言ったとおり、部下たちはつとむを運んで行つた。そして黒服の方に近づき、

「ー？誰だ！？」

「こここの組長だ。『頭』って呼ばれてるけどな。あんたらに話したいことがあるからそいつ共々家に来い。手当ぐりこなせやってやる。」「・・・・・・・・いいのか？」

「そう警戒すんな。俺に対して殺氣がなければ、家にいても殺されはしねえよ。・・・・それと、あんたらの探し人の居所について話そう。」

「お嬢様は一体どこに居る！！？」「

「それを話すから、家に来いって言つてんだよ。ついてこないと置いてくぞ。」「

と言つて、頭は家へと歩いて行つた。黒服の人たちは、警戒しながらも後をついていた。

「まあ、座りな。そこから自己紹介といつづじやないか。」「

と、頭は言つた。それに従つて座つてから、

「私の名前は、如月瑠唯。そして、先程あなたのところの若頭と闘つていたのが水上清です。」「

我々はレーニン様をお守りするレーニンの部隊で、水上さんは私達の隊長です。」

と自己紹介した。

「…そうか。ありがとよ。んで、早速本題に入りたいんだが…」

「お嬢様ほどの御方ですか!?」

「そり、慌てなさんな。場所にたどり着く前にあいの気持ちにも気付いてやれば良かつたんじやねえか?と、俺は思うんだが。」

十一

『只貴!! まだ怪我が治ってないのは無茶しないでください!!』  
『どうせ顔だけだろ? いうだけ言つたら寝るからよ、行かせろ。』

『あ、兄貴！？』

「六二。斬牲勿用」

「はつ。これぐらいで心配してんじゃねえよ。大体、顔の殴り合い

だつたから顔以外は酷くねえよ。」

「お前は・・・・！？」

「わいき聽こえたんだが、あんたの名前は如月なんだってな。・・・  
・・・頭、俺に言わせてくれ。それを言つたら素直に寝るか。」  
「・・・・・・・・・・・・わあつたよ。やつれと言つて寝る。ど  
うせは」「で泊まるんだら?」

と言つて、つとむにバトンを渡した。

「さて、一つ訊きたいんだが、あいつはどんな理由で逃げてたと思う?」

「お嬢様はパーティの途中でお逃げになつたのだ。理由なんか知る

「なんがどういぢやないかといふやうだねえよ。」

「なんだどつ！？」「

「あいつが逃げた理由はな、単純に飽きたからだ。」

「そんなくだらない理由で逃げたのか！？？」

「ぐだりなくねえよ。ここかへあこひはお歸りに来たわよ」と、

その気持ちをずっと隠してたんだぞ？それに気づかないSPAが守る  
つづは。『モードセラピーグループ』。

「アーリーは、笑って話せる」

「貴様！！私達を愚弄するつもりか！！」

お前らは所謂 おじいの新夕に雇われてるから ついでに質問を あいつの事守つてるだけだろ? そんなんじゃ、ほんとに厄介なこ

「とにかく、お前らは守れないぞ。」

「とむか言った言葉が、S.P.たちの心に刺さっていった。そしてS.P.の誰も喋らなくなつた時、

「私は」

「隊長！！」

水上が上半身を起こして言った。

「少なくとも私は、お嬢様を命にかけても守りたいと思つてゐる。命令されなくとも、ね。

たいものがいるのかい？」その問い合わせ、

『自分の気持ち』と『友達』たかひらかずひる へんは寝る。

一応答え、その後に自分が寝ていたところで寝た。それを引き継ぎ、

「という感じだ。あんたらがこれからどうするかは、自分たちで決めるつてこった。・・・さてと、本題の場所についてだが、あいつは今本宮の家にいるぞ。今頃大人しく寝てるんじゃないのか？」頭が本題の場所について言った。その場所を聴いたSPたちは、驚いた。

「まさかそんな場所だつたとは。…………」  
「ここに来ていたんだろ？」

「ああ。最初はな。その後に、つとむが本富に連絡したら、連れて来いって言われたそうだ。あんたらの足止めをしながらな。」

「つとむって、さつきの若頭だろ？ どうしてあんな子が本富と知り合いなんだい？」

「あいつは俺の子供じゃねえぞ。本当の名前は、ハ神つとむって言うんだ。家は・・・・・・

・・・これ以上はダメだな。悪いが、あいつの住所やらほこの町じゅう極秘扱いになってるからよ。むやみに話せないんだ。」

「そうなのか。・・・・・・・・・・・・どうしてだか知りたいが、今はそれどころではないな。」

「俺も眠いからな。お前らもここで寝ていけ。」

「いいのかい？」

「構わねえぞ。どうせ、部屋は余つてんだからよ。」

と言つて、頭<sup>かしゆ</sup>は自分の寝室に行つた。それを見届けた後、「では私達も寝るとしてよ。」

「隊長。あの少年の事、調べますか？」

「それは明日からやればいいことさ。いや、もう口付が変わっているから今日からだね。」

「分かりました。」

とこつ会話をした後に、S.P.たちは寝た。

一方、無事にいつきが住んでいた家にたどり着いたレミは、

「すみません。私のわがままのせいで……」

「だからそれはいいって。あ、君の家には一応連絡はしといたから。

」

「どうでしたか？」

「怒つてはいたけど、心配はしていたよ。流石にこれには驚いたみたいだ。」

「そうですか。…………それにしても、これだけ広いの人がほとんどいませんね。どうしてですか？」

「それは簡単だよ。父さんがそんなに人を雇わないからさ。それに、一人暮らしだとこれぐらいで丁度いいし。」

その丁度いいが、まさか三階建てでその部屋一つ一つが広く、さらには庭が広いとは、誰も想像できないだろう。

「そういうえば、八神さんはどういった感じの関係で？」

「つとも…………ああ。僕と幼馴染なんだよ。昔は家がお隣だったから。ここに引っ越しても、学校とか一緒に通つてたよ。」

「そりなんですか。…………あの方は素敵ですね。とっても強くてカッコイイです。」

ウツトリと話すレミを見て、いつきはいつも思った。

(まったく、君はいつもいつも誰かを惚れさせるね。それが君の良い所だらうけど、もうちょっと節度というか、配慮というか、とにかくそういうものをして欲しいものだよ。)

一通りつとむに心中で恨み言を言い終えた時、

「いつき様。お電話が。」

「あ。うん。分かったよ。」

メイドが電話を持ってきた。レミは浴室に戻つており、ここにいるのはいつきだけである。

「はいもしまし、本當ですが。」

『あ。いつきさん?』

「その声は、茜ちゃんかい?」

『はいそうです。いつも兄がお世話になつてます。』

『ひづらにや。・・・・・それで、何の用だい?』

『お兄ちゃん、いつきさんの家に泊まつていますか?』

『いや、泊まつてなによ。客なら泊まつているけど。』

『そつなんですか?・・・・・・・・・うへへ、ビニに泊まつてるんだり?』

「明日になれば帰つてくるでしょ。心配するのも分かるけど、寝た方がいいよ。」

『そうですね。夜分遅くに失礼しました。』

と言つて電話が切れた。

『茜ちゃんは、つとむと違つて礼儀正しいね。・・・・・さてと、

そろそろ僕も寝ようかな。』

そう言いながら、いつきは自室に戻つていった。その後、つとむの電話での言葉で、一小時間ぐらい寝れなかつたのは、何とも言い難いことである。

第五話～事故は地獄と紙一重～（前書き）

これからは、ゆっくり・まつたり、をモットーにしてこります。

## 第五話～事故は地獄と紙一重～

朝。目が覚めたら、いつもの俺の部屋ではなかつた。辺りを見渡していると、昨日の事を思い出した。頭の中で振り返りながら、俺はなんであるな真似をしたんだろうか？と思しながら、部屋を出た。朝起きて、初めにしたかったのは風呂に入ることだったが、風呂場がどこだか分からなかつた。なので歩いていたら、この組の部下の一人に会つた。

「兄貴！おはよう！」やつます！昨日の怪我は……って治るの早くないくつか？」

「普通の人から見ると、そうだろうな。……なあ、風呂はどこだっけ？」

「それなら案内しますよ。新聞を取りに行くついでですから。」「助かる。」

部下の一人に案内されて、俺は風呂場に着いた。…………ここの、男湯と女湯に分かれてるんだな。誰かに入る奴でもいるのか？そう思いながら、俺は風呂に入ることにした。

「ふう～生き返る。……つてか、広いな、こい。こつきの家の風呂場より狭いけど。」

と一人で亥いていたら、誰かが入ってきた。そして、

「ふう。昨日はいろいろとあつたせいで風呂に入れなかつたからね。起きたら入ろうと思つたんが……どうやら君とは考えることが同じのようだ。」

「オメエと思考が同じだつたら、俺もヤキがまわつてるな。……で？本当のところはどうなんだ？」

水上、だっけか？が風呂に入つて早々、変なことを言つてきたので俺は言い返した。

「本当のところ、とは？」

とほけるつもりか、ここつ。

「本当は、俺となんか話がしたいからじゃないのか?」

「見事だね。そうだよ。私はそのために君をつけてたんだ。さて、何から話そがな？君はどれがいい？お礼、私の気持ち、これからについて。」

「全部だ。」

と俺が言つたら、そいつが言つた。

一昔から決めてるものの延び、薄れてもんだ。

「おまえがうるさいな。一言も言わぬでいいから」

い出せたよ。

—それはよがつたな。

次にこれが何にしてか

「行く處」にある「」

元音の構成とその変化

「中華書局影印」

家なんだぞ。

その言葉に、俺はものすごい驚いた。

「 そ う の か ? あ い つ の 親 は 普 通 ． ． ． と は 言 い 難 い が 、 面 白 い

人だそ？』

セイ・シトトメ

ま、春が今、思ひ出しが、三月に向かって、一時的にならぬ。

「私達で何時も一緒に。」私達は一同であつた。

と言いながら上ひづりとしていた。そこで、俺は昨日の騒動で思つた

ことを口にした。

「なあ、あんた。あなたの部下、めちゃくちゃ弱かつたんだが・・・  
・あれでもS.P.か?」

「 そうだ。ただ、あれに關して言わせてもらひたい。  
だよ。一般的だと、あれぐらいだ。」

だよ。一般的だと、あれぐらいだ。

「いつきのとこはあんたぐらいの強さだつたぜ。全員な」

・ それはさて、きも言った通り、あの家が特別だからだよ。 ・・

「これからの訓練を厳しくした方がいいかな？」

仕事で話す言葉が変わった  
て大変だな。

「あんた。」

「大變そうだな。  
」

「ははは。まあ、そうだけどね。……………そうだ。これ

何か思ひついたのか？俺に関係がなければいいのだが。

「なあ、八神君。」

「あたしもう一回やるんだが。」

「何を?」

それはもちろん和達の言葉のたよ  
と思いつきりいい笑顔で言つてゐた。

「されどよそれはどうして俺が手伝わないかんのだ

当は君を入れたいのだが、嫌なのだろう?」

「当たり前だ。何か悲しくてそんなことせはやならんのだ。

「君のその強さ、その外見だったら立派なＳＰになれるぞ。私が保

説小治政

「俺はそんな保証はいらん。自分たちで何とかしろ。」

「それができたら私も苦労はしないさ。」

とため息をつきながら机の上。

動作がキサつほいな

ういと雖でわれぬことなあ。

だけだぞ。それに、俺が暇な時だけだ。

条件付けて了承した。

「アーヴィングの『モードル』は、アーヴィングの『モードル』だ。」

と言つた。

短絡的なんだろ？

217

## 5・2 たかあき町 歴史（前編）

五十話になりました。早いですね。

## 5・2 たかあき町 歴史

「いや～ もつぱつした。ここに来ることはないだらうナビ、ここに風呂はもう一度入りたいと思つね。」

「俺は別に用がなければここには来ないが、風呂には入りたいな。風呂から上がって、それぞれの部屋までの道。本当に広いよな、ここ。」 そう思しながら水上と話していたら、

「そういうえば、君はこれからどうするつもりだい？ 家に帰るのかい？」

そう訊いてきた。時計を見ると、午前六時半。今日の予定を思い出して俺は、こう言った。

「ああ。家に帰る。これから用事があるから。」

「そうか。ならもうお別れといつ事か。少し寂しい感じがするな。」

「そうか？ 俺はしばらくあんたらの顔をみなくていいと思つと、ホッとするんだが。」

「随分なことを言つてくれるね。…………お。部屋に着いたみたいだね。では。」

「ああ。」

そう言つて、お互に部屋に入った。

そして、自分が使つていた部屋で荷造りをしていたら、

ガラッ！

という音と、

「君に訊きたいことがあつたんだ。」

デフォで笑顔なのだろうか、にこやかな笑顔で水上が部屋に来た。

・・・・・・・・・・・・・・笑顔が絶えない奴らと最近よく遭遇するな。いつきとか、白鷺とか、こいつとか。そんなことを思いながら俺は、荷造りをしながらこいつ訊いた。

「訊きたいことって？」

「忘れそうになつたのだけれどね、君、昨日銃を使つただろ？あれ、どこで覚えたんだい？」

そんなことか。そう思いながら俺は答えた。

「あれは、こことか、他のヤクザの組とかで教えてもらつたんだ。他にも、花札とかの博打とか、色々なことを教えてくれたぜ。」

本当に助かつたぜ。あいつら、見た目は怖そつなんだが、仲良くなると何でも教えてくれるんだよな。と教えてもらつたことを思い出していると、

「そななのか。君の慣れた手つきを見て、どこで覚えたのか疑問に思つてね。ふむ。ますますSAPに向いてるね。」

と言つてきた。お前、まだ諦めてなかつたのか。と、俺は呆れた。そんなに俺をSAPにしたいのか？そつこうしている内に荷造りが終わつたので、

「それじゃ、俺はもう帰るわ。じゃあな。」

と言つて、俺は帰ろうとした。したんだが、「兄貴！朝食ができましたぜ！！・・・・・・・って、帰るんすか？兄貴？」

部下（名前はおそらくヒロシ）が入つてきた。またすぐタイミングでききたな、おい。もう帰る準備はしてしまつたので、俺はこう言った。

「ああ。帰るわ。<sup>かじり</sup>頭には『助かつた』と言つておいてくれ。」

「え？ はあ、分かりましたけど、もうちょっとひくつけていいつても良いんじゃないですか？」

とそいつが言つてきた。それは悪い話ぢやねえンだけじよ、昨日約束しちまつたからなあ。それをどうこうして納得させようかと考えていたら、

「ま、いこつす。兄貴がそつおつしゃるのなら。自転車置き場まで、案内しましょうか？」

あつさりとひいてくれた。話が分かる奴で助かつたな。そう思いながら、俺はこう言つた。

「ありがとう。今度この組に何かあつたらいせん、とせんつておこてくれー・じゅあなー。」

「気を付けてつす！！」

俺が言いながら廊下を駆け出したら、そいつは後ろで敬礼をしてくれた。それを見て俺は、

…・今日もまた大きな出来事に巻き込まれ  
そうだ。

と直感した。当たらなければいいな、こんな直感。

つとむが帰るのを見届けた後、水上たちも帰ろうとした。

「さてと。私達も帰るとするか。色々と報告をしなければいけない

ハツ！

そして帰れつとした時、

「ん？ 帰るのか？ お前ら。色々とあつたが、それは水に流そうや。頭がいつの間にか、水上たちの後ろにいた。その事実に全員が驚いて、それを確認するために、水上が代表で訊いた。

「いや、それほどいやねえよ。ひとつと一対一だつたら十分で負ける。ただこの町は、昔から無法者とこゝか、ゴロツキが中心となつてゐたから、昔からいじめている奴はこのぐらひは普通にできる。治安が良くなつたのだけれど、つい最近、三十年位前だな。」

水上の質問に対し、自分はそんなに強くないと頭は書いて、おもむろに町の歴史について語りだした。

その話を聴いた水上たちSPは、啞然としてした。この町のヤクザ達はみんな、この人と同じくらい強いのかと思つたからだ。その考え方を読んだのか、

「俺達だけじやねえよ。この町に住んでる爺さんや婆さんだつて、結構強いぞ。この町は昔から、弱肉強食だからな。」  
と頭が補足情報を話してくれた。

「なるほど。この町に住んでるものはそれなりに強い、と思つて構わないんだね？」

「ああ、そうさ。それじゃ、気を付けて帰れよ、お前ら。」

水上が、町の住人が全員強いと考えてもいいのかと訊くと、頭はそう考えてもいいからさつさと帰れ、と言つて戻つていった。それを

見送つた後、

「帰るか。」

『ハツ！』

と言つて帰つていった。

「ただいま。」

「お帰り！お兄ちゃん！……！」

家に帰つたら、茜が俺に走つてきた。これから察するに、余程嬉しいんだろうな。と状況を観察していたら、

「そういえばお兄ちゃん。昨日はどこに泊まつてたの？」「つきさん」に電話したら、来てないって言われたんだけど。」

そう茜が言つてきた。うわあ。それについて考えるの忘れてた。どう説明しようか、と頭を必死に動かしてたら、妹の恰好が気になつた。

「なあ茜。その恰好、どうしたんだ？」

「えへへへ。気付いてくれたんだ。これはね、この日のために買つておいたんだ。どう？似合うかな？」

と回転しながら説いてくる茜。この日のためつて。そういうコトもわかつたが、似合うかどうか説いてきたので、とりあえずもう一度茜の恰好を見た。

フム。全体的に活発そつだな。ワンピースを着てるから余計にそういう思える。

とまあ、俺の中で結論が出たから答えるか。

「よく似合つてるぜ。正直に可愛いと思つた。」

「お、お兄ちゃんに褒められると、やっぱり嬉しいな」

答えたなら答えたで、テンションが上がつたみたいだ。嬉しそうに踊つてゐる。

- ・・・・・・・・ わて、この隙に。そう思つて、俺は一階に上がりて着替えて、財布やら恐らく今日必要になるものを準備した。・・・
- ・・・・・ いけね。なにも食つてない上に、どこに行くのかすらも分からぬ。

ま、朝食は家で食べればいいし、どこ行くかは茜に訊けばいいか。

そう思つて一階へと降りた。

「おかえりつとむ。」「おかえりなさい。」

「ただいま。・・・・・・・・つて飯がねえ！――」

リビングに行つてみると、朝飯がなかつた。というか、俺の分が準備されていたかどうかすら怪しい。

親にそのことを訊いてみると、「泊まつた所で食べてきたんじやねえのか?だから母ちゃん、つべつてなかつたぞ。」

そう親父に言われた。畜生、こんなことになるんだつたら、あつちで食べてくればよかつた。と後悔しても後の祭り。こうなつたらコンビニ寄つて行くしかねえなど考えてたところで、親父がこう訊いてきた。

「昨日、学校から連絡があつたんだが、お前、停学受けたんだろ?何やつたんだ?」

俺としては、昨日の事に関してはほとんど言ひきがないので、こう言つた。

「別に。それを言つたつて何も変わらないからな。あえて言ひながら悪いことはしてない。」

そう言つたら、親父が「やつぱりか。」と言つて黙つた。ま、黙つてくれるなんならそれでいいか。と思つた。そんなやつとりをした直後に、「お兄ちゃん!もう行かないと最初から観れなこないよ――。」

茜がそう言いながらリビングに着た。なので俺は、「行つてくるわ。」

「いつてらつしゃい。」「なんだと――?つむーお前行かないんじゃなかつたのか!?」

行つてくる、と言つただけでこの有り様。いつもと変わらないなど思つたが、両親、特に親父が何やら悲しそうな眼をしていた。・・・?一つもの親父らしくないが、どうしたんだ?そう思つたが、茜が

急かしてきたので家を出た。

「あいつ、昨日も大変な目にあつたんだな。心配しかできないのも、つらいもんだな。」

「ただけど、心配も私達にとっては愛に変わりはないでしょ？」

「しかし、つとむの奴、本宮さんの正体に気付かないってどういうことだ？」

「それは分からぬでしょ。私達だって、気付いたの三年位前ですよ？」

「ま、いいが。いまはそれより自分の息子の身の安全についてだな。」

「あの子なら大丈夫よ。なんつてつたつて、昔の町をまとめた英雄の息子なんだから。」

「よせやい、母さん。ほとめたんじゃなくて、治安をよくしただけだぜ？」

「そういうところも息子が受け継いだわね。唯一例外なのは」

「あの体質だけか。しかし、こればっかりはな・・・・・・・・

「神のみぞ知るつて事ね。」

「ああ。」

## 5・4 戦友 到着

街を茜と一緒に歩いていて（ちゃんと飯は買って食べた。）、どこまで行くのかと俺は訊いた。

「駅まで歩いて、そこから電車でムサシ町まで行って、撮影現場行くんだけど・・・・」「どうかしたのか？」

「場所が分からんのだよ。お兄ちゃん、知ってる？」

「知らん。そのドラマのタイトルは？」

「確か『男の戦い！～裏最強の恋を巡つての大バトル！～』だつたよ。」

「そういえば、長谷川が見せてきたのもそれだったような・・・・」

「それでも埒<sup>ら</sup>が明かないんで俺は、話題を変えることにした。

「そういうれば、好きなアイドルとか居るのか？」

「うえええええ！～！～？そ、そんなこと言えないよ！～？」

「どうしてだ？ テレビに出てる奴で好きな奴訊いてるだけなんだが。

「・・・・あ。 そうなの？ てっきりお兄ちゃんも含まれてるのかと思った。 で、好きな芸能人だつたよね？」

「範囲が大きくなつたような気がするが、気にはしない。 で？ 誰なんだ？」

「お兄ちゃんと同じ学校に通つてると思つけど、『光<sup>ひかり</sup>』っていう人だよ。 最近小中高生の間で結構人気なんだよ？ 知らないの？ ・・・ ・・・ って、訊いちゃいけなかつたね。 「ごめん。」

「気にすんなよ。 それにしても光、ねえ・・・・・・写真とかないのか？」

「あるよ。 前にグラビアアイドルやつてたみたいだから写真集を出していてね、私つい買つちゃつたんだ。 ・・・ ・・・ はい、

これ。」

と茜が写真集を渡してくれたが、さつきの説明で俺はもう誰だか目星がついてしまった。

「いい。もう誰だか分かったから。」

「本当！？さつきの話だけでよく分かつたね！」

「それにサインしてもらいたいから持ってきたのか。用意がいいな。

「それはそうでしょう！私達も町の近くで撮影がやるんだよ！折角だからサインしてもらいたいでしょ！」

そんなもんなのか、と言つたら何を言われるか分からぬので俺は黙つた。

その後、町の不良どもにからかわれながら電車に乗つてムサシ町まで行つた。

二時間かかつたがな。

今の時刻は十時。撮影は始まつてゐるだろうが、始めの方だから大丈夫か。問題は……

「お兄ちゃんと私は恋人…………えへへへ、恋人かあ～～」

どうもあいつらが茶化してきたせいで茜がおかしくなつたみたいだ。電車に乗つてからずつとこの調子だつた。こいつはあとで何とかするとして、とにかく撮影場所に行かないとなあ」と思い案内図を見ていると、

「？よお！つとむじやないか！珍しいな、お前がこの町に来るなんて。何か用か？」

馴れ馴れしいな、誰だこいつ？と思い振り返つたら、

「お前・・・・・！飛翔（つばさ）じゃねえか！？そいや、この町の不良仕切つてるの、お前だけ。」

「久し振りだな、本当に。相変わらず変わつてねえな。この町に来たのつて、ひょっとするど、撮影現場観るためか？」

そこには、俺の知り合いの大地飛翔（だいち つばさ）だった。車は近くに置い

である。

「ああ。茜がどうしても見たいって言つからな。」

「茜つて、そこでボーッとしたままの嬢ちゃんか？」

「妹なんだ。」

「ふうん。……とにかく、俺も丁度行くところだつたんだ。

乗つてくれか？」

と言つて飛翔が自分の車を指差した。その申し出は正直ありがたいが・・・・・

「いや、いい。」

「遠慮するこたあねえだろるよ。」

「けどな・・・・・」

「今までの借りを返すと考えればいいだろ?」

「・・・・・・・・分かつたよ。乗せてってくれ。」

「元よりそいつもりだ。」

と言われて、俺と茜（飛翔との会話中に元に戻つた）は飛翔の車に乗つた。

「ありがとウイザードます。でも、飛翔さんはお兄ちゃんと何時から知り合いなのですか？」

「確か・・・俺が高一の頃だっけ？」

「ああ。もう五年になるんだな。」

車の中で、俺達はそんな会話をしていた。運転してるのはもちろん飛翔で、俺達は後部座席に座つてゐる。この会話をして、俺は飛翔と最初に会つたことを思い出した。

あれは、俺が中学一年の頃だ。その当時から俺は、町のほとんどの不良やヤクザ達をまとめっていた（自覚はなかつたが）。だからなのか、俺の呼び名はいつの間にか『皇帝』になつていた。で、飛翔たちが来る前から『余所から喧嘩しに来るやつらがいる。』という話が不良たちで話題になつっていた。俺は巻き込まれなければどうでもよかつたので、聞き流していたが。

そんなある日、俺はいつも通り一人で散歩していると、廃工場の

方から殴り合いの音が聴こえた。どうでもいいから通り過ぎようとしたら、電話で応援を呼んだのか他の奴らがやってきて、俺まで巻き込まれた。仕方なく廃工場の中に入つてみると、飛翔たちのグループがこっちの方をボツコボツコにしていた。その時の飛翔の印象は、今とは違ひ少しグレていた。で、当然俺が前面に押され、飛翔たちのグループと喧嘩する羽目になった。結果はというと・・・・

「いやー、あん時から強過ぎだろ。なんだよほほ無傷つて。ま、そのおかげで俺もまだまだだと思いつらされたからいいけどよ。」

「こっちが素手なのに、お前ら木刀使ってたじやねえか。本気でやらんと俺が死ぬ。」

ちなみに飛翔たちのグループ、ここが地元でこの町最強のグループだ。

と昔話をしていたら、

「そりいえばお兄ちゃん。よく一人で散歩して帰つてきたら、服が破けてたりしてたよね。その度に自分で縫つていたよね。何をしていたの?」

当然のように茜が訊いてきた。誤魔化してもいいんだが、遅かれ早かれ気付かれるんじやないかと思い、

「親父達に訊け。」

と両親に投げた。自分で話す氣になれなかつたからだ。その答えに渋々ながらも、茜は納得してくれた。

そんな話（俺や飛翔の武勇伝）をしていたら、

「着いたぜ。ここが撮影場所の武士公園だ。」

と言つて俺達を降ろした。しかし、武士公園つて町がムサシだからか?と、どうでもいいことを考えていると、

「じゃ、駐車していくる。」

と言つて飛翔は車を出した。待つている間俺は、公園の中を見てみた。公園は結構広く、撮影している傍らで、子供たちが遊べる広さだった。途中、何やら柄が悪い奴らを見たような気がするが、気のせいだと思っていた。

十分後、飛翔が来た。どうも駐車場所がほとんど埋まっていたらしく、空いてる場所を探すのに苦労したとか。三人揃つたので、場所を探そうとしたら飛翔が止めた。

「どうした？」

「いや、場所は取つてあるんだ。」

「どこに？」

そう訊いたら、飛翔が指を指した。その方向を見ると、先程見つけた柄の悪い奴らだった。

「やつぱりかよ。お前ら、よく観に來たな。」

「そりや、地元で撮影するつて聴いたら観に行くだろ。それに、最近売り出し中だろ？俺もファンなんだ。」

「そうか。」

俺の短い答えに何か考えただろうが、茜が「自分のファンなんですよ」と言つたら、茜と語りだした。

もうこいつに任せて帰つかな、と思ったが、それをすると妹から約束破つたからという名目で再びどこかへ行く羽目になりそうなので、歩きながら好きな芸能人の話をしている一人の後を追つた。

「あの、すみません。私のわがままのせいで……」「気にしなくてもいいよ。僕も一日一回は彼に会つていないと、調子が狂うからね。」

「それはどういう意味ですか……？」

という会話をしていた二人がいた。いわずもがな、いつきとレミである。一人は、撮影現場が最も見やすい場所に陣取つていた。もちろん、SP付きで。

ふと気になつたのか、レミはいつきにこう訊いた。

「田立てません?」

「田立てばその分、つとむが見つけてくれるよ。」

しかし、つとむが来たのはここに陣取る十分前だつたので、一人が来ていることは分からなかつた。

「でも、さすが本宮ですね。私の父にこんな条件を付けたのですから。」

何気なくそう言つたら、

「別に。僕じやなくともつとむならこれぐらいやるよ。」

憮然とした態度、あるいは無表情でいつきがこう言つた。そこには、何かしらのしがらみが見て取れた。だが、そこは篠宮。そこには触れずに話題を変えた。

「つとむさん、遅いですね。」

いつの間にか呼び方が変わつていたのは、彼に対する気持ちの表れか。それが面白くないと感じながらも、顔に出さないいつきは、意地悪い考えを思いついて携帯を取り出した。

「どうするつもりですか?」

「電話で呼ぶんだよ。」

なにかとんでもないことが起こつてそつた気がする。

しかも、ピンポイントで俺に降りかかりそうな。  
そんな気がする。

と考えてしまふ今日という日。今の状況を確認すると、

? 飛翔と茜は撮影を見るのに夢中。

? 飛翔の仲間たちは、誰が良いかという事で揉めている。  
そして俺はというと、そんな奴らを尻目に散歩していたはずが、  
捕まっていたというか、取り押さえられていた。

この場合、誰に、というのは愚問だろう。なぜなら、これを実行させるのは一人しか考えられないからだ。

こうなった経緯を話すか。

事の起こりは、俺達が飛翔の仲間たちと合流してからだ。合流した時の茜の反応は、「これ、ホントにお兄ちゃんの知り合いなの?」だった。飛翔の仲間たちは俺の妹だと知つて、平身低頭だった。これに茜は驚き、何とか敬語を使わせないようにした。

その後、撮影にまだ時間があるので話していたら、仲間内で勢力が分かれていることが判明した。その勢力とは、

『今売り出しているアイドルの中で、誰が一番か』という話である。それは大きく分けて一つあり、『光』ファンと『白井美夏』ファンだ（飛翔は中立、俺は無関心）。ちなみに白井美夏、とは白鷺美夏のタレント名だった。…………ここまで関わってくると、泣ける。

そこから揉め事が始まつたのだが、奇しくもその時に撮影が始まつたので、茜と飛翔だけ見始めた。

その時俺は、その前から適当に歩いていた。歩いていたら、見てはいけないものを見た気がして、俺は後悔した。そして、戻ろうとした。だが、こちらが見つけという事は、あちらにも見つかつたという事だ。すぐさま黒服が俺に立ち塞がつた。数は四。俺は抵抗したが、それもむなしく（黒服の一人を倒しただけは、彼にとつてむなし以外に感じない。）、先のような状況となる。  
で、この状況を作り出した張本人はというと、

「やあつとむ。僕を見た瞬間に逃げるなんて……そんなに僕の事が嫌いかい？」

椅子に座りながらこう言つた。俺はあれか、罪人か。って言つか、ビニールシートに椅子って意味あるのか？と俺のそんな思いはつゆ知らず、いつきは話を進めていった。

「まあいいけど。今日はそれを不問にしてあげるよ。

それは俺に危険が無くなつたと捉えていいのか？

「でもさ、なんで電話したのに気付かなかつたの？」

「は？」

俺は解放された体をほぐしながら、いつきが言ったことに疑問を感じた。そんな馬鹿な、と思いながらケイタイを見ると、今日の日付の着信履歴を見た限り発信者はいつきで埋まつていた。

「・・・・・・すまん。」

「君が直接来てくれたからいいけどさ。それで、僕がなぜここにいるのか」というと・・・・・

「・・・・こっちに来たら?」

「？」

いつきが何で呼んだのか分からなかつた為、呼んだ方向を見ると、「あ、どうもこんにちは。昨日は助けてくれてありがとう」とうございました。

「

と礼を言つている篠宮妹がいた。

## 5・6 物 メンツ（前書き）

三万PV突破しました！

あ、このサブタイトルあまり気にしないでくれると助かります。

「まだいたのか。篠宮妹。」

「私の名前はレミです！！最初に言つたじゃないですか！！」「で？どうしてここに？」

態々（わざわざ）いろんな所まで来なくて良いにじやないか、といつ本音は置いておく。

それが伝わったのかいつきが、

「礼を言いに来たんだって。」

単純な目的だけを言つた。俺としては、たいした事をしたつもりはないんだが。

「もう礼は言つたんだ、用は無いんじゃねえのか？」

そう言つと、いつきがヤレヤレ、といった感じで首を振つた後にこう言つた。

「あのね？いつも言つけど、僕達はお礼を言つてハイ終わり、じゃ駄目なんだよ。君を知つてるよね？」

「知つてるが、それはそつち側同士だろ？俺は関係ないはずだが。」

「君の立場じゃなくて、僕達が助けられただけつてのは、こっち側じゃ結構な問題なんだよ。」

「そういうもんなのか？」

昔からそんなやりとりをしてる気がするが、俺としてはイマイチ納得がいかない。

だが、たまにいつきの事を助けたりすると（厄介事に巻き込まれた時）、謝礼という形で何かが送られてくる。それが結構高そう（といつより、実際高いのだろう）なものなので翌日返したりするのだが、いつき曰く『返却不可だからね』と言われ、返せなかつた。結局、それは自分の部屋に置いてある（確認行為以外では開けた事は無い）。

一通り確認が終わつたので、篠宮妹が話し始めた。

「本宮君が言った通りです。先程の言葉は正式な『お礼』という訳ではありませんので、これから始めたいと思います。」

「勝手にしろ。」

「分かりました。では。…………昨日は私の事情も訊かず助けてくれて、誠にありがとうございました。それで、そのお礼なのですが」

この時の篠宮妹の声、いや、雰囲気は、氣高いお嬢様を想像させるものだった。が、

だからどうした、と俺は思った。続けて篠宮妹が、『お礼』の内容を口にした。それはいつきが驚く内容だった。

「このお礼は、わが自宅へ招待させていただくというのにしたいと思います。」

「ええ！？ それはちょっと、いくらなんでも大胆過ぎない！？」  
その内容を聞いたとき、自然とあの女の顔が浮かんだ。いつきがなぜそんな慌てているのか知らないが、俺はあの女の顔を思い浮かべた時すでに、答えは出ていた。

「これでどうでしょうか？」

と不安を抱きながらも訊いてくる篠宮妹。こいつには悪いが……、

「断る。」

「ひどくないですか！？」

俺が即答したのに驚いたのか、つい最近誰かが言つたことと同じことを言つた。ちなみに、この答えにいつきは胸をなで下ろしている。俺にはその意味が理解できないんだが。

「どうしてこれはダメなんですか！？ 折角昨日考えていましたのに

！」

「理由？ あなたの姉に会いたくないから。」

「え？」

俺の言つたことがそんなに不可解だったのだろうか。篠宮妹は落ち着きを取り戻した。

「どうしてですか？」

「昨日言つたの、憶えてるか？俺はそれのせいで、ちと顔を呑ませたくないんだ。だから、断る。」

理由込みで断りを入れた。俺が言つた言葉を覚えていたらしく、それから篠宮妹は悩み始めた。

「悩んでいるならいいんだが。」

「私にもメンツというものがあります！」

いらないと言つたら、プライドの問題だ、と返された。このままいくと平行線になりそう（実際は既になつてゐる）な状況だったので、「また逢えたらいいよ。じゃあな。」

と言つて戻ろうとした。しかし、篠宮妹は「今度つて、何時会えるか分からぬいじゃないですか！」と言つて俺を引き留めた。いつきはといふと、「あれ？僕何を考えてたんだろ？」と顔を赤くしながら呟いていた。何をやつているんだか。

ここに考えがまとまらなくなつたのか、篠宮妹が俺に訊いてきた。

「何が欲しいのですか？」

「俺に訊くのかよ。」

「仕方ないじやないですか！私はそんなんにあなたの事を知りません！・・・・・・・・・・・・

詳しく述べ知りたいと思いますが。」

こいつはなぜ赤くなつたんだ？しかも最後の方、聴こえづらかったし。

「それで！？何が欲しいのですか！？」

もはや勢いで訊いてくる篠宮妹。欲しいもの、ねえ.....。

俺はとりあえず考えた。お金は自分で貯めてナンボだし、平和は無理。平穀も同じ。退学はしないと言つてしまつたので、これも却下。となると、あれ？何にもない。

「何もないわ。」

「ええ！！」

俺が欲しいものがないと言つたら、篠宮妹が驚いた。誰もそんなことを言わなかつたからだろうな。そう俺は結論づけた。

「つともはそんなに物欲があるわけじゃない…………とい  
うよりもしろ、物欲がほとんどないんだよね。だから僕もまいつち  
やうんだけど。」

と説明するいつき。

「どうか？俺は人並みに欲しいものはあるぞ？そうこいつきに言つたら、  
「でも、人から貰つてしまたくないんだよね？」

と言われた。確かにそうだが、どうしても今欲しつて時は、恥も  
外聞も無くもらつぞ？

「じゃあ君は今すぐ欲しいものはあるのかい？」

俺の心を読んだのか、いつきはそう訊いてきた。

「求人誌。」

「なんですか？それ。」

なんと。金持ちの世界に、求人誌という単語は無かつたのか。と、  
ある意味で俺が戦慄を覚えていると、

「いや。それはないでしょ。」

いつきに却下された。えへへへ、これ以外に早急に欲しいものなん  
かねえぞ。と思つていると、篠宮妹がふと思いついたみたいでこう  
言つた。

「そうです！…じゃあ、私の手料理でも！…」

「へりん。」生憎間に合つてる。

その言葉を受けて、篠宮妹は再びショックを受けた。

「これでも駄目なんですか……私の学校では割と喜ばれたのですけ  
ど。」

あんたはどんな学校に通つているんだ。そうツッコミたかったが、  
そんなことをしても話は進まないので、口をつぐんだ。

すると、再びいつきが補足した。

「料理は自分でつくれるからいいんだよね？」

「俺はそこまでやつてもらわなくていいから断つたんだが。  
そう言つていたら、篠宮妹が真剣に悩んでいた。

「うう、あれも駄目、これも駄目、一体何がいいのでしよう？

諦めねえなこいつ。  
と同時に、俺が欲しいもの、何があつたかな？  
と考えた。

うん・・・・・・・・・あ！

「お、たゞ」

「え！？ 本当ですか！？」 「本当なの？」

俺は頷きながら、

おお おお かせ

「なんですか！？」

それを受けて俺は素直に言った。

谷しい物は刃刀か  
はい?

俺が欲しいものを言つたら、篠宮妹はともかく、いつきまで目が点

となつた。

「それでいいですか？」

「ああ。前に何本か持つてたけど、全部折れちまつて。それ以降買

つてなかつたんだよ。あれがないと練習できないんだよなあ。

「安心気かでござる」と

その言葉の後に赤くなる

その言葉のどこに赤くなる要素があつたのだろうか。俺が言った言葉で、一人は顔を赤くした。なぜいつきまで？そう思ったが、俺は何も言わなかつた。

「つむぎさんかそう言いうなら、仕方ありませんね。分かりました。それにしましょう。」

? 昨日と違う呼ばれ方をしたような…………… 気のせいいか?

俺が戻ってきたら、揉め事は終わっており、全員で仲良く觀っていた。俺はそのまま眺めていたら、俺の視線に気づいたのか、茜が振り返った。

「あ、お兄ちゃん。今までどこに行つてたの？」

「そちら辺を散歩。」

俺の答えに茜は『?』となつていたが、それ以上考えるのをやめたらしく代わりにこう言つた。

「今ね、中盤のところでね、光さんも出てるところなんだよ。」  
俺はどうでもいいのだが、それを言つたら怒られそうなので、俺はこつ言つた。

「実際に見てどうだ？」

「うん！ とても綺麗な人だつた……………私もあんな風になれるかな？」

最初の方は嬉しそうに、後の方は切なそうに言つた。

「気にはなつて。お前はお前で良い所があるんだからよ。今でも充分だろ。」

と俺が言つと、

「ええ……お、お兄ちゃんが、ほ、褒めてくれた！？」

「何故そこで驚く？」

顔を赤くしながら、茜がこんなことを言つた。驚くようなものか？

「だ、だつて、いつもはそんなこと言つてくれないじやん……」

茜は、うつむきながら喋つているせいか、だんだん声が小さくなつていつた。そのせいで、表情が見えない。だが、多分赤くなつたままだらう。これをどう対処しようか考えていたら、

「ん？ 午前中の撮影が終わつてるぞ。」

俺がそう言つたら、

「えー？」

と語りて、茜が後ろへ振り返ると、そこに手付けが始まっていたところだった。

「いや～結構よかつたな。あのシーンのところとか」

「いや、もつと始めの方つすよ。」

「それよりもうちょっと中盤よりの方つす。」

「言いながら俺達の方に寄ってきた飛翔たち。その光景を見た茜は、

「しまつた」という顔をした。

「さつきまで観れたからいいんじゃないいか？」

「普通は最後まで観たいでしょ！？あそこまで観たんだから！」

どうやら全部観たいと思っていたみたいだ。どうするか考えながら時計を見ると、ちょうど正午だった。腹減ったなあ～と考えながら空を仰ぐと、

「あつ！～？つむむむんじやないですか！～やつぱり見に来てくれたんですね！？」

と声が聴こえた。

・・・・・・・・・・これは幻聴これは幻聴これは幻聴、と心の中で呟いていた更に、

「なんで空を見てるんですか！？私を無視しないでください！！」

と言いながら、そいつは俺に近づいて来たみたいだった。これ以上現実逃避は無駄だと思つて俺は視線を戻した。そこにいたのは、

「やつぱりあんたか。」

「名前を憶えているなら名前で呼んでくれませんか！？」

長谷川光だった。そいつの恰好は、ヒロイン役の服装だと容易に推測できた。しかし、長谷川がなぜこんなに怒つた声を出しているのかは想像できない。面倒だなあと思つていると、飛翔と茜が、俺に寄ってきてこう訊いた。

「つとむ（お兄ちゃん）、光さま（さん）と知り合つて？」

息が合つてんな、お前ら。そう思いながら俺は、

「そうだよ。」

と答えた。その答えを聴いた飛翔たちは、何故か変なテンションに

なっていた。

頭大丈夫かお前ら？ そう俺は心配せざるを得なかつた。

茜はというと、興奮を抑えきれずに長谷川にサインをねだつていた。ねだられた本人は、怒つていたのはどこへやら。笑顔でサインをしていた。それを見た飛翔たちもこぞつてサインを要求し、それに長谷川も戸惑いながら、サインをしていった。その途中、俺はここから近い店まで歩き出した。最初にサインをしてもらった茜は、俺の行動を見てすぐに後を追つた。

それを見た長谷川は、「あつ！ せつかく一緒にいられると思つたのに……」と言つていた。

「愁傷さま。

全国展開されてくるレストランの店内にて。

「お兄ちゃん。みんな放つておいて良かったの？」

「終わつたらここに来るんじやないか？一番近いんだから。」

「だといいけど・・・・・・・・・・」

と話しながら食べていると、ケイタイが鳴つた。発信者は飛翔。周りがうるさそうだったので、俺は席を立ち、外で話すこととした。

「なんか用か？」

『どこに居るんだ？』

俺がそのレストランの名前を言つと、

『俺達は人が少ない食堂にいるからよ。食べ終わつたらさつきの場所に集合つてことだ。』

と言われて、電話が切れた。その後自分の席に戻ると、茜が訊いてきた。

「お兄ちゃん、誰から？」

「飛翔。」

「なんて？」

「食べ終わつたらさつきの場所へ集合だつてよ。」

「ふーん。」

これで会話は終了。俺は黙々と料理を食べ、茜はそんな俺を楽しそうに眺めていた。

会計を済ませて店を後にし、再び公園に向かう途中。俺は気になつたことを訊いた。

「なあ」

「なに？」

「俺を見てどこが楽しいんだ？」

「ふえ！？わ、私、そんな顔してた？」

「してた。」

と俺が言い切ると、茜は顔を赤くしながら何も言わなくなつた。

それから、先程まで俺たち（俺はほとんどいなかつたが）がいた場所に着いたら、長谷川が一人立つていた。俺が見つけると、長谷川も俺を見つけたのか、俺に走ってきた。

「わざわざ走つてこんでも良かつたんじやないのか？」

「いいじやないです。少しでも長く話したいんです。」

なぜつて？それを訊くのは野暮だな。そう直感した俺は、妹の視線に気付いた。

「どうした？」

「別に」

訊いたら明後日の方角を向かれた。何か気に障ることがあったのだろうか？考えても埒が明かないでの、長谷川にこいつ言った。

「取りあえず、場所変えないか？」

歩きながらも俺たち（茜もついてきた）は、会話をしていた。

「いじ最近、ずっとこのドラマの台本読んでたのか？」

「はい。八神君の言葉のおかげでだいぶ自信がつきました。ありがとうございます。」

「別に。解決したのは長谷川自身なんだから、お礼を言われる覚えはない。」

「そうかもしませんけど、あのアドバイスが無かつたら、私は変わつてしまませんでした。」

そういうもんか？と呴くと、はい、そうです。と笑顔で返された。と、今まで黙つていた茜がいきなり爆発した。

「ちよつとお兄ちゃん……どつしてそんな風に普通に話しかけられるの……？」

「どつしてって、言われてもなあ……」

「…………お兄ちゃん……？」

茜が言つた一言に、気になつた単語があつたのだろうか。長谷川はその単語を呴いた後、こういつてきた。

「八神君、もしかしてその子、妹さんですか？」

「もしかしながらそうなんだが。」

と俺が肯定すると、長谷川は顔を赤くして「私、もしかして勘違いでもしてたんじゃ…………」と言っていたのには、さすがにツッコムべきだろうか。

気分転換、という事で俺達は、公園の入り口近くで話をしていた。

「しつかし、なんでそこまでやる気なんだ？」

俺は当然の疑問を口にした。さつきから話していると「頑張る」や「みんなに見てもらっているから」とかをよく耳にしたからだ。長谷川はその質問にちょっと驚いたが、真顔でこう言った。

「それはあなたのドラマ嫌いを直すためです！！」

このセリフを言つた時の効果音は、きつとデーテーン！！と思つた。本人は「決ました！」と思つていそうだが俺は、そんな理由かよ・・・

・・と頭が痛くなりそうだった。

そんな俺を無視して、長谷川はなおもヒートアップした。どんなことを言つていたかというと、なんか突拍子もない感じだったので、もはや聞き流していた。

## 5・9 予期せぬ衝撃

だから、だろうか。

何気なく公園の入り口 歩道と道路は区分されている の 方を見たのは、

その時に見た光景は、横断歩道を走つてくる一人の少女と、それに 気付かないトラック。少女の方は途中で気づいてしまったため、道 端で立ち止つてしまつた。

茜はその少女を助けようと動くが、それより先に いつも巻き 込まれているから体が普通に動ける 僕が動いた。

当然、僕が慌てて動いたのだから長谷川は話を中断し、僕が行く先 を見た。その瞬間、長谷川は口に両手をあてて座り込んでしまつた。 僕の目測では、トラックと少女の距離はせいぜい一十メートル。今 から走つていくと、僕は確実に怪我をする。いや、怪我だけじゃす まないかもしね。それでも僕は、一いつ思つた。

見殺しになんてできるか。

それが僕の本音。水上が僕に訊ねた時に答えた、僕の守りたいと思 うもの。

トラックは僕が飛び出してきたから慌てたのだろう。ブレーキを思 いつきり踏む音がして、ハンドルを思いつきつけたみたいだつた。 その間に僕は少女を抱きかかえ、そして、

「あなただったんですね、本宮のものは。」

「久し振りですね。まさかこんなことでお会いになるとせ。偶然つ て怖いですね。」

「図々しいですわね。」

話しているのは、いつきと篠宮ルカの二人。両方とも、当家の代表 としてきている。

「それで?妹を返して下さるんですね?」

「そうですよ。そんなに身構えないでください。何も要求しないんですから。」

「そこはありがたく思いますわ。…………レミ、来なさい。

帰りますわよ。」

「ハイお姉さま。」

「それではさよなら。」

と言つて一人は帰ろうとしたが、いつきの方から電話が鳴つた音を聴いた。それを気にせず帰ろうとしたら、

「ええ！…つとむが事故！…？…？…？…うん、それで状況は？…？…？…つて言つたが、自分で詳細話さないでよ。え？もう無理？救急車とパトカーは？あ、妹さんに呼ばせてる？運転手の人の怪我はないんだね。え？君の顔を見て顔が真っ青になつてている？それが普通だと思うんだけど。ま、急いで手配するから。」

と、途中の方はなんだかおかしな話だったが、最初の方でレミが驚いて、自宅に電話をかけてるいつきに詰め寄つて、こう訊いた。  
「つとむさんが事故に遭つたのは本当ですか！？」  
「うん、本人が電話してきたからまず間違いないね。…………

・・あ、もしもし。僕だよ。うん、そう。救急車呼んだみたいだけど、不安だからね。大至急現場に行つて。僕？僕は搬送される病院に行くから。そう。じゃ。」

いつきが電話をする前に答えた「答え」が、レミにショックを与えるのには充分過ぎた。その場に取り残された（雰囲気的に）ルカはといつと、表情を変えぬまま、何かを考えていたみたいだった。

## 5・10 守るべきもの そして……

周りが暗い。これが「死」なのか、と不意に考えてしまった。あの時かばつた少女は大丈夫だつただろうか。そう考えていたら、誰かに呼ばれてる感じがした。それは、だんだん強くなつていき、俺は「まだ死んでいない」と思い、目を開けた。

「うう…………」

目を開けてみると、真っ先に見えたのは庇かばつた少女だった。その子は、なぜ自分が助かったのか、余り分かつてないようだつた。俺としては、これを忘れてもらつて構わないんだが。

次に見えたのは、俺に必死に声をかけ続ける茜と長谷川だった。二人とも必死なようで、目が向けられてることに気付いていなかつた。なので、俺は体を仰向けにしていった（その時には少女を道路に置いていた）。

その時に、声をかけていた二人は俺が生きているのが分かつて嬉しかつたみたいだが、俺の姿を見て今度は慌て始めた。やっぱり慣れてないんだな、こういうの。そう思つて、俺は体を起こしていつた。その時、この騒ぎを知つて急いで駆け付けたのだろう、飛翔たちが人混みをかき分け俺の前に來た。

「立てるか？」

「いや、多分足がイカれてるな。立てん。」

「ま、そうしてるだけで凄いんだけどよ。仕切つていいか?」

「ああ。」

と言ひながら、俺はいつきに電話をかけた（電話もボロボロだった）。

『もしもしつとむ？何か用？』

「あ～…………事故つた。」

『ええ！…嘘！大丈夫なの！？』

「これで大丈夫だと強がれるほど、俺は頑丈じやないんだが。」

『そんな冗談はいいから！－警察は！？救急車は！？』

まくしたてるように言つてくるにつきに俺は怪訝になりながらも、辺りを見渡して説明した。

「警察は長谷川が呼んでる。救急車は西が呼んでる。」

『運転手の人は！？』

「飛翔たちに囮まれてる。」

『そつ……分かったよ。今からそいつへり寄越すから。』

『救急車無視かよ。』

『そんなこと言つてないよ。・・・・・とにかく、無事でいてね。』

『と言つて、いつきの方から電話を切つた。俺はそのままボーッとしていたら、長谷川が俺に近寄つてこう言つた。』

「なんであんな無茶したんですか？－一步間違えたら死んでたんですよ！？」

よく観ると、長谷川は涙をためていた。いますぐこでもそのまま泣きそうだ。

あまり働かない頭で考えていた。何て答えたものか、と。そして、

「はつ。」

「！？」

「無茶？あの状況で無茶しなきや、助けられなかつたんだぞ。田の前で危なくなつたやつを黙つてみてられるほど、俺は冷酷じやねえんだよ。お前だつてそうだろ？』

「そう・・・・です・・・ナビ」

「あとよ、」

「？」

「撮影、さつわとしないと遅れるだ？』

「え？なに・・・・・」

「こつちは気にせず、撮影、頑張れ。」

俺の言つた言葉が理解できなかつたのか、長谷川はしばらく固まつていた。

「お兄ちゃん電話しといたよ…………って大丈夫なの！？体起こして！？」

「ちと背中やら腰やらが痛い氣がするが、これと言つて問題はないぞ。だからよ、泣いてんじゃねえよ。」

「だつて…………私…………」

最後まで言わずに、茜は泣き出してしまった。長谷川は、俺の言つたことを理解しただろうが、それでも行こうとはしなかった。その光景を見た俺は、どうしていいのか考へる間もなく、意識を失つた。

## H&Pローグ～自分の近況・？～（前書き）

H&Pローグと書いてあります、終わりませんからね？

## Hピローグ～自分の近況・？～

ふと目が覚めた。それから体を起<sup>こ</sup>そうとしたら、十分かかった。

「ここは……病室？」

辺りを見渡すと、どうやら個室らしく俺以外の患者は見当たらなかつた。

どうしてここに？と考えていたら、意識を失<sup>う</sup>前の事を全部思い出した。

そうか……それで……とを考えをまとめていたら、看護師の人が俺の様態を見に来たのか、病室に入つてきた。そして、俺を見るなり驚いて、急いで部屋から出て行つた。

なぜそんなに驚くのか分からなかつたが、俺はそれを考えることをやめて、窓から外の景色を眺めた。その景色を見ると、ここが四階ぐらいだと推測できた。

なんであつて？ここは俺がよく（喧嘩によつて）入院してた病院だからだ。さつきの看護師も見たことがあつた。この年に入院なんて久し振りだなーと感慨にふけつていたら、突然ドアが、ドバアーン

！！！と勢いよく開いた。そこに居たのは、

「お兄ちゃん……」

と言つて嬉しそうに入つてくる妹と、それを穏やかに見守る両親の姿だつた。

「心配したんだよー？なかなか目を覚まさないからー！」

そう言いながら茜は、ベットの近くまで來た。それに苦笑しながらも、ずっと心配していたであろう妹にこいつ眞つた。

「ありがとよ。心配かけてごめんな。」

茜が言<sup>う</sup>よりも早く、親父がこいつ眞つた。

「よく生きてたな。ま、それ位じやなきや今まで死んでいただろ

うがな。」

「うつせ。それより珍しいな、親父が来るなんて。」

「当たり前だ。お前が事故に遭つたと聴いた時、普通に驚いたんだぞ。」

そんなことをやつていたらお袋が、

「元気になつたのだからいいじゃない。それより、時々見舞いに来てた人達が私には気になるんだけど?」

と言つてきた。俺が寝てる間に誰か来たのか?いつきだつたらお袋は分かつていてるから何も言わないだろう。となると、誰が来たんだ?と考えていたら、茜が急に不機嫌になつた。

「どうした?」

「そうだよお兄ちゃん!あの人たちは誰なのー?それに、どうして光さんも来てたのー?」

そんなこと俺に訊かれても分からないんだが。寝てる間に何があつたのだろうか?と不思議に思った。それを引きずるのに意味がないと判断したのか、親父がこう言つた。

「そろそろ帰るか。明日にでも退院できるか訊いてからな。」

その一言に茜とお袋は渋々と従い、「また訊くからね!」「明日にまた来るわよ」と言つて部屋を後にした。

また一人なつた俺は、今度は自分の恰好を見た。入院患者がよく着ている服で、俺の服はどこに行つたのかと探そうとしたら、「ンンン!」とドアをノックする音がした、

また誰か来たのかと思いながら時計を見ると、時刻は午後四時半。見舞いにいつきでも来たのか?と思い、「どうぞ」と言つたらドアが開いた。その時、お袋が言つていた「見舞いに来てた人達」の意味を理解した。

「本当に起きたみたいですね。・・・・・まだどこか痛みますか?」

入つてきて早々こう言つたのは、白鷺美夏だった。

「なんで俺が事故に遭つたのを知つていてるとか、ここに俺がいるこ

とを何で知っているとか、訊きたい」とが山ほどあるが、「ご足労な  
うつて。」

「いや、白鷺が何故か頬を赤らめてうつむきながら、いつにか見えたんだよ。」

「やつやつてマジマジと見られるなんて・・・・・・・私の」とおきなのですか?」

ただし、あまりにも突拍子のない言葉だったが。

たので、真剣な眼差しで私の事見ていたじゃあります

新魚力が思ひたつたあああ！！！

何言つてんだ俺！？

「ふふつ。それはありがとうございます。それで?似合いますか?」

頭を抱える俺を見て、白鷺は似合つてゐるかと一回転してから訊いた。

クルリ、と鮮やかな一回転。それを見て俺は、モデルでもやって

いたのか?と思いつながらひとまず感想をつた。

「似合つてゐる。何處かのお姫様かと思つた。  
そんなセリフは幾度となく言われたはずだ（勘だが）。」

なのに、それを聴いた時の白鷺の反応は、

た。

・・・・・頬がちょっと赤いが。

普通に褒めただけなのに、この反応はいかにも、とちこちに慣れていた。

その後少し話したが、時間が近づいたとかで帰つて行つた。

その時に、白鷺から「美夏と呼んで結構です」と言われた。何か心

境の変化でもあつたのだろうか？

美夏が去り、また暇になつた俺はとりあえず、ストレッチをした。余談だが、この病院の面会時間は午後八時までとなつてゐる（主にいつきのせい）。

それをやつていたら、急にドアが開いた。夕飯でも来たのか？？と思つてドアの方を見ると、

「そんなことして大丈夫ですか！？？」

と言いながら長谷川が入ってきた。

「大丈夫、大丈夫。体ほぐしてるだけだから。」

それに構わずストレッチを続けていたら、

「怪我人なんですから安静にしてください！」

と言つて、強制的にベッドに戻された。その時に互いの顔が近づいたが、長谷川だけ赤くなつた。俺はといふと、普通。ここまで平常心が保てるのは誰のおかげなのだろうか？ふとそんなことを思つてしまつた。

そして、気まずい空氣に。

沈黙を破つたのは、長谷川だった。

「あの後、」

「ん？ 事故の後か？」

「はい。あの後、へりが初めてに来て、八神君を搬送していきました。救急車は、何故か来ませんでした。そして、警察が来て色々と訊かれました。」

「そうなのか。ところで、あいつは？」

あいつ、で分かつたのかこう続けた。

「あの子ならどこも怪我はありませんでしたよ。それに『ありがとう』ってあなたに言つてました。」

ありがとう、か。いつも言われ慣れている言葉が、今回はくすぐつた感じだった。それを顔には出さずに、俺はこう訊いた。

「撮影はどうだつたんだ？」

「撮影はですね、無事に終わつたんですけど……」

言葉を濁す長谷川を見て、嫌な予感がした。

「事故の現場を撮影していたらしくてですね、それをドラマに入れると言つてました。あの光景がとつても感動したらしく、編集で入れる」と意気込んでいましたよ、プロデューサーさん。それであなたの事を話したら、「今度学園側に名刺送らつかな」と言つていました。よかったです。」

事の詳細を言つた長谷川は嬉しそうだった。対照的に、俺は暗澹たる思いだつた。

その後、見舞いに来たはずなのに、何故か長谷川の愚痴を俺が聴いていた。長谷川は、愚痴を言つている間に俺の事を、八神君からつとむ君、にえていた。一通り愚痴を言つてすつきりしたのか、長谷川は帰つて行つた。帰る時に、「光、これから呼んで下さいね?」と言つた。なぜみんな名前で呼ばせようとするんだろうか。俺には分からん。

さて、光(呼べと言わされたので素直に呼ぶことにした)が帰つた時の時刻は午後六時半。夕飯は光が愚痴を言つてる途中で食べていたので、シャワーを浴びて寝るだけなんだが、いかんせん、さつきまで寝ていたのか眠れない。なので、先程光に邪魔されたストレッチを開いたら、またドアをノックする音が聞こえた。今日の見舞客多くね? そう思つたが、黙つてドアを開けた。

ハピローグ - 2 見舞客 セレモニー（前書き）

六十話つて、結構キリがいいですね。

## Hピローグ -2 見舞客 そして…

その先にいたのは、

「つとむさん！？大丈夫なんですか！？」

「見舞いに来た意味はないんじゃないでしょうか？」

篠宮姉妹だった。ひょっとすると、どこかで情報が洩れてるのではないか？何の気なしにそう思ってしまう。なので、

「誰から聴いたんだ？俺がここに入院してるって。」

思わず口に出してしまった。それに答えたのは、妹 レミの方だった。

「それは…………後をつけたと言いますか…………」

「は？」

しかし、何とも歯切れの悪い答えた。それに見かねたのか、姉の方が答えた。

「あなたが事故に遭つたと聴いた時に、レミが本宮の子にどこに搬送されるのか訊いたからですわ。まったく、こんな男のために必死になつてしまつて。みつともない。」

最後の方は俺に対する悪口だつたが。

まだ根に持つてゐるなこいつ。そう思つたが、口に出すほど俺は幼稚じゃない。なので、俺は一人に部屋に入るよう促した。

「個室だなんて。だいぶ贅沢ではありません？」

「俺はいつも一人部屋だつたぞ。入院費は相手側にほとんど払わせ

たから、そんなに家計に響かなかつたが。」

篠宮姉が、部屋に入つて早々嫌味に言つてきたので、俺は、昔から入院するときは一人部屋で費用もそれほど掛かつてない、と言つた。それにレミが反応した。

「つとむさんつて、前にも入院してたのですか？」

「ああ。」ストレッチを二度再開させながら俺は言った。

「事故に巻き込まれたのは今日が初めてだが、喧嘩やら強盗やらで

巻き込まれたのは昔からだからな。その度に重傷だつたり、骨折だつたりしてよく入院してたな。」

その時に良く思つたのが、「俺、よく生きてたな。」だった。今日もそう思つたが。

それを聴いた篠宮姉妹は、絶句していた。

なぜ?と思つていたら、姉が声を震わせながらこう言つた。

「あなた・・・・・・よくそんな平氣な顔で言えますね。」

「過ぎた事は及ばざるが如し。そんな言葉を知つてゐからだろうな。

俺の口調はそんなに平然としてたわけではないのだが、聴いてた二人は黙つてしまつた。

そして、氣まずい空氣に(俺にとつて一度田)。

それに耐えられなかつたのか、姉の方がレミの手を引きながらこう言つた。

「帰りますわよ。いつまでもここにいる意味は無いのですから。」「そんなん!」

「それに、普通だつたら面会時間はとうに過ぎていますのよ。これ以上は相手側の迷惑になります。あなたも分かりますね?」

「・・・・・・・・はい。」

渋々、といった感じでレミは従つた。なお、部屋から出て行く際に「前の事はもう気にしていませんわ」と言われた。俺はとつぶに氣にしてないんだが。

さて、時刻は午後七時半。風呂に入った時、俺は今日が何日だつたか気になつた。風呂から上がり、腕時計を見たら壊れていた。携帯も同様だつた。テレビはリモコンが反応しないので、テレビカードを買ってないことが分かつた(本当は買つてあつたのだが、玲子たちが暇つぶしに見ていたため無くなつていた)。

どうすつか、と悩んでいたら、ドアがノックもなしに開いた。俺はその態度で誰だか分かつたので、ドアに目を向けずにこう言つた。

「ありがとな、いつき。・・・・・それにしても、見舞い客多く

ね？」

そう、いつきだった。いつきは、俺が寝ている（または横になつている）ベットに近づいて「」と言つた。

「どういたしまして。…………って、え？ 篠宮姉妹しか知らないはずなんだけど、他に誰か来たの？」

これは俺の両親以外で、という意味だろ？

「ああ。美夏、さん？と光も来たぞ。」

と言つたら、いつきは「しまつた……」といつ顔をしていた。

「どうした？」

「いや、多分だけど、白鷺さんは独自の情報網で、長谷川さんは西ちゃんから聞いたんじゃないかな。…………とこりで、一人とも、しかも片方は先輩なのにどうして名前で呼んでいるのかな？」

途中から俺に対する質問になつた気がする、と思つたが、隠すつもりはなかつたので俺はさつきまでこのことを正直に話した。

話を聴いたいつきは「」と、

「へえ……よかつたじやん。モテモテで。」「と、いじけて（？）いた。どうやって機嫌を直そつか。そつ考えて、俺は最終手段に出た。

「いつき。」

「なに？ 僕は今機嫌が悪いんだけど。」

「いつも助けてくれてありがとな。俺はとても感謝してる。」

「え、そ、そつかな。」

「そつだつて。俺が無茶する度に、いつもフォローしてくれるじゃん。俺、素直にありがたいと思ってるんだぜ。」

「そ、そつなんだ。…………ぼ、僕も、いつも感謝してるんだよ。」

最終手段に出ていたら、いつきが意外なことを言つた。

「？ 感謝つて？」

「だつて、僕が巻き込んでるのに僕に対する何も言わないじや

ん。それに、君は何の気なしかも知れないけど、昔は僕の事、よく遊びに誘つたじゃん。他の友達と一緒にさ。あの時から僕は敬遠されてたのに、君はそれを無視して遊びに誘つたよね。僕が怪我しても先生に怒られても『同じ生徒なんだだから怪我しても自己責任だろ。』と言つて先生に睨みを利かせたよね。』

俺がどういう意味だと訊いたら、いつきが昔話をしだした。そのことを聴いてると、当時から柄わりいな、俺。と思えた。その後もいつきの話は続いた。

「なんだかんだ言つて僕を保健室に連れてつてくれたよね。」「先公に『保健室には連れて行け』と言われたからな。そうじゃなくとも連れてくつもりだつたが。」

「保健室に入つて、君は保険医の事を無視して僕の怪我の処置をしてくれたよね。ずいぶん慣れた手つきで。」

「お前は知つてただろ? 喧嘩してると、一人で怪我の処置をしないといけないんだよ。」

「その時に僕は訊いたよね?『なんでぼくのこと、遊びに誘つてくれるの?』つて。」

「そん時、なんて答えたんだっけ?俺。」

「その時は『遊びたそうにしてたから。』つて言つていたよ。嬉しかったなあ。」

そういうえば、そんなこと言つてた気がする。その当時から僕は、かなり考え方が大人だつたらしい(らしいとは、両親が昔の僕の話をすると必ずそう言つから)。

一通り話が終わつて、何とも言い難い雰囲気。

そこで俺は、ふと氣になることを聴いた。

「なあ、」

「何?」

「今日は何日だ?」

それを訊くと、いつきが驚いた。

「え?今まで確認しなかったの?」

「ああ。」

「他の人に訊けばよかつたじゃない。今日は・・・・・五月四日。火曜日だよ。もうすぐ君の停学が解けるけど、明日は休みだよ。」となんとか聞き捨てならない言葉が聴こえた。

「五月四日? 丸々一週間ほど寝てたのか? 俺。」

「そうだよ。医者も『歩くことができない』って言ってたけど、君の回復力にはいつも驚かされるよ。あとね、停学明けて三日後に合宿だから。準備はしといてね。」

「そんな話聞いてねえ! ! ! え? 何! ? ドッキリじゃないの! ? .」

「うん。」

「チクショー . . . . .」

なんだその仕打ち! ! ? もはや強行スケジュールと変わらないじゃないか! ! ! 俺、準備なんて全くしてないぞ! ? と、どこにぶつけるべきかも分からぬ怒りに苛まれていると、いつきが帰り際、こんなことを言つた。

「パンフレットとかは君の家に置いてあるよ。それと、学校で会おうね。」

その後、俺はとりあえず瞑想していたら、いつのまにか寝ていた。翌日。医者に「もう来ないでくれ」的な視線を受けながら退院( )服は親が持つてくれた)。家に帰つてしたことは、まず合宿の準備・・・・・となるはずが、ケイタイの新調だつた。保険やらのおかげで弁償は無く、買い替えだけした(前のデータは全部消えていなかつたことには驚いた)。次に、時計の新調。これには、茜といつき(どこからともなくやつて来た)が一緒に來たが、結局自分で選んだものを買つたため、帰り道の二人の視線が痛かつた。だつて、『どっちを選ぶの?』的な視線が鬱陶(うとう)しかつたから。

そこからやつと合宿の準備をしだしたが、やつてる途中に電話がかつてくるわ、メールが来るわ、家に人が来るわで、ろくに出来なかつた(それでも夕方には七割ぐらい終わらせた)。

夕飯は、家族だけでパーティ・・・・・のはずが、どこで広が

つたのか町を巻き込んでの大騒ぎになつた。あれは、凄かつた。

そんな騒ぎも終結し、俺は明日の学校の準備と合宿の準備をしていた。ただ、持つてくるものに、『テント』や、『寝袋』はどういう事が気になつた。大体準備が終わつたので、寝た。

翌日。学校に行つた俺は、爺さんに呼ばれ、担任に呼ばれ、クラスに入つてからは女子に囲まれて、事故について訊かれた（女子はそれ以外にも訊いてきたが）。朝のホームルームで、担任が困つた顔でこう言つた。

「えへ、大変なお知らせがあります。本宮いづき君ですが、本当は女子でした。」

それと同時に、あいつは入つてきた。女子の制服を着て。

男子連中はもつてのほか、女子連中も開いた口がふさがらなかつた。もちろん俺もだ。

だつて、十年以上も一緒にいたのに、あいつは女子だと氣付かせなかつたんだぞ？

お前のほうこそ、根っからの役者じやねえか。と思つていたら、いつきが挨拶をした。

「これからもよろしくお願ひしますね、皆さん。」

笑顔で言つていたので、男子全員（俺以外）は鼻の下が伸びた。

俺はとつうと、空を眺めていた。こつう時は無視が一番だ。と思つていたんだが、いつきが俺の近くの席に座つて（空いてるのがこしかなかつた）、笑顔を向けてこう言つた。

「これからも末永く、よろしくね

「あ、ああ。よろしく。」

ちなみに、俺はまだ空を眺めている。いつきが言つた言葉に違和感を持ち、かつ、視線を合わせることをしなかつたことに若干の罪悪感を持ちながら、どうしてこんなことを？と訊こうとしたら、教室のドアが勢いよく開いた。そこにいたのは、

「あら、本宮さんじやありませんか。ようやく正体をわらす決心を

決めたのですか？」

「会長さんの言つてることとは本當だったのですね！……」  
・もしかして、正体をさらした理由って……！？  
と、いつも通り笑顔の美夏さん（年上なので、せんづけにした）と、若干ショックを受けている光だった。あんたら、ホームルームどうした？

この乱入者たち（？）の登場で、男子連中がいきりたち、普段からは想像もつかない大声で「――コロセエエエ――！」

「――」と言つて、俺に向かつて走つてきた。

反射的に俺は、窓から飛び出して校庭を走つていった。

それを見たいつきは、思いつきり笑つていた。後で憶えてろ。

美夏さんも笑つていた。あの人もいつきと同類か。

光は申し訳なさそうな顔をしていた。

俺はと、走りながら「――」

「神様のバカヤロー――！」

まだ学園生活は始まつたばかりだといふのに、もうすでに疲れがたまる。

辞めたいと思う自分もいる。だけど、こんな学園生活も悪くはないと思つてゐる自分もいた。

なので、俺はここにまだいることに決めた。何と言われようが、何と言おうが、俺は俺の『気持ち』を守ると決めていたのだから。

（終）

「終わらないからなーーー！」

1

「待たんかい、テメエ！！」

1

いい加減にしろおおーーーー

1

ハピローグ - 2 見舞客 やして…（後書き）

本当にまだ終わつませんからねーーー？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6917x/>

---

アイドルッ！

2011年11月20日17時03分発行